1970年

［昭和 45 年］

1970 年（昭和 45 年）1 月 5 日　寒波

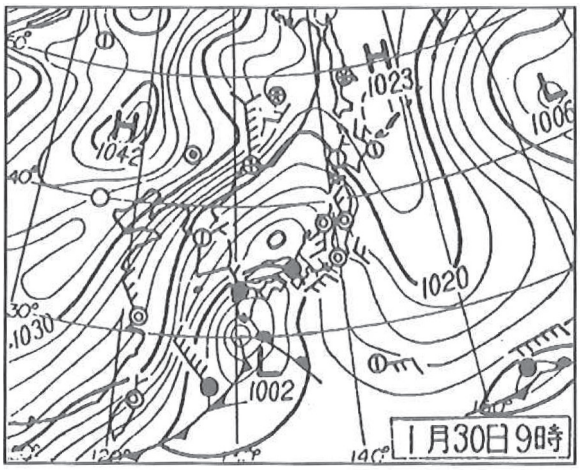
大陸高気圧は 4 日 1,070mb に発達し，顕著な冬型気圧配置となり，寒気が押し寄せ降雪が激しくなった。

15 日 9 時の積雪は芝生 18cm，一宇 17cm，穴吹 15cm，池田 14cm，徳島 1cm。

1970 年（昭和 45 年）1 月 13 日～ 14 日　火災

冬型気圧配置で季節風が強く，好天続きのため火災が続発した。（13 日，県下の火災 11 件）

1970 年（昭和 45 年）1 月 30 日～ 31 日　強風雨（低気圧）



東支那海南部に発生した低気圧が，発達して四国沖を通過したため全国的に強風雨となった。

徳島の最大風速は西北西の風 15.0m/s，日降水量は椿泊 119㎜，日和佐 88㎜，徳島 68㎜，小松島 95㎜。

1970 年（昭和 45 年）2 月　少雨

月初めは冬型の気圧配置となったが長続きせず，中旬までは移動性高気圧におおわれる日が多かった。下旬は北高型で雲が多かったが，月降水量は 9.0㎜で平年の 15％に当たり，開設以来第 2 位の少雨の月となった。

1970 年（昭和 45 年）3 月 8 日　上板町の山火事

11 時 20 分頃，板野郡上板町引野の山林から出火，火は約 12 時間に渡って延焼を続け約 100ha を焼失した。この火災で一時 10 数戸の民家が類焼の危機に見舞われたが，被害はなかった。なお，この山火事は延焼面積において，県下で戦後最大の規模となった。

1970 年（昭和 45 年）3 月 30 日　たつまき

正午頃，鴨島町上下水と広畑地区一帯で局地的な「たつまき」が起り，ビニールハウス 10 棟が倒壊または半壊した。地元の人の話ではゴォーと云う音ともに，幅 50cmのたつまきが西から東へ約 800m にわたって吹き抜けたとのことであった。（徳島新聞）

1970 年（昭和 45 年）3 月　低温

下旬中頃まで冬型の気圧配置がよく現われ，2 日，5 日，12 日，17 日，20 日頃を中心に寒波に見舞われた。月平均気温は 6.1℃で平年より 2.0℃低く，開設以来第 3 位の低温の月となった。

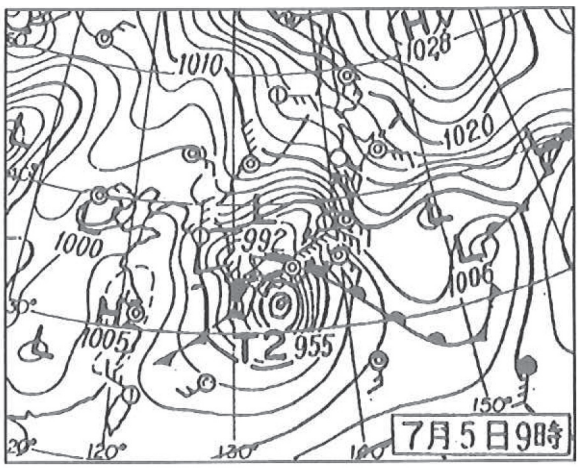
（徳島県農林水産部調べ）

種　別	作付面積	被害面積	被害推定量	被害推定金額
麦　類	ha 9,914	9,914ha （収穫皆無 4,910）	t 15,032	千円 874,259
そ　菜	2,912	1,566	23,780	730,720
種用大根	76	76	88	20,240
果　樹	1,395	770	720	110,350
計	14,297	12,326	39,620	1,735,569

1970 年（昭和 45 年）6 月　寡照

10 日から 27 日までの長雨で，中旬から下旬にかけて日照時間は少なく，月日照時間は 87.3 時間で平年の 50% に当たり，寡照第 2 位の記録となった。また，不照日数は 14 日もあった。

1970 年（昭和 45 年）7 月 5 日　強風雨（台風 2 号）

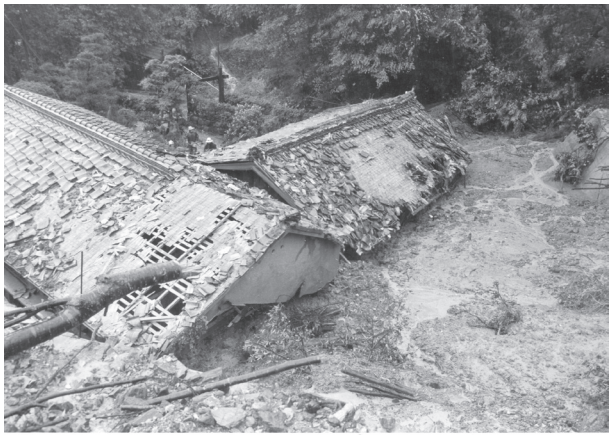


宮古島付近を通り北東に転向した台風 2 号は，5 日 18 時 30 分頃紀伊半島に上陸した。その後北西に向きを変え，大阪湾を経て日本海に入り西進する異常な経路をとったが，前線活動も弱く被害は軽微であった。

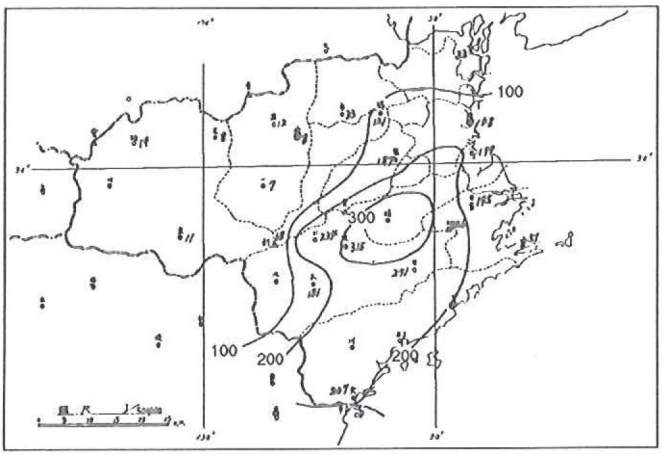
徳島の最大風速は北北東の風 15.0m/s，総降水量は東部山間部で多く，鬼籠野 250㎜，剣山 244㎜，日降水量　鬼籠野 191㎜，剣山 165㎜，穴吹 111㎜，徳島 49㎜。

床下浸水 15，田冠水 2ha，堤防決壊 1，道路損壊 4，山崩れ 10（県警調べ）

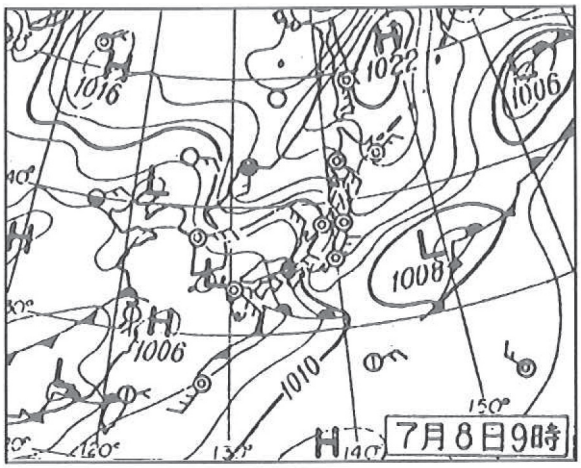
1970 年（昭和 45 年）7 月 8 日　大雨（梅雨前線）



死者を出した徳島市八万町の土砂くずれ現場（徳島新聞社提供）



雨量分布図



南二軒屋町八万小学校前道路（徳島新聞社提供）

早朝，台風 2 号くずれの低気圧が九州西方海上に接近し，四国南岸沿いに停滞していた梅雨前線を刺激して県南を中心に大雨が降った。日和佐で 7 時に 1 時間 90㎜，徳島で 8 時に 1 時間 53㎜，富岡で 51㎜と短時間に強い雨を降らせたため多大の被害が出た。

日降水量　福原旭 193㎜，大竜寺 140㎜，小松島 120㎜，徳島 86㎜。

城南台地の擁壁崩壊　死者 1，家屋の全壊 1，一部破損 1，床上浸水 252，床下浸水 3,454，田冠水 867ha，畑冠水 237ha，山崩れ 7，道路損壊 2，堤防欠壊 1，鉄道被害 3

1970 年（昭和 45 年）4 月～7 月中旬　長雨

3 月の低温，4 月の多雨，6 月の寡照，7 月のつゆ明けの遅れなど，昭和 38 年 4 月～6 月の長雨以来の異常気象により広島，岡山，香川，徳島県を中心に，西日本一帯にわたり農作物等に大きな被害が生じた。徳島県でも野菜・果樹等の農作物に大きな打撃を受けた。

被　　害　　（徳島統計調査事務所調べ）

作　物　名	被害面積	被害量	被害全額
水　稲	1,420ha	373t	千円 50,700
麦　類	9,680	18,400	1,082,700
野　菜	3,000	32,200	1,628,400
果　樹	1,000	984	94,300
そ の 他	1,290	33,680	65,400
計	16,400		2,921,500

1970 年（昭和 45 年）7 月 22 日　オゾンの大量発生

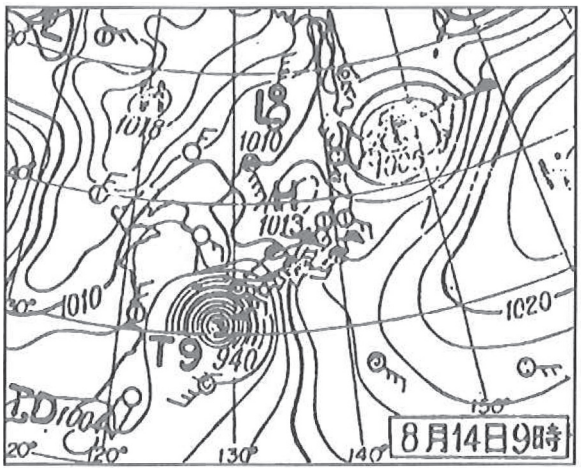
22 日午後，阿南市と海部郡下灘地方で中学生，一般住民など 1,416 人が喉･胸の痛みを訴えたが，県公衆衛生課の調査によりオゾンの大量発生が原因であることが判明した。

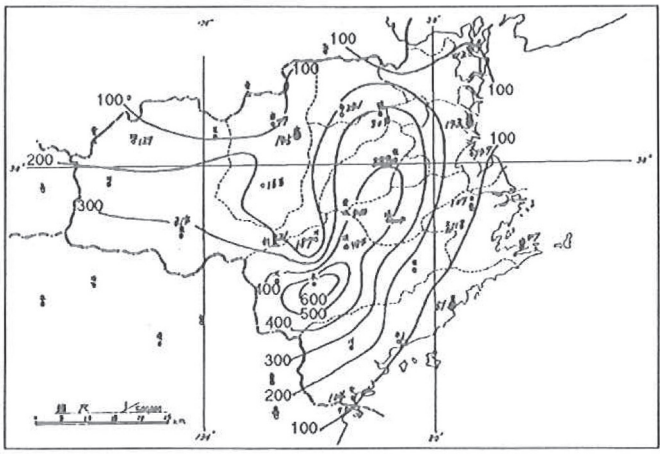
1970 年（昭和 45 年）7 月 31 日～8 月 1 日　大雨（熱低）

奄美大島近海から九州西方海上を北上した台風 6 号くずれの熱帯性低気圧の影響で，県南は大雨となり，総降水量で宍喰 288㎜，日和佐 262㎜，徳島 28㎜を観測した。日降水量は宍喰で 201㎜を観測した。

床下浸水 20，田冠水 174ha，山崩れ 6

1970 年（昭和 45 年）8 月 14 日　暴風雨（台風 9 号）





雨量分布図

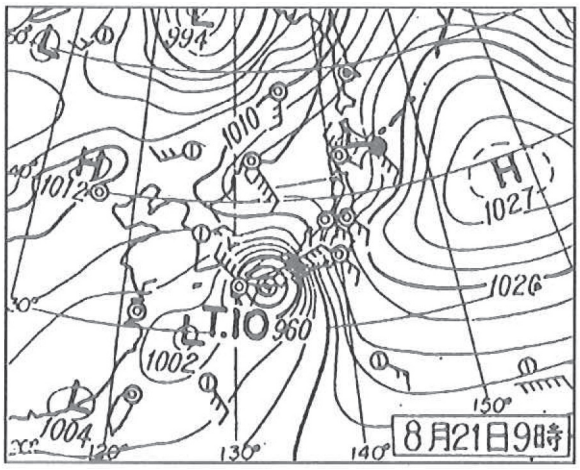
山からの鉄砲水が岩石を押し出す北灘町大浦　手前は国道11号線
（徳島新聞社提供）

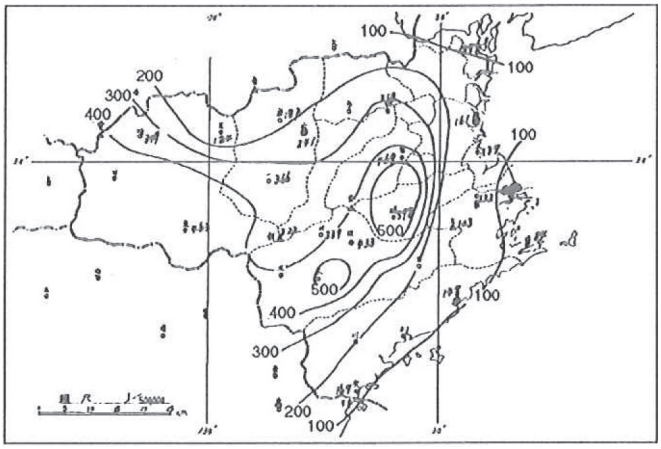
台風 9 号は沖縄本島，奄美諸島を暴風雨圏に巻込み北上して，14 日 23 時頃，長崎市に上陸（945mb），山陰を斜めに横切り，15 日朝日本海に入った。典型的な夏型台風であった。このため比較的雨量の少ない阿讃山脈沿いに大雨が降り，板野，鳴門，徳島市を中心に被害が出た。

最大風速は南南東の風 20.0m/s，最多雨域総降水量は木頭 672㎜，江田山 578㎜，徳島 173㎜。日降水量は木頭 576㎜，江田山 515㎜，徳島 133㎜。負傷者 6，家屋の全壊 1，半壊 1，一部破損 5，非住家被害 11，

床上浸水 105，床下浸水 1,126，田冠水 236ha，畑冠水 6ha，道路損壊 3，橋梁 1，堤防 6，山崩れ 34，鉄道被害 3，罹災世帯 107，罹災者 333

1970 年（昭和 45 年）8 月 21 日　暴風雨（台風 10 号）





雨量分布図

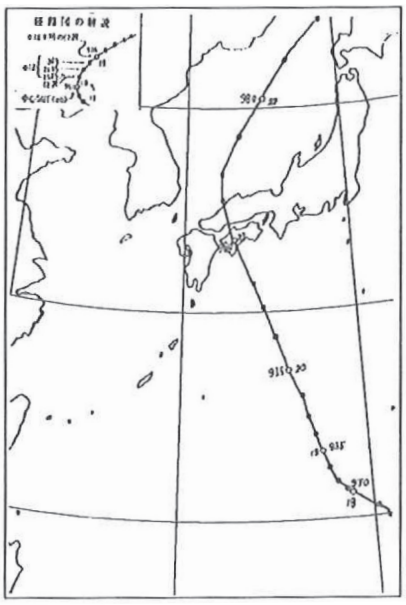
北々西進して高知県西部の佐賀町付近に 8 時すぎ上陸した台風 10 号（962mb）は，四国西部を縦断し日本海に入り，四国・中国・九州・近畿の一部を暴風圏に巻き込んだ。特に高知では高潮で未曽有の災害が発生した。台風の転向点は北緯 36 度付近の高緯度のため徳島県は長時間暴風雨にさらされ，台風 9 号に続く来襲で河川は増水し，吉野川の氾濫で穴吹町舞中島に大きな被害が発生した。

最多雨域総降水量は日早 700㎜，福原旭 598㎜，木頭 508㎜，徳島 161㎜。日雨量は福原旭 384㎜，京上 303㎜，徳島 126㎜。最大風速は南南東の風 24.5m/s。

園瀬川法花橋付近（徳島新聞社提供）

死者 6，負傷者 6，行方不明 2，家屋全壊 19，半壊 45，流出 2，床上浸水 406，床下浸水 4,767，一部破損 36，非住家 72，田流出・埋没 14ha，田冠水 1,739ha，畑流出・埋没 15ha，畑冠水 372ha，

園瀬川法花橋付近（徳島新聞社提供）



経路図

道路損壊 26，橋梁 4，堤防 7，山崩れ 190，鉄道不通 3，通信 159 回線，船舶 1，罹災世帯 475，罹災者 1,451

1970 年（昭和 45 年）9 月　高温

太平洋高気圧の勢力が強く，気温は月末まで平年より高めに経過した。月平均気温は 25.1℃で平年より 1.9℃高く，開設以来第 2 位の記録となった。

1970 年（昭和 45 年）11 月 18 日～ 20 日　大雨（低気圧）

四国沖に発生した土佐沖低気圧は，殆んど停滞して県下に大雨を降らせた。

総降水量は徳島 109㎜（85㎜），小松島 122㎜（96㎜），椿泊 162㎜（112㎜）。なお，（　）内は日降水量である。

山崩れ 1，非住家 1

1970 年（昭和 45 年）12 月 13 日　強風雨（低気圧）

低気圧が発達しながら日本海を北東に進み，風雨が強まった。

徳島の最大風速は西の風 18.3m/s，日降水量は宍喰 122㎜，川上 113㎜，徳島 25㎜。

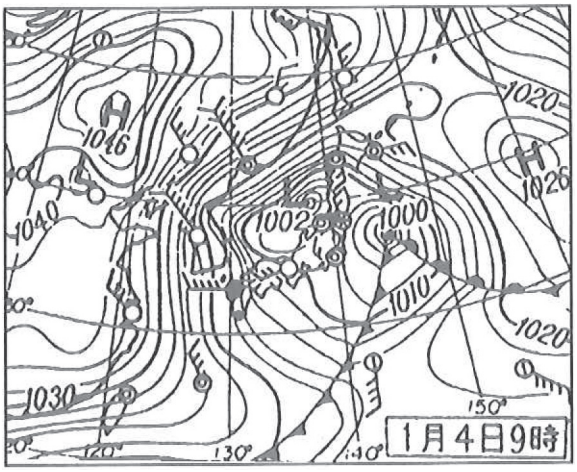
1971年

［昭和 46 年］

1971 年（昭和 46 年）1 月 4 日～ 5 日　強風

低気圧が日本海を通過し，5 日は北海道沖で 970mb に発達した。このため，4 日から 5 日にかけて顕著な冬型となり，冷え込むとともに徳島で最大風速は西北西の風 16.0m/s の強風が吹いた。

積雪は徳島 3cm，鬼籠野 5cm。



1971 年（昭和 46 年）2 月上旬　寒波

1 月末から 2 月上旬にかけ冬型気圧配置が続き，寒波が来襲した。西部山間部では連日雪となり，交通機関は麻痺状態となった。池田町では 1 日から 3 日までに約 20cmの積雪があった。

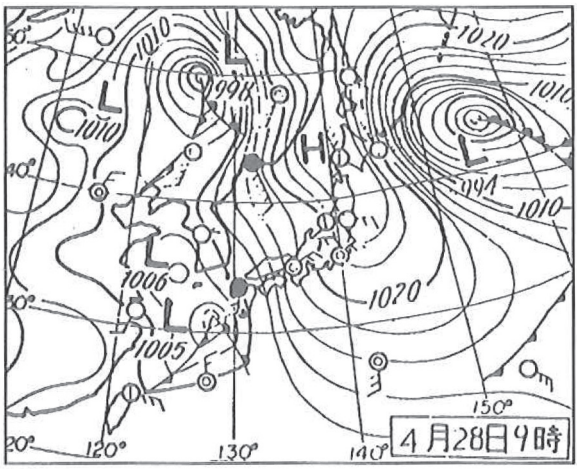
1971 年（昭和 46 年）3 月 2 日～ 3 日　強風，大雨（低気圧）

2 日夜から 3 日にかけて二つ玉低気圧が通過し，強風となり県南では大雨となった。この強風により鳴門海峡では養殖ワカメが海岸へ打ち上げられるなど被害がでた。

1971 年（昭和 46 年）3 月　少雨，多照

この月は例年に比べ好天の日が多く少雨，多照の月となった。月降水量は 33.5㎜で平年の 36% に当り，月日照時間は 219.2 時間で平年の 12% に当り，順位は何れも開設以来第 4 位となった。

1971 年（昭和 46 年）4 月 28 日～ 29 日　強風雨（低気圧）



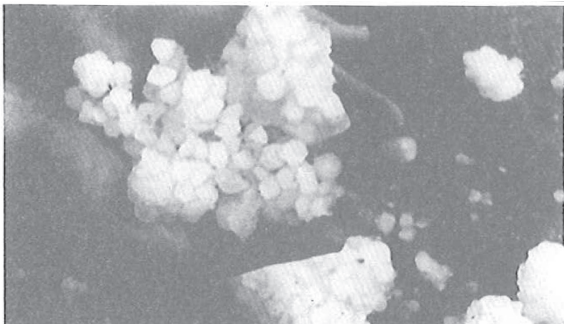
28 日から 29 日かけて二つ玉低気圧が通過し，最大風速は南南東の風 13.8m/s を記録し県南では大雨となった。

日降水量は宍喰 172㎜，川上 138㎜，徳島 48㎜。

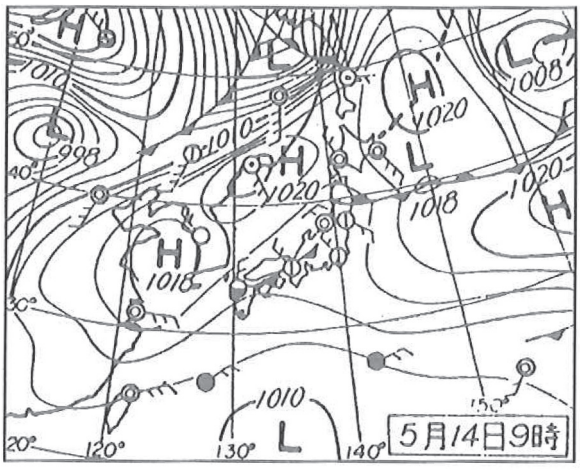
1971 年（昭和 46 年）1 月～ 4 月　空気乾燥

1 月から 4 月に至る期間，湿度は全般に低く，特に 1 月と 3 月には火災の続発が目立った。月平均湿度は平年より，1 月 60% で 7%，2 月 61% で 6%，3 月 57% で 12%，4 月 66% で 6% 低かった。

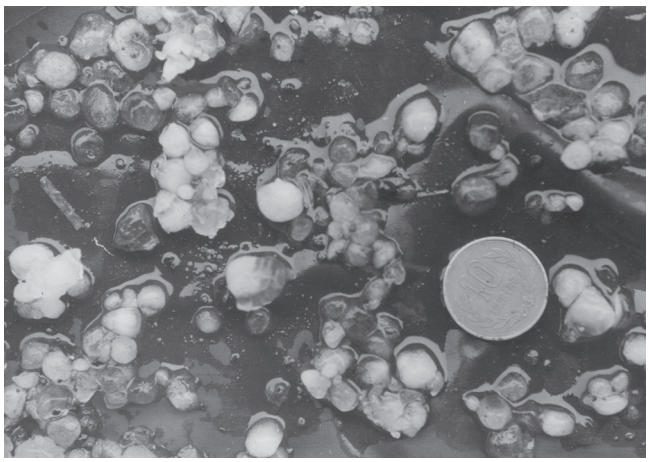
1971 年（昭和 46 年）5 月 14 日　降ひょう，落雷



阿南市直径 25m/m のヒョウ（徳島新聞社提供）



低気圧が日本海を通過し，この中心から南西にのびる寒冷前線が 13 日午後から 14 日にかけて西日本を通過した。また上空には寒気が流入し，大気の成層は不安定となり，西日本各地で発雷した。県下では，14 日の 11 時 45 分頃から約 30 分間，阿南市南部から海部郡北部にかけ，直径 2.5cmのひょ



阿南に直径 25m/m のヒョウ（徳島新聞社提供）

うが降り，負傷者がでたほか，農作物に被害があった。また落電による火災が 4 件と停電事故が発生した。

葉タバコ等の被害面積 13.5ha，被害額 715 万円（県農林水産部調）

1971年（昭和46年）6月3日～7月1日　長雨

阿南市の市営住宅で裏山がくずれ落ちる（徳島新聞社提供）

四国地方は 6 月 3 日に梅雨に入った。梅雨前線が本州南岸沿いに停滞し，この前線上を低気圧が次々に発生，通過したため天気がぐずついた。この期間の雨量は，徳島市内で 188㎜で平年より少なめであったが，梅雨入りが早く，麦の刈取期に当った阿波，麻植，名西郡などでは，穂発芽や穀粒の変色腐敗等で品質が低下し焼却処分をしたところもあった。

被　害　表　　（徳島統計調査事務所調べ）

種　　別	被　害　面　積	被　害　量	被　害　金　額
小　　麦	1,140 ha	740 t	45,214千円
ビ　ー　ル　麦	820	497	30,963
裸　　麦	5,210	3,470	220,692
計	7,170	4,707	296,869

1971 年（昭和 46 年）6 月 8 日　上那賀町の火災

2 時頃，那賀郡上那賀町の宮浜中学校北東校舎から出火，木造 2 階建の同校舎，棟続きの木造 2 階建の本館，別棟の鉄骨平家建の工作室及び木造平家建の体育倉庫の計 4 棟延面積 1,252㎡を全焼した。さらに隣接の木造 2 階建の上那賀町役場の庁舎（延面積 437㎡）を全焼して 4 時過ぎ鎮火した。なお，この火災で役場の重要書類は殆んど焼失し，中学校では講堂兼公民館を仮の教室として授業を実施した。

被害額　約 5 千万円（上那賀町役場調べ）

1971 年（昭和 46 年）7 月 18 日　降ひょう

日本付近は気圧の谷となり，上層ではかなり強い寒気が流入し気層が不安定となった。15 時 30 分頃から約 30 分にわたって阿南市伊島と椿町蒲生田地区でひょうが降り（直径 1 ～ 2cm），早期米に被害があった。

1971 年（昭和 46 年）7 月 24 日～ 25 日　大雨（梅雨前線）

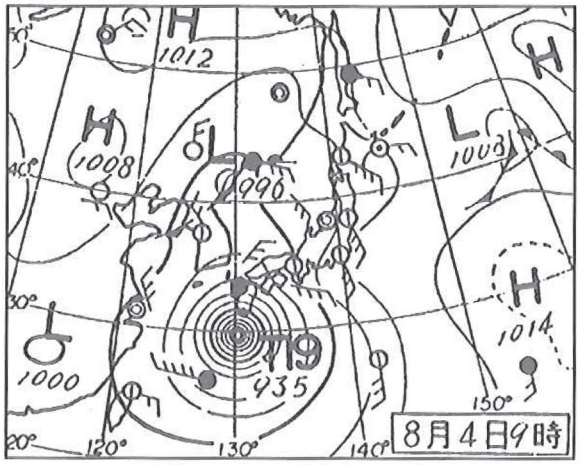
梅雨前線の活動が活発となり，県南では大雨となった。日降水量は川上 232㎜，宍喰 141㎜で，総降水量は 300㎜を超えた。

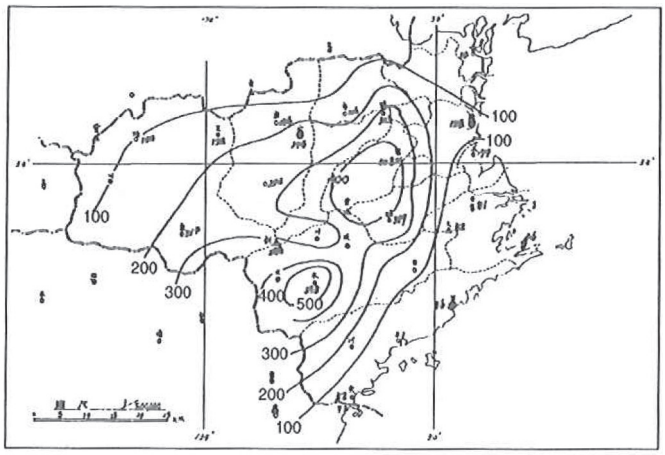
1971 年（昭和 46 年）8 月 4 日～ 5 日　暴風雨（台風 19 号）

台風 19 号は硫黄島の南西海上から北西進し九州西岸をかすめ，5 日 9 時 50 分頃，長崎県島原半島に上陸（950mb）した。5 日夜日本海に入り，速度を早めながら 7 日 12 時には宗谷海峡に達し，温帯低気圧となった。この台風は通過するまでは移動速度が遅く，また大型台風であったため，徳

島から 300㎞を超える遠距離を通ったにもかかわらず，長時間にわたって継続的に強い風雨をもたらした。

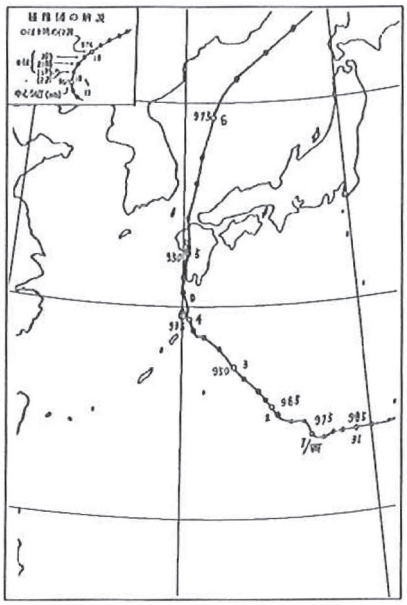
徳島の最大風速は南南東の風 21.7m/s，総雨量 128.5㎜，最多雨域は木頭 593㎜，江田山 440㎜。床下浸水 4，非住家 1，田冠水 63ha，畑冠水 2ha，道路損壊 7，山崩れ 14，橋梁 1，鉄道 1，通信被害 60 回線





雨量分布図

強風に倒されて歩道をふさぐ街路樹　徳島市幸町で（徳島新聞社提供）

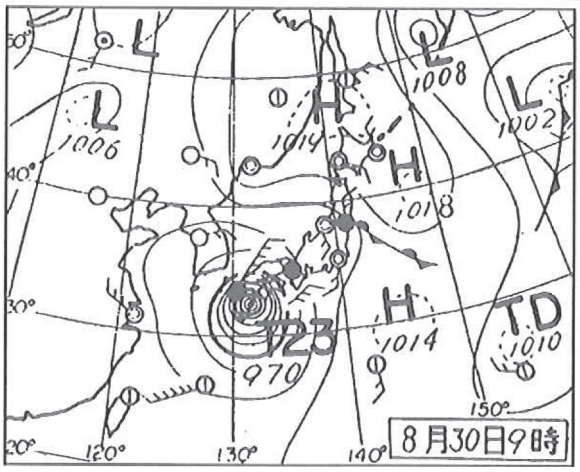


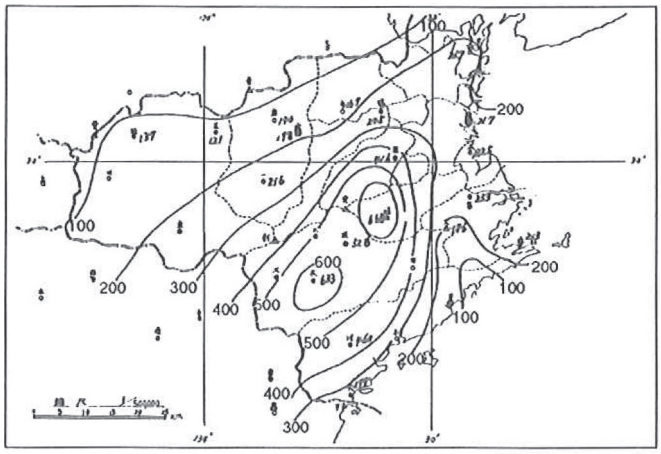
経路図

1971 年（昭和 46 年）8 月 30 日　暴風雨（台風 23 号）

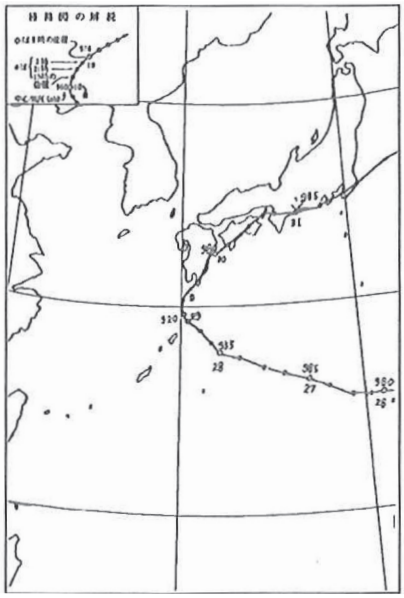
台風 23 号は南鳥島の南海上からゆっくり西進して鹿児島の南方海上で転向し，29 日 23 時 30 分佐多岬に上陸した。日向灘を経て 30 日 20 時まえ，高知県南国市に再上陸し，徳島県中部（975mb）を通り大阪湾，紀伊半島，東海道を東へ進んだ。この台風は 8 月台風には珍しく大型で強く，異常なコースをとったため，九州から関東にわたる広範囲に大きな被害をもたらした。県下では那賀川中流で 30 日午後 60㎜以上の強雨が 3 時間程続き，ダムの放流と相まって局地的に大きな水害をもたらした。このため鷲敷町では災害救助法が発令された。

徳島の最大風速は南東の風 21.3m/s, 総雨量 216㎜。最多雨域は福原旭 668㎜, 木頭 633㎜。死者 2，負傷者 6，床上浸水 230，床下浸水 2,258，非住家 3，田冠水 812ha，畑冠水 350ha，道路損壊 11，橋梁 2，堤防 2，山崩れ 45，通信 519 回線，罹災世帯 230，罹災者 852





雨量分布図



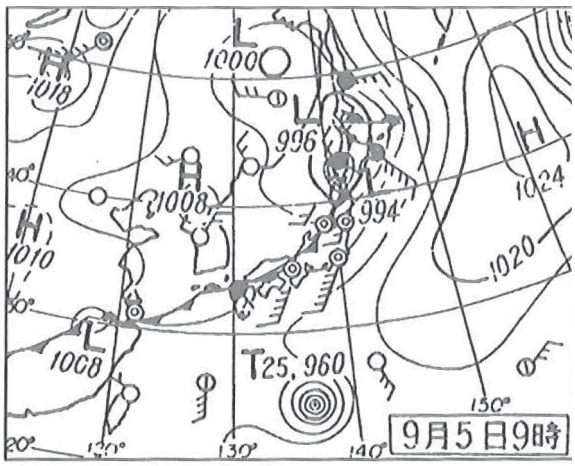
経路図

山崩れで国道 193 号線ストップ　相生町日野谷発電所付近で（徳島新聞社提供）

鷲敷署隣に流されてきた材木（徳島新聞社提供）

水没した水稲　阿南市福井町で（徳島新聞社提供）

1971 年（昭和 46 年）9 月 5 日～6 日　大雨（前線）



日本海から南下した前線が本州を横断して停滞し，北上してきた台風 25 号の影響で前線活動が活発となり雷を伴う大雨が県南部を中心に降った。

日降水量は木頭 194㎜（227㎜），坂州 156㎜（204㎜），徳島 16㎜。なお，（　）内は総降水量である。

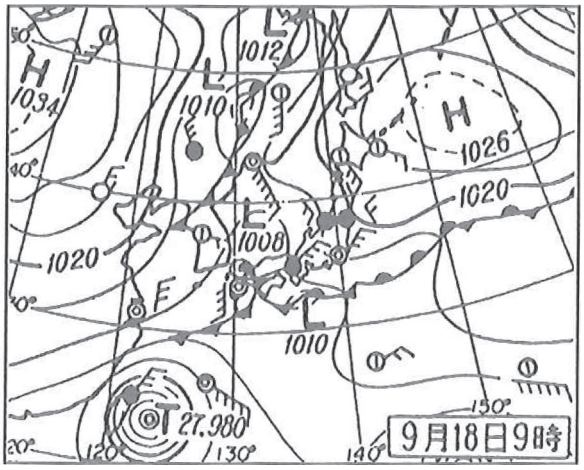
1971 年（昭和 46 年）9 月 3 日～中旬　異常潮位

太平洋岸を中心に 3 日夕刻から記録された異常潮位は，九州・瀬戸内海にも及び，6 月頃峠に次第に低くなったが月末まで続いた。小松島港における潮位のピーク時は，平常より 25cm前後高く，5 日から 6 日かけては大潮と重なって，床下浸水などの被害が発生した。原因としては，黒潮の日本沿岸接近，大潮の時期，前線，台風等による気象潮とその大量の降水等の悪条件が重なったという見方が強いが，詳しい原因は不明である。

被　　害　　（県警調べ）

月　　日	区　　分	鳴　門　市	徳　島　市	小 松 島 市	阿　南　市	計
9 月 5 日	床 下 浸 水	5	0	0	18	23 戸
	道 路 冠 水	2	1	1	1	5ヵ所
9 月 6 日	床 下 浸 水	0	2	0	25	27 戸
	道 路 冠 水	0	1	1	2	4ヵ所

1971 年（昭和 46 年）9 月 17 日～18 日　大雨



16 日から 18 日かけて，本州南岸に秋雨前線が停滞し，台風 27 号が南太平洋上にあって西進した。この影響で前線が活発化し，四国沖を小低気圧が通過した。最多雨域の川上では日降水量 249㎜，総降水量 261㎜を記録した。宍喰 223㎜（232㎜），徳島 40㎜（48㎜）。なお，（　）内は総降水量である。

床下浸水 5，田冠水 130ha，山崩れ 3

1971 年（昭和 46 年）11 月　少雨

高気圧におおわれることが多く，降水量は 20.0㎜で平年の 22% に当り，開設以来第 5 位の少雨の月となった。

1971 年（昭和 46 年）12 月上旬～中旬　異常乾燥

一時的に冬型の気圧配置となったが長続きせず，高気圧におおわれる日が多く，空気は乾燥し火災が続発した。上旬の湿度は 57%で平年より 13%低く，中旬は 62%で 7% 低かった。

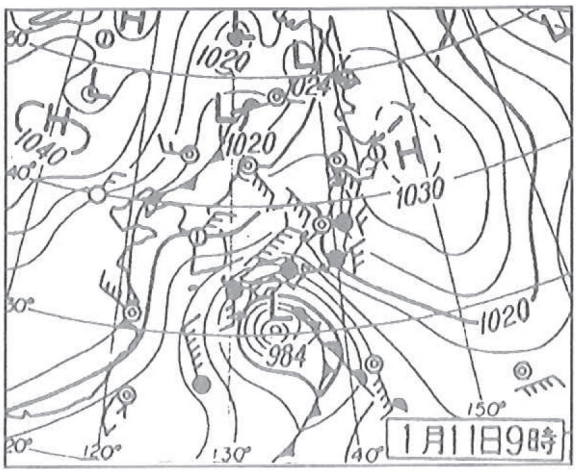
1972年

［昭和 47 年］

1972 年（昭和 47 年）1 月 11 日　大雨（低気圧）

台湾低気圧が発達して四国沖を通過（984mb）したため大雨となり，小松島市和田島，那賀川町今津，鳴門市里浦の各海岸では収穫期をひかえた養殖ワカメやノリなどが荒波により大きな被害を受けた。

徳島の最大風速は北北東の風 11.7m/s，日降水量は徳島 45㎜（74㎜），鬼籠野 67㎜ (132㎜），一宇 52㎜（95㎜）。なお，（　）内は総降水量である。



1972 年（昭和 47 年）1 月～ 2 月中旬　高温

冬型の気圧配置は弱く長続きせず，寒波の吹き出しもなかったので非常に高温となった。

1 月の平均気温は 8.0℃で，平年より 2.9℃高く，開設以来第 1 位の高温の月となった。また，2 月上旬は平均 6.7℃で平年より 2.0℃高く，中旬は 7.8℃で平年より 2.8℃高かった。

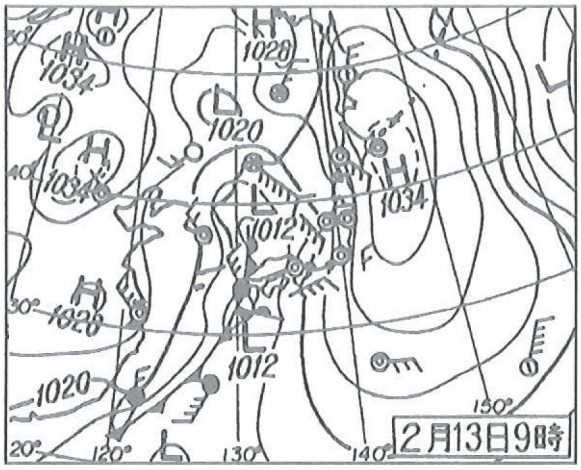
1972 年（昭和 47 年）1 月～ 2 月　多雨

高温多湿で 1 月の月降水量は 119.5㎜で，平年の 2.6 倍に当り開設以来第 3 位，2 月の月降水量は 205.0㎜で，平年の 3.8 倍に当り第 1 位の多雨の月となった。

1972 年（昭和 47 年）2 月 10 日　大雨（低気圧）

低気圧が発達しながら四国沖を通過したため，9 日夜から降り始めた雪は，10 日朝まで断続的に降り続いた。池田 39cm，一宇 35cm，岩倉 33cm，穴吹 10cm，徳島 1cmの積雪となった。このため山間部ではバスがストップするとともに国鉄のダイヤが乱れ，臨時休校や停電事故が相次いだ。また，農作物や果樹にハウスの倒壊や枝折れによる被害が出た。

1972 年（昭和 47 年）2 月 13 日　強風雨（二つ玉低気圧）



二つ玉低気圧が発達して通過したため風雨が強まった。徳島の最大風速は南南東の風 15.7m/s，日降水量は 52㎜を観測した。

山崩れ 4

1972 年（昭和 47 年）2 月 26 日　大雨・強風（二つ玉低気圧）

二つ玉低気圧が発達しながら通過したため風雨が強まり，徳島の最大風速は南東の風 12.3m/s，日降水量は 77㎜，川上では日降水量 187㎜を記録した。このため鳴門海峡の養殖ワカメ，海南町浅川湾の養殖ヒロメ（ワカメの一種）などに大きな打撃を被った。

1972 年（昭和 47 年）3 月 20 日　高温（日本海低気圧）

低気圧が日本海を発達して通過したため，南から暖気が流れ込んだ。このため異常高温となり徳島の最高気温は 22.4℃で半年より 8.8℃高く，日平均気温は 17.9℃で平年より 9.2℃も高くなった。

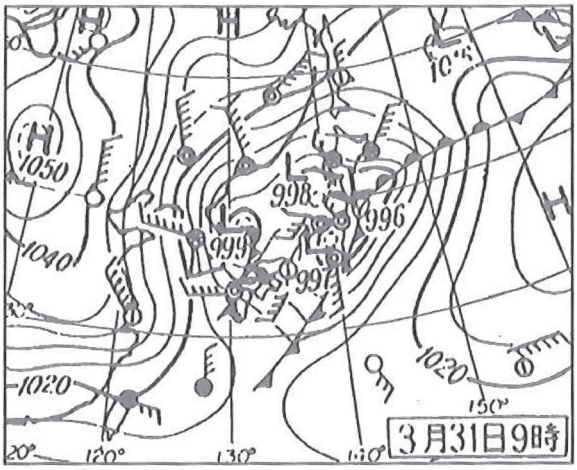
この日は，また強風が吹き，春一番となった。

徳島の最大風速は西北西の風 11.3m/s，最多雨域は宍喰で日降水量 49㎜，総降水量 83㎜。

1972 年（昭和 47 年）3 月 31 日　強風（低気圧）

日本海を通過した低気圧により強風が吹き，日本近海では海難事故が続発した。

徳島の最大風速は西北西の風 17.7m/s。



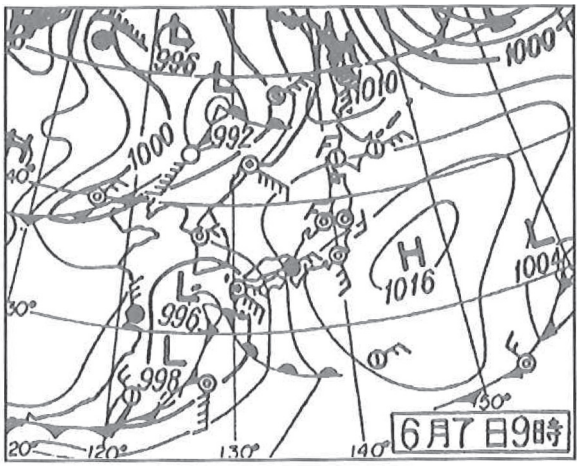
1972 年（昭和 47 年）4 月 1 日～2 日　おそ雪

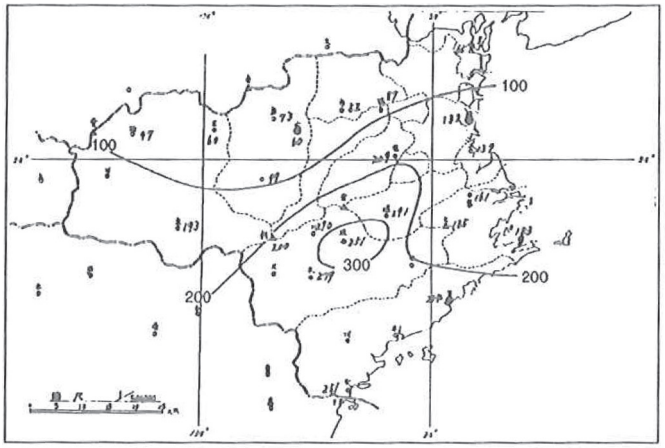
31 日に低気圧が日本海を通過した後，冬型の気圧配置となり日本市内でも雪がちらついた。これは終雪の遅い記録としては，開設以来第 3 位となった。京上 12㎝

1972 年（昭和 47 年）5 月 4 日　大雨（低気圧）

低気圧が発達しながら山陰沖を通過し，県下は大雨となった。

徳島の最大風速は 12.7m/s，日降水量は宍喰 196㎜，川上 191㎜，日和佐 86㎜，徳島 62㎜





雨量分布図

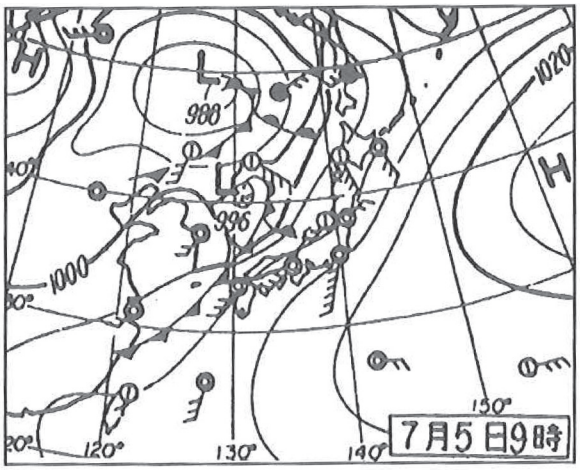
1972 年（昭和 47 年）6 月 7 日～8 日　大雨，強風（低気圧）

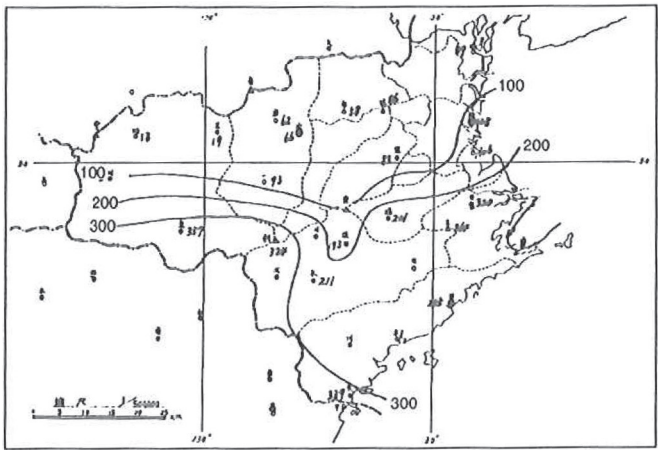
台風くずれの低気圧が九州西方から日本海を通過し，梅雨前線を刺激したため大雨となった。

徳島の最大風速は 19.3m/s，日降水量は坂州 351㎜，福原旭 291㎜，徳島 132㎜（8 日 5 時～6 時の 1 時間降水量 60.5㎜　開設以来第 1 位の記録）。床上浸水 1,276，一部破損 1，田冠水 50ha，畑冠水 10ha，道路損壊 4，山崩れ 8

集中豪雨　徳島市大原町（徳島新聞社提供）

1972 年（昭和 47 年）7 月 4 日～6 日　大雨（前線，湿舌）



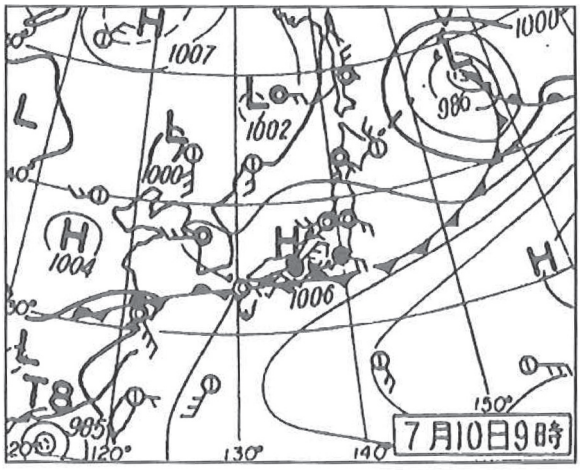


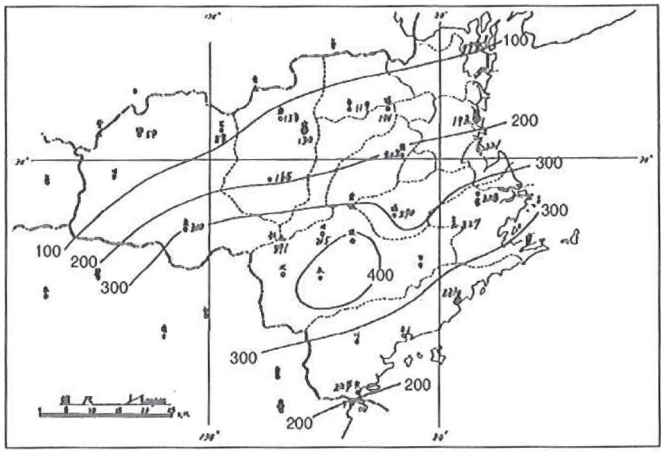
雨量分布図

3 日朝，黄河下流に発生した低気圧は黄海で 992mb に発達し，ゆっくり東に進んで，5 日朝には日本海に入った。この低気圧に向って東支那海から湿った暖気が流入し，西日本では雷を伴った局地的大雨が群発した。この大雨で高知県繁藤の大山崩れ，宮城県蝦野の山崩れ，天草竜ヶ渓の山崩れ等，生き埋め事故が続発した。県内でも阿南市を中心に家屋の浸水，山崩れなど被害が出た。

多雨域の総降水量は，山口 556㎜，富岡 320㎜（159㎜），京上 357㎜（286㎜），徳島 108㎜（55㎜）。なお，（　）内は日降水量である。

1972 年（昭和 47 年）7 月 10 日～ 13 日　大雨（梅雨前線）





雨量分布図

低気圧は 11 日から 13 日にかけ東支那海をゆっくり東進した。九州西岸に接近し，西日本の上空には湿った南西気流の流入が続き前線の活動が活発となって，九州北部，山陰，浜田，呉，三次と豪雨が襲い，宍道湖氾濫，富士の大沢崩れ，奥三河等災害が続いてゲリラ梅雨とも言われた。

県下の最多雨域は剣山南東斜面の日早で総降水量 617㎜（245㎜），木頭 459㎜（205㎜），北川 533㎜（290㎜），徳島 193㎜（152㎜），富岡 328㎜（226㎜）。なお，（　）内は日降水量である。

家屋全壊 1，半壊 1，床上浸水 10，床下浸水 489，非住家 2，田冠水 175ha，畑冠水 81ha，道路損壊 5，山崩れ 2，堤防 2，罹災世帯 11，罹災者 38

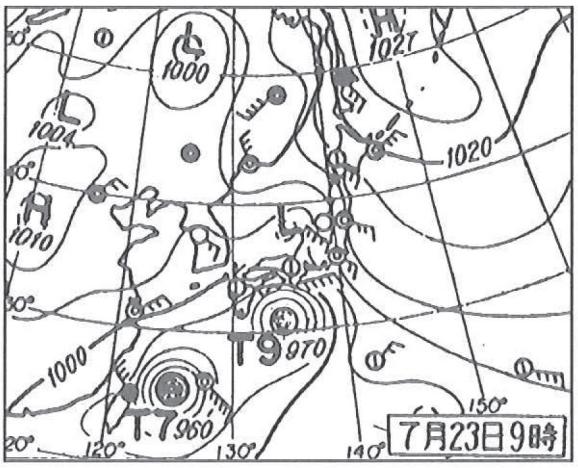
1972 年（昭和 47 年）7 月 23 日～ 24 日　大雨，強風（台風 9 号）

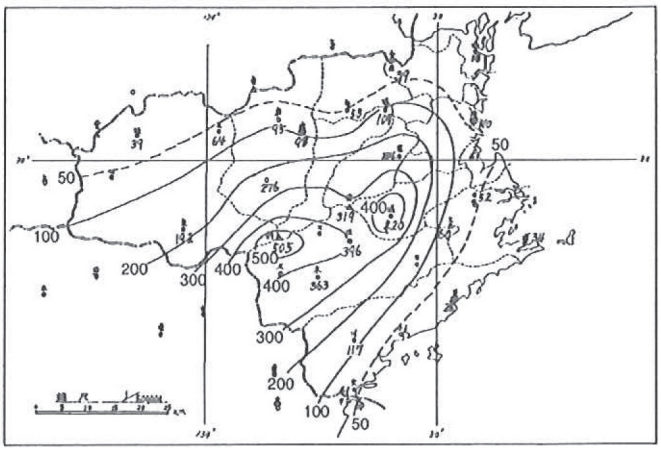
台風 9 号はウエーク島の南海上から北西進し，四国西部を暴風圏にまき込んで 23 日 20 時頃，大分県南東岸に上陸し日本海西部を北上した。この台風は，四国はるか南海上を通過したため被害は軽微であったが，各地に大雨をもたらした。

最多雨域　632㎜（日早）。総降水量は剣山 505㎜（274㎜），木頭 363㎜（206㎜），徳島 40㎜（30㎜）。

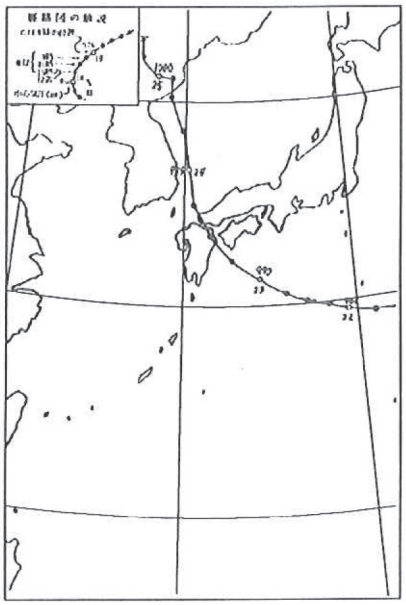
最大風速は南東の風 16.0m/s

家屋一部破損 1，道路損壊 2，山崩れ 5





雨量分布図



経路図

1972 年（昭和 47 年）7 月下旬～ 8 月　異常潮位

台風 7 号，9 号の影響と大潮が重なって，西日本一帯の沿岸では 7 月下旬から 8 月中頃まで異常潮位が続いた。その後平常に戻り始めたが，25 日頃から再び潮位が高まり月末まで続いた。小松島港での潮位は 2 月 23 日頃から 10 ～ 20cm 高くなり，27 日には最大偏差 28cmを記録した。27 日から 29 日と 8 月 10 日，26 日は大潮と重なったため，小松島市内の一部で道路が冠水したが被害は殆んどなかった。

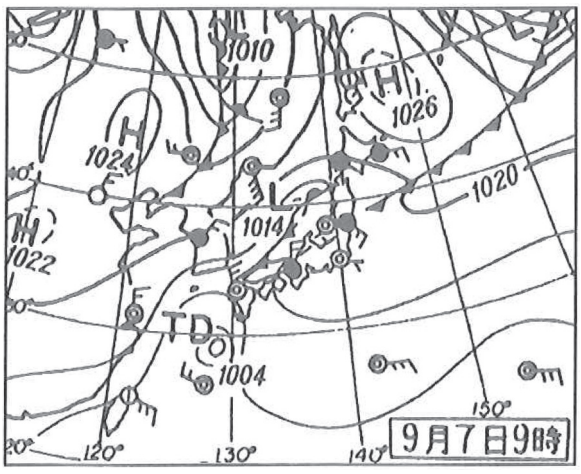
1972 年（昭和 47 年）9 月 6 日～ 9 日　大雨（弱い熱低と秋雨前線）

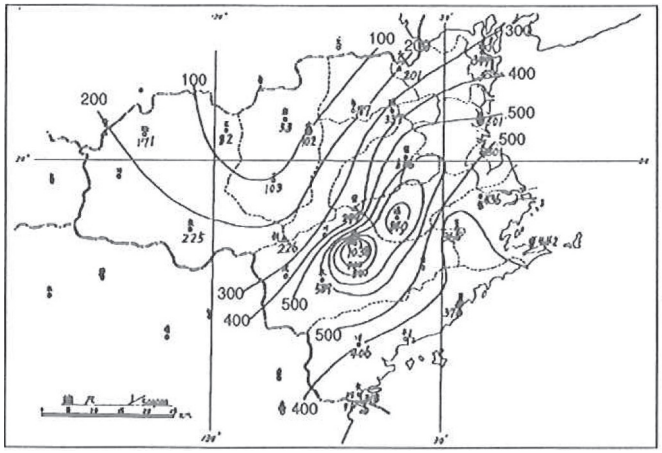
集中豪雨で土砂くずれ（徳島新聞社提供）

マーカス島付近から西進した熱帯低気圧は，九州の南海上で北に転向し，九州を横断し分裂して四国を東進して，秋雨前線を刺激し大雨を降らせた。このため徳島，小松島市で床上・床下浸水の被害が目立った。

総降水量は坂州 1,038㎜（582㎜），小松島 501㎜（366㎜），徳島 501㎜（297㎜）。なお，（　）内は日降水量である。

死者 1，家屋全壊 2，半壊 2，床上浸水 894，床下浸水 9,747，一部破損 14，非住家 6，田冠水 488ha，畑冠水 276ha，田畑流

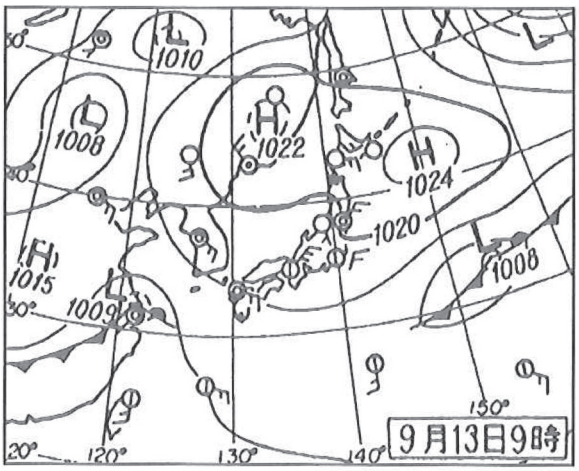


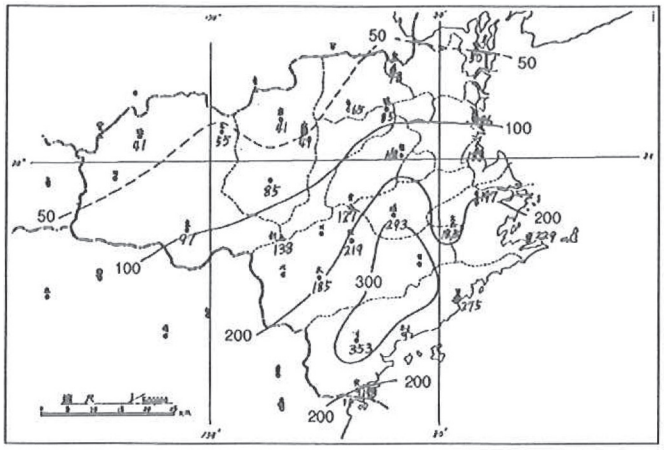


雨量分布図

失 54ha，道路損壊 2，山崩れ 46，堤防 2，鉄道不通 2，通信 9，罹災世帯 895，罹災者 2,892

1972 年（昭和 47 年）9 月 13 日～ 15 日　大雨（低気圧と前線）





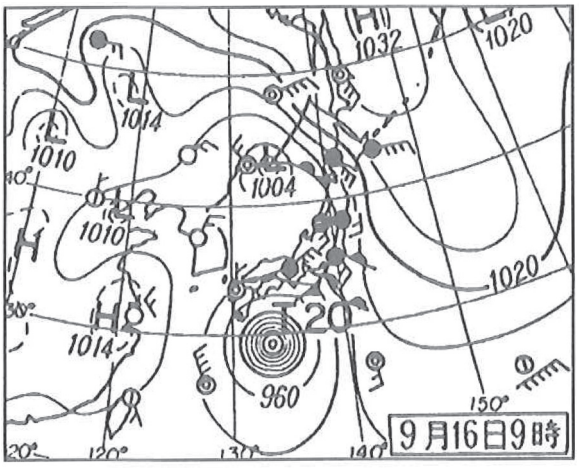
雨量分布図

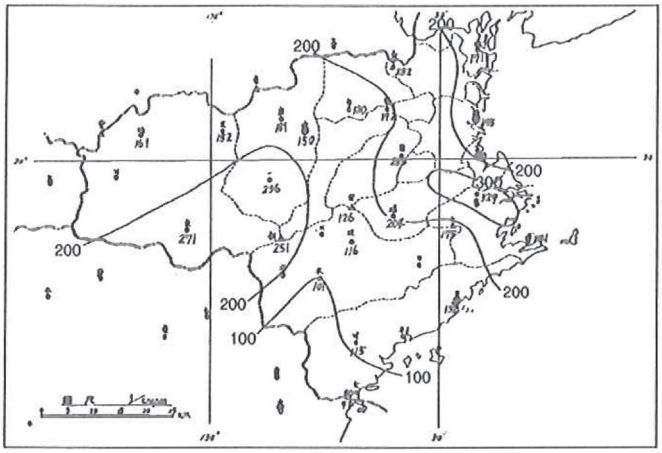
13 日朝，上海付近に現れた低気圧は，発達しながら東北東に進み，朝鮮海峡を通過した。この中心から南東にのびる温暖前線の活動が活発となり，日和佐では 14 日 21 時に 1 時間 141㎜の豪雨があった。

総降水量は川上 353㎜（294㎜），宍喰 298㎜（270㎜），日和佐 376㎜（272㎜），徳島 99㎜（96㎜）。なお，（　）内は日降水量である。

床上浸水 1，床下浸水 275，非住家 1，田冠水 237ha，橋梁流失 11，山崩れ 6，罹災世帯 1，罹災者 5

1972 年（昭和 47 年）9 月 16 日　大雨，強風（台風 20 号）





雨量分布図

台風 20 号は南大東島付近から北北東進し，16 日 18 時半頃紀伊半島に上陸して富山港に抜けた。四国南部・近畿・中部地方及び東北・北海道が暴風雨圏に入った。

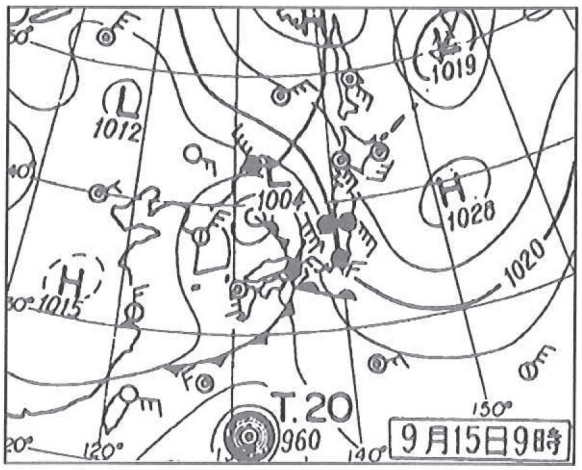
徳島の最大風速は西北西の風 17.7m/s，最大瞬間風速は西北西の風 31.6m/s。総降水量は富岡 329㎜（270㎜），大山寺 282㎜（256㎜），徳島 175㎜（132㎜）。なお（　）内は日降水量である。

床上浸水 290，床下浸水 2,002，家屋一部破損 5，非住家 12，田冠水 460ha，畑冠水 200ha，畑流失埋没 0.5ha，道路損壊 9，山崩れ 58，橋梁 1，堤防 4，鉄道不通 3，罹災世帯 290，罹災者 990

1972 年（昭和 47 年）9 月 18 日　降ひょう

15 時 15 分頃から約 2 分間，日和佐町・由岐町・牟岐町一帯で最大直径 1㎝のひょうが降った。被害はほとんどなかった。

1972 年（昭和 47 年）9 月　多雨



熱帯低気圧と秋雨前線，台風 20 号などによる大雨が続いたため，月降水量は 780㎜で平年の 2.7 倍となり，開設以来第 4 位の記録となった。

1972 年（昭和 47 年）10 月 29 日　高波（台風 26 号）

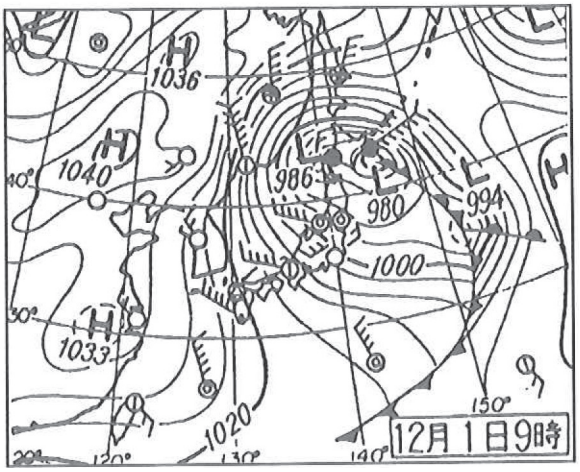
大波でズタズタになった養殖イカダを引き揚げる漁民
那賀川町今津（徳島新聞社提供）

台風 26 号は 29 日，硫黄島の東方海上から北東に向きを変えたため，県沿岸では 29 日から 30 日朝にかけ，大波が打ち寄せ，那賀川町の今津海岸沖で養殖しているノリやワカメの種苗に大きな被害を受けた。

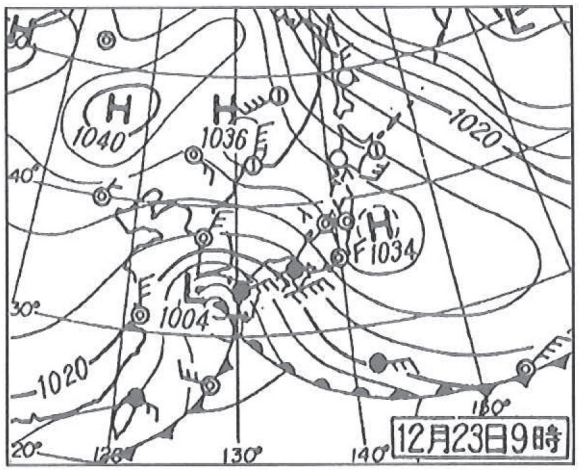
1972 年（昭和 47 年）12 月 1 日　大雪

冬型の気圧配置となり，勝浦郡を中心に大雪となった。福原旭では約 40cmの積雪があった。このため蜜柑の枝折れや凍害の被害がでた。

京上 5cm，鬼龍野 4cm，穴吹 2cm徳島の最大風速は西の風 15.0m/s



1972年（昭和 47年）12月 23日～ 24日　大雨（低気圧）



台湾低気圧が発達して四国沖を通過したため大雨となり，日降水量は宍喰 166㎜，川上 142㎜，富岡 122㎜，徳島 96㎜と，この季節には珍しい大雨となった。徳島の最大風速は西北西の風 11.8m/s

1972 年（昭和 47 年）11 月下旬～ 12 月下旬　少雨

11 月下旬は冬型で，12 月上旬～中旬は高気圧におおわれたため好天が続いた。11 月 17 日から 12 月 22 日までの徳島の降水量は 1㎜であった。

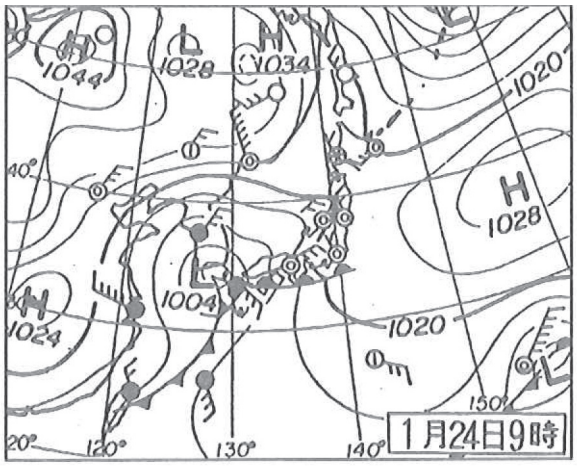
1972 年（昭和 47 年）　多雨

降水量は，1．2．7．9．12 月は特に多く，年降水量は 2,441.5㎜で平年の 1.4 倍に当たり，開設以来第 4 位の多雨の年となった。

1973年

［昭和 48 年］

1973 年（昭和 48 年）1 月 24 日　強風雨，異常高温（日本海底気圧）



低気圧が発達して日本海を通過したため風雨は強まり，この低気圧に向かって暖気が流れ込んだため気温は上昇した。日降水量宍喰 117㎜，川上 117㎜，徳島 39㎜，徳島の最大風速は 14.0℃で平年より 9℃高く，最高気温は 16.8℃で 7.4℃高くなった。また，この日は強風のため鳴門海峡に面した大毛海峡やその沖合の養殖ワカメ・ノリが荒波にもまれ被害を蒙った。

1973 年（昭和 48 年）1 月　多雨

冬型気圧配置は一時的で弱く，次々と顕著な低気圧が通過したため月降水量は 118㎜となり，平成の 2.5 倍に当り開設以来第 4 位の多雨の月となった。

1973 年（昭和 48 年）1 月～2 月　高温

冬型気圧配置は一時的弱く，2 月に寒波の吹き出しは 2 回あったが弱く，月平均気温は 1 月が 6.9℃で平年より 1.8℃高く，開設以来の順位は第 5 位，2 月が 7.3℃で平年より 1.9℃高く，第 4 位の高温の月となった。

1973 年（昭和 48 年）2 月 12 日～16 日　異常乾燥

12 月頃から 16 日にかけては好天続きで，空気は乾燥し火災が続発した。最小湿度は 12 日 32%，13 日 44%，14 日 37%，15 日 42%，16 日 27%であった。

1973 年（昭和 48 年）3 月 22 日～28 日　異常乾燥

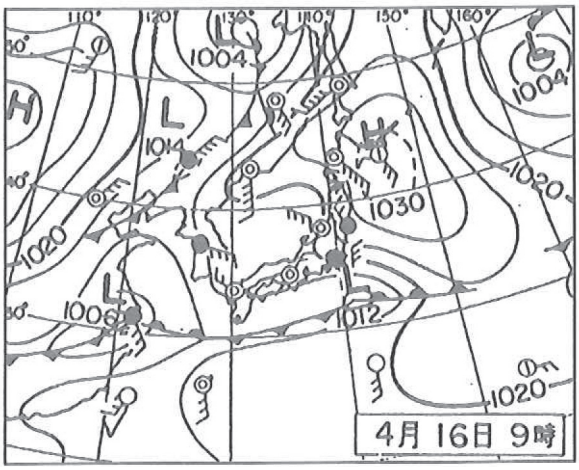
徳島の最小湿度は 22 日 37%，23 日 50%，24 日 12%，25 日 37%，26 日 36%，27 日 37%，28 日 47%で各地で火災が続発した。

1973 年（昭和 48 年）3 月　少雨

月初めに冬型となったが弱く，その後は周期的に変わったが，天気のくずれは弱く月降水量は僅か 4.0㎜で平成の 4%に当り，開設以来第 1 位の少雨の月となった。

1973 年（昭和 48 年）4 月 16 日～17 日　大雨，強風（低気圧）

日本海を低気圧が発達しながら通過したため，県南を中心に大雨となり，強風が吹いた。



1973 年（昭和 48 年）4 月　高温

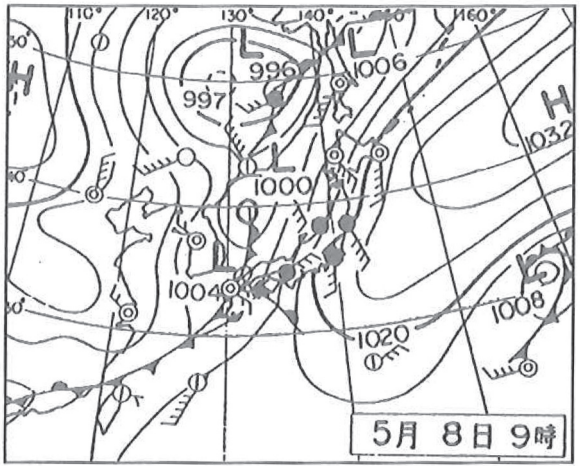
3 月 28 日から異常に高く経過し 4 月 4 日～6 日に低目になったが，全般に高く月平均気温は 15.9℃で平成より 2.3℃高く，開設以来第 3 位の高温の月となった。

1973 年（昭和 48 年）5 月 2 日　大雨（二つ玉低気圧）

二つ玉低気圧が発達しながら通過したため県南では大雨となり，宍喰では 4 時から 9 時まで 161㎜，総降水量 192㎜を観測した。

1973 年（昭和 48 年）5 月 8 日　大雨（低気圧）

低気圧が四国沖を経過し県南では大雨となった。徳島の最大風速は南南東の風 14.0m/s，総降水量は伊島 204㎜（192㎜），日和佐 185㎜（159㎜），徳島 36㎜（24㎜），（　）内は日降水量



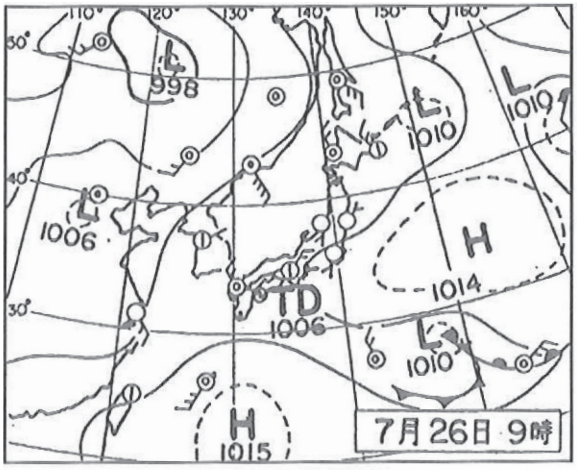
1973 年（昭和 48 年）5 月 19 日～ 20 日　黄砂

19 日から 20 日にかけ県内で黄砂を観測した。

1973 年（昭和 48 年）7 月 27 日～ 31 日　異常湖位

台風 6 号が異常なコースをとり西日本の太平洋上を施回，各地で異常潮位となり，小松島港では 27 日頃から 20 ～ 30㎝高く，月末には大潮と重なり最大偏差 32㎝（30 日 18 時）を記録した。

1973 年（昭和 48 年）7 月 26 日　大雨（台風 6 号）



硫黄島の南西海上で発生した台風 6 号は北方して，21 日朝，潮岬の南方約 150㎞に達し施回して四国沖を熱帯低気圧に衰えて西進した。

その後，九州西海上で再び台風となり，九州を横断して熱低に衰弱し四国沖を通過，26 日には県南に大雨を降らせたが被害はなく，干天に恵みの雨となった。

1973 年（昭和 48 年）8 月 7 日　降ひょう

太平洋高気圧におおわれ夏型の気圧配置となったが，午後から県内の所々で発雷があり，13 時 45 分頃から約 2 分間神山町焼山寺付近で直径 2㎝のひょうが降った。被害なし。

1973 年（昭和 48 年）6 月上旬～ 8 月中旬　少雨（干ばつ）

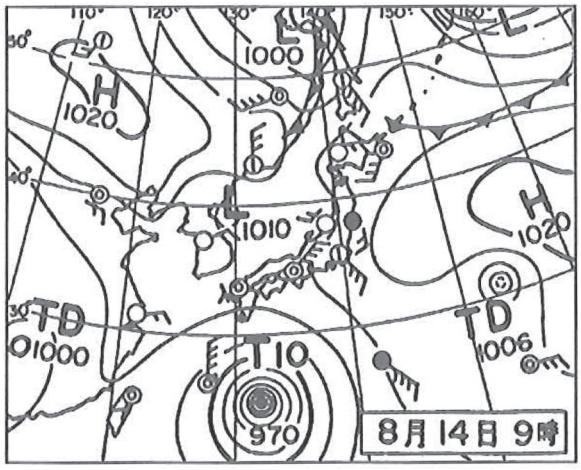
梅雨は 6 月 5 日に入り，空梅雨傾向に経過し，7 月 11 日に不明瞭な梅雨明けとなった。7 月下旬に入り台風 6 号が西日本に接近したため県南では恵みの雨となったが大きなくずれはなく，その後は太平洋高気圧の圏内で暑い晴天が続いたため，県下全域にわたって干ばつとなり，農作物等への被害が心配されたが，8 月 14 日～ 16 日の台風 10 号の影響による大雨で概ね解消された。徳島市における 7 月の月降水量は 33.0㎜で平年の 17％に当り，開設以来第 3 位の月となった。また，6・7 月の月降水量は合計 103.5㎜，6 月 1 日から 8 月 13 日までの総降水量は合計 122㎜で何れも開設以来の少雨となった。干害による被害は主として農作物，果樹等に 7 月中頃から始めた。

8 月 13 日現在

種　別	作付面積	被害面積	被害量	被害金額
水　稲	22,000ha	156ha	194.6 t	28,407千円
野　菜	1,688	82.3		65,470
果　樹	6,044	1,470.5		96,103
甘　藷	1,430	300	957	72,000
飼料作物	3,332	48.5	1,124	33,720
桑	2,008	1,446		75,300
合計	36,502	3,503.3		371,000

1973 年（昭和 48 年）8 月 14 日～ 16 日　大雨（台風 10 号）

ゆっくり北上を続けた台風 10 号は 15 日 9 時には奄美大島を通過し，中心気圧は 975mb と衰えず東支那海中部を北上して 17 日夜朝鮮中部に上陸，18 日 3 時には朝鮮の北東岸に達し温帯低気圧となった。この台風は四国地方を大きく迂回したにもかかわらず，南から暖湿気流の流入で 14 日夜から長時間にわたって大雨を降らせたが被害はほとんどなく，干ばつの解消に役立った。



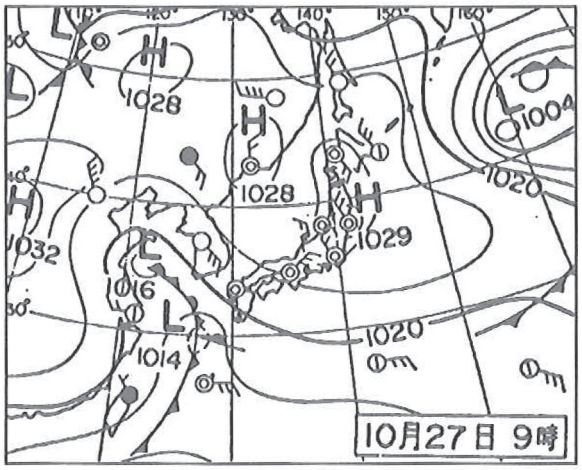
各地の総降水量は木頭 467㎜（187㎜），福原旭 445㎜（175㎜），徳島 213㎜（105㎜），坂州 340㎜（125㎜）（　）内は日降水量

1973 年（昭和 48 年）10 月 13 日～ 14 日　強風雨（日本海底気圧）

低気圧が日本海を通過し，県南では風雨が強く海難事故が発生した。13 日の日降水量は徳島 22㎜，日和佐 106㎜，富岡 83㎜，川上 117㎜

14 日の徳島の最大風速は北の風 10.3 m /s

1973 年（昭和 48 年）10 月 27 日～ 28 日　大雨（二つ玉低気圧）



二つ玉低気圧が通過し，27 日夜から 28 日朝にかけて県南部を中心に大雨を降らせた。

日降水量　日和佐 109㎜，宍喰 94㎜，徳島 27㎜

1973 年（昭和 48 年）11 月 25 日　地震

13 時 25 分，和歌山県西部を震源地とする地震があり，引き続き 18 時 19 分，和歌山県中部を震源地とする地震があった。

震度　和歌山Ⅳ，徳島Ⅲ

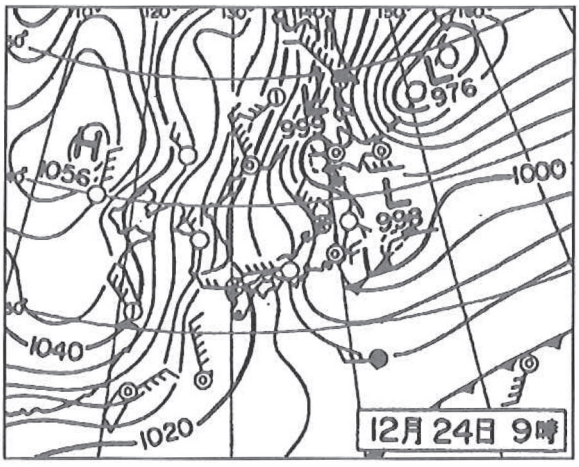
1973 年（昭和 48 年）12 月 7 日　大雪（寒波）

寒波の来襲で徳島市内でも雪となり，開設以来最も早い降雪となった。この雪のため山間部においては臨時休校，バスの運休などの措置がとられた。

7 日 9 時の積雪　徳島 1cm，鳴門 3cm，福原旭 12cm，穴吹 1cm，池田 2cm，一宇 4cm

1973 年（昭和 48 年）12 月 24 日　大雪（寒波）

県下は今冬一番の厳しい寒波に見舞われ，24 日 9 時には徳島 3cm，穴吹 4cm，鳴門 3cm，一宇 17cm，京上 13cmの積雪となった。このため，路面は凍結し徳島市周辺では交通渋滞となり，朝の交通は大幅に乱れた。また，山間部では臨時休校，バスの運休が目立った。



1973 年（昭和 48 年）11 月中旬～ 12 月　低温，少雨，異常乾燥

この間，冬型の気圧配置が目立ち，12 月の月平均気温は 5.5℃で，開設以来第 3 位の低温を記録した。

また，好天が続いたため降水量は少なく（11 月の降水量は平年の 34%，12 月は平年の 20%）空気が乾燥し火災が続発した。

1974年

［昭和 49 年］

1974 年（昭和 49 年）1 月上旬～中旬　少雨，異常乾燥

上旬は大陸高気圧におおわれ，中旬は冬型の気圧配置となったため好天が続き，12 月 25 日以降 1 月 20 日まで無降水となり，空気は乾燥し火災が続発した。

1974 年（昭和 49 年）1 月 12 日　海南町の山火事

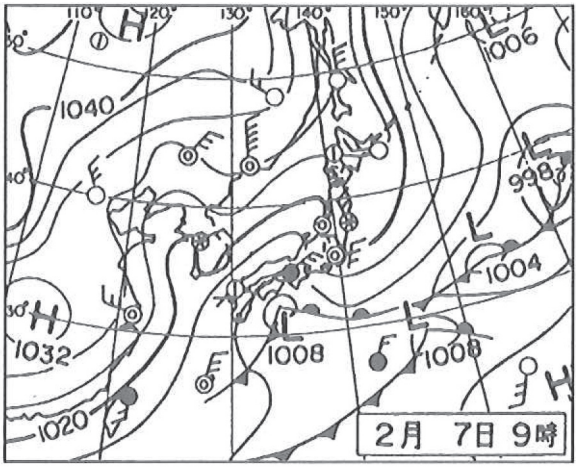
異常乾燥の続く中，正午過ぎ海部郡海南町平井字川又の山林から出火，火は折りからの強風に煽られ延焼を続け，14 日の 18 時までに植林杉（3 ～ 10 年生）70ha を含め約 100ha を焼きつくした。

被害額　約 2 億円（海南町役場調べ）

1974 年（昭和 49 年）2 月 7 日～ 8 日　大雪（寒波）

低気圧が四国沖を通過し寒気が流入したため，雨は雪に変わり山間部を中心にかなりの積雪をみた。

8 日 9 時までの積雪　京上 20cm，芝生 14cm



1974 年（昭和 49 年）2 月 12 日　寒波

冬型の気圧配置となり，11 日夜から 12 日朝にかけて徳島市内では 2cmの積雪となった。また強い寒気が南下したため気温は下り，徳島の最低気温は－2.4℃を記録，このため路面は凍結し交通渋滞を招いた。

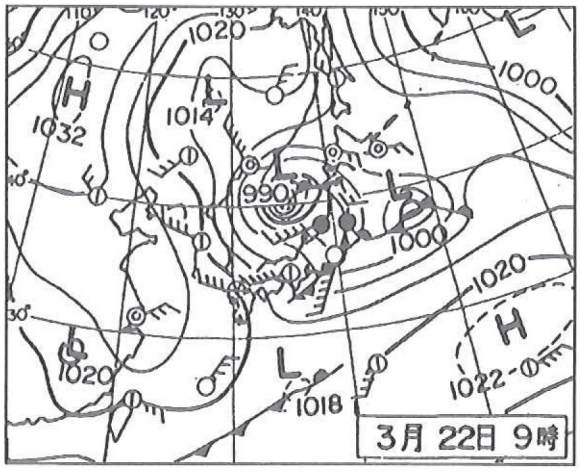
1974 年（昭和 49 年）3 月 10 日　黄砂

10 日 13 時から 18 時頃にかけ，徳島市内で黄砂を観測した。

1974 年（昭和 49 年）3 月中旬～下旬前半　異常乾燥

冬型の気圧配置と移動性高気圧におおわれて好天が続き，空気が乾燥したため火災の発生が目立った。中間の平均湿度は 54% で平年より 15% 低かった。

1974 年（昭和 49 年）3 月 22 日　強風（低気圧）



日本海を発達した低気圧が通過し，22 日未明から午前中にかけ強い風が吹き，徳島では最大風速は西の風 14.0m/s が観測された。このため関西汽船の下り便は神戸港で 6 時間半も立ち往生するなど，海の足は乱れた。

1974 年（昭和 49 年）4 月　異常乾燥

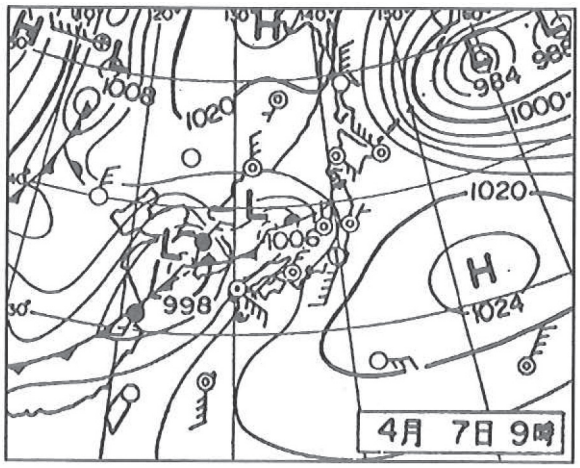
中旬までは長い周期で天気変化し，移動性高気圧におおわれることが多かったため，空気は乾燥し月平均湿度 63% で平年より 9% 低く，上旬には火災の発生が目立った。

1974 年（昭和 49 年）4 月 7 日～ 9 日　大雨（低気圧）

低気圧が四国沖を通過し，県南は大雨となった。

総降水量は　宍喰 168㎜（88㎜），日和佐 158㎜（88㎜），徳島 50㎜（33㎜）を記録した。（　）内は日降水量

1974 年（昭和 49 年）4 月 7 日　たつまき



11 時頃，西祖谷山村でたつまきが発生，民家の屋根やタバコ乾燥室が吹き飛ばされた。

1974 年（昭和 49 年）4 月 21 日　強風雨（低気圧）

低気圧が日本海を発達して通過したため風雨が強まり，沿岸海上では高波を伴ったシケ模様となった。このため海の足は殆んど麻痺し，鳴門海峡では座礁していた中国の貨物船「建設号」が三つに船体が折れ沈没した。また，陸上でも牟岐線が一時ストップするなど，ダイヤが混乱した。

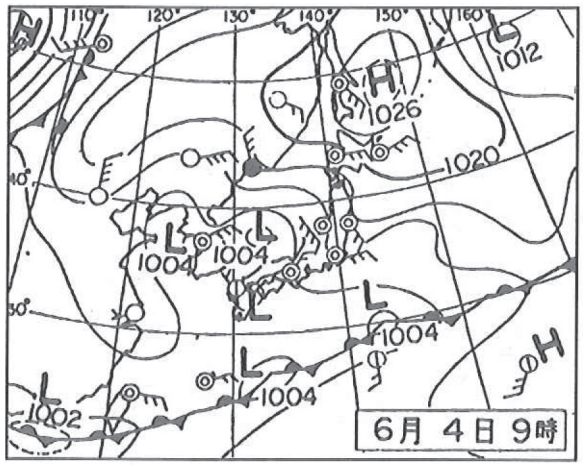
1974 年（昭和 49 年）4 月　高温

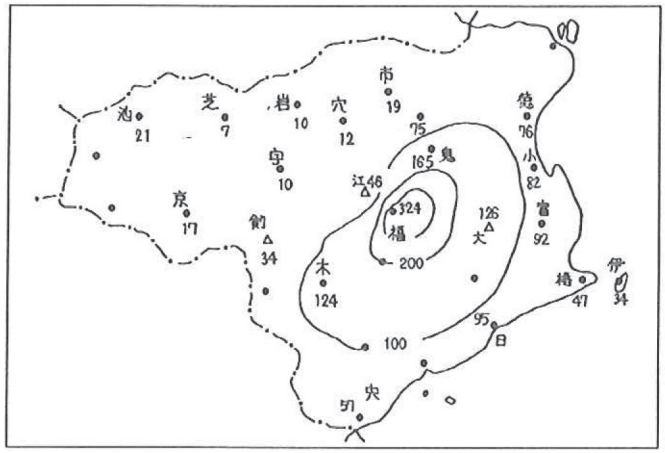
月初めを除き非常に高温で，月平均気温は 14.9℃を記録し，開設以来第 3 位の高温の月となった。

1974 年（昭和 49 年）5 月 26 日　降ひょう，落雷

寒冷前線が通過したため，午後県下で激しい雷が発生し，神山町，山城町などで山林を焼失した。また，小松島でひょうが降った。

1974 年（昭和 49 年）6 月 4 日　大雨（寒冷前線）





雨量分布図

集中豪雨　県道徳島→上那賀線の護岸（徳島新聞社提供）

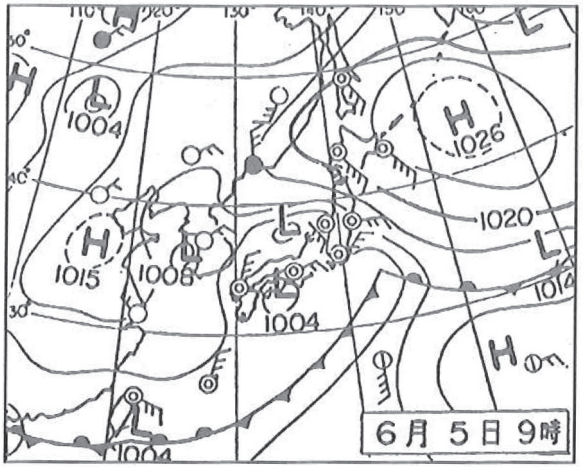
1,004mb の低気圧が日本海にあってこの低気圧の中心から南西に延びる寒冷前線が 4 日 16 時 40 分ごろ，徳島市付近を通過したが上空には寒気が流入したため大気不安定となり強い雷を伴い，昼ごろから夕方にかけ県東部で強雨となり，特に上勝町福原旭では 17 時に 1 時間 107㎜。日降水量 324㎜と記録的な雨量を観測した。このため勝浦郡勝浦町・上勝町・名東郡佐那河内村で浸水，山くずれなど，また落雷のため上勝町，小松島市で約 1,000 戸が停電。鉄道（牟岐線）の一時不通と遅延などの被害が発生した。

被害一覧表

床　上　浸　水	11 棟	山（がけ）くずれ	5ヵ所
床　下　浸　水	9	橋　流　失	4
水　田　流　失	2a	堤　防　決　壊	1
道　路　損　壊	4ヵ所		

1974 年（昭和 49 年）6 月 5 日　降ひょう

14 時 45 分頃，板野郡藍住町矢上，勝瑞地区で直径 1cmのひょうが約 10 分間にわたって降り，レンコンの葉に穴があくなどの被害があった。



1974 年（昭和 49 年）6 月 17 日　大雨（低気圧）

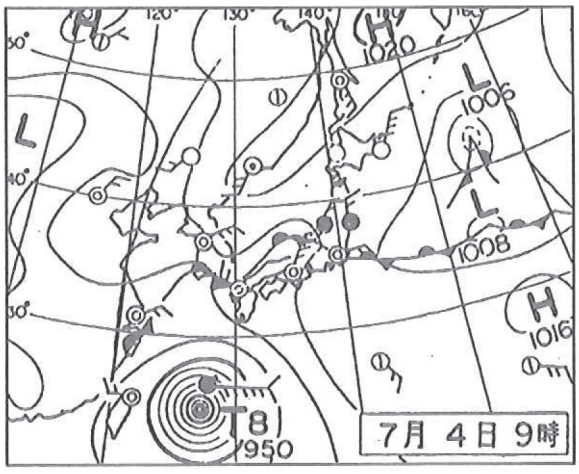
東支那海にあった低気圧が発達しながら日本海を東進，これに伴って南下していた梅雨前線が北上し県下は大雨となった。このため県下では東・西祖谷山村など山間部を中心に土砂崩れ，道路損壊が相次いだ。

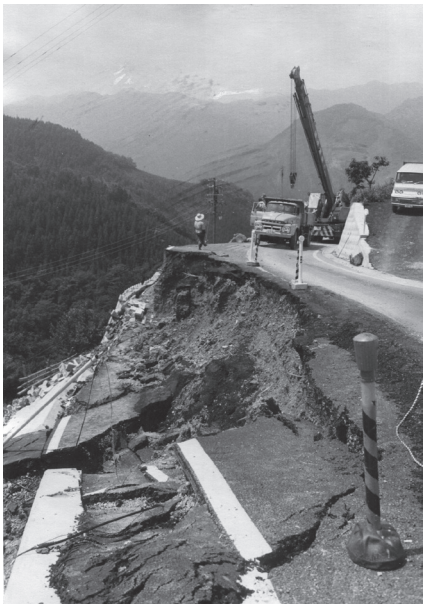
日降水量　徳島 72㎜，京上 192㎜，福原旭 168㎜，芝生 66㎜

1974 年（昭和 49 年）7 月 4 日～7 日　大雨（台風 8 号及び梅雨前線）

マリアナ諸島で発生した熱帯低気圧は西に進み 1 日，沖の鳥島西方海上で台風 8 号となった。その後北西に進み 4 日 18 時には中心気圧 945mb と発達し沖縄と石垣島の間を抜け，時速 15㎞のゆっくりした速度で東支那海を北上した。6 日ごろから次第に勢力を弱め 7 日未明，朝鮮南東部をかすめ日本海を北東に進んだ。

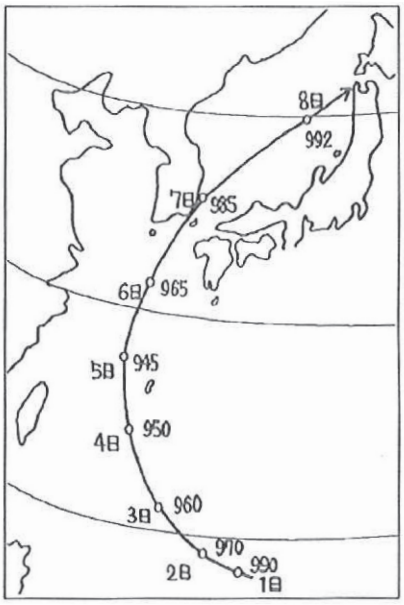
一方，西日本に停滞していた前線は 4 日夜，活動が活発となり大雨を降らせ，また，台風の北上に伴い暖湿気流の流入で，6 日早朝から 7 日朝まで長時間にわたって強雨が続き，上那賀町小見野々で日降水量 953㎜，徳島市内で 1 時間 82㎜と記録的な雨量を観測した。このため，家屋の浸水，土砂くずれなど大きな被害が発生した。





集中豪雨による地すべりで道路が決壊した祖谷渓谷有料道路
（徳島新聞社提供）

山城町の山腹崩壊（徳島新聞社提供）



経路図

極　値　表

要素 / 観測所	日降水量の最大値		1時間降水量の最大値		10分間降水量の最大値		総降水量
	mm	起時	mm	日　時　分	mm	日　時　分	mm
徳　島	189.5	6日24時まで	32.0	7. 01. 40	23.0	7. 01. 10	377.5
剣　山	91.0	6日24時まで	27.5	6. 21. 30	8.0	6. 21. 10	190.0
穴　吹	94.5	6日24時まで	29.0	6. 22. 00	9.5	6. 21. 20	148.0
日和佐	173.5	6日24時まで	97.0	6. 07. 30	25.0	6. 07. 00	445.0

被　害　表　　7月8日現在（最終）　　徳島県警本部調

負　傷　者	1名	水田流失，埋没	397ha	鉄軌道被害	3ヵ所
家屋全壊	7棟	水田冠水	4,635	通信施設被害	141回線
〃　半　壊	19	畑流失，埋没	15	木材流失	500㎥
〃　流　失	4	畑　冠　水	1,171	船舶沈没	1隻
床上浸水	704	道路損壊	129ヵ所	罹災世帯数	939
床下浸水	6,289	橋梁流失	10	罹災者概数	2,992
一部破損	50	堤防決壊	6		
非住家被害	22	山(崖)くずれ	132		

1974年（昭和49年）7月24日　初の光化学注意報

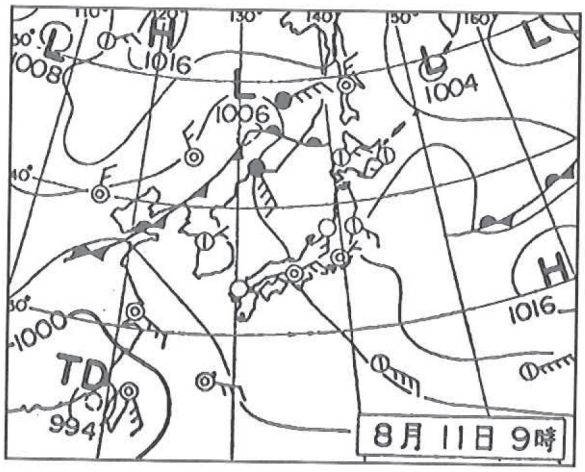
県は14時30分頃，阿南市・那賀川町・羽ノ浦町に対し，県下で初の光化学注意報を発令し約3時間後に解除した。県公害センターによると阿南市領家町にある環境測定局のテレメーターが14時には光化学オキシダント濃度0.169PPM，また那賀川町の測定局で0.161PPMを記録し，基準の0.15PPMを超えたため，四国電力阿南発電所，神崎製紙富岡工場，日本電工徳島工場の3工場に燃料使用の2%カットを勧告した。

1974年（昭和49年）7月　多雨

7月上旬の大雨で，この月の降水量は582.5㎜となり，平年の3倍に当り開設以来第1位の多雨

の月となった。

1974 年（昭和 49 年）8 月 11 日　雷雨



大気不安定のため強い雷が発生，徳島市内に落雷があり倉庫など 2 棟が炎上した。また，日和佐町で 178㎜，太竜寺山で 169㎜の大雨があった。

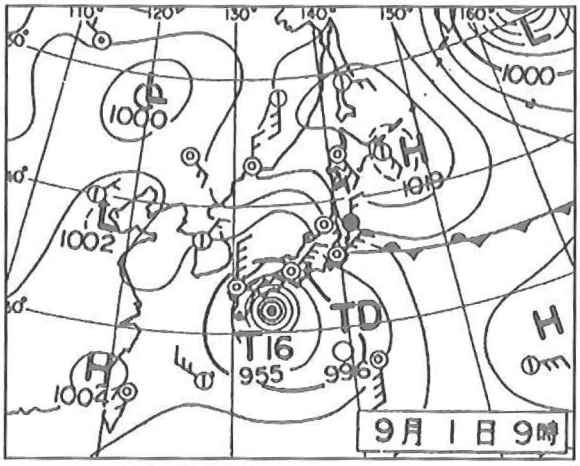
1974年（昭和49年）8月17日～20日　異常潮位（大潮）

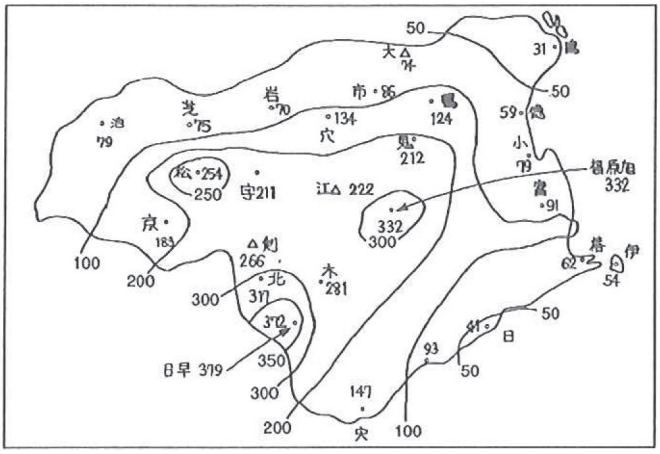
17 日から 20 日かけて大潮に当り，本州の南海上を西進する台風 14 号の影響もあって，満潮時の潮位が平常より 10 ～ 14cm高くなり，19 日の早朝小松島市の低地帯で 11 戸の床下浸水があった。

1974 年（昭和 49 年）8 月 25 日～ 27 日　大雨（低気圧）

25 日，発達した低気圧が四国沖を通過，27 日には前線が停滞し大雨となった。25 日の日降水量は大山寺 144㎜，福原旭 124㎜ m，小松島 70㎜，徳島 68㎜，27 日の日降水量は椿泊 208㎜，富岡 92㎜，徳島 75㎜，小松島 93㎜

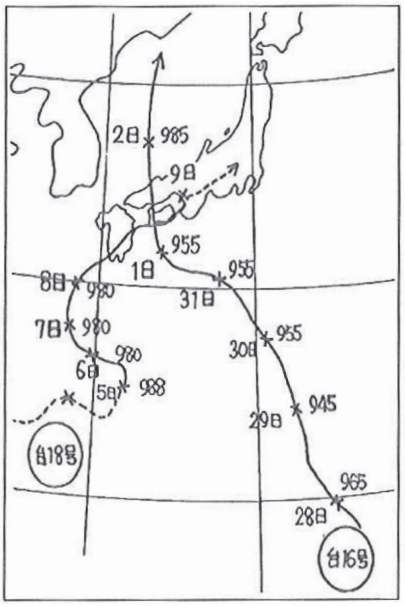
1974 年（昭和 49 年）9 月 1 日　暴風雨（台風 16 号）





雨量分布図

マリアナ諸島東方で発生した弱い熱低は発達して 26 日 21 時にはサイパン島付近で台風 16 号になった。その後，更に発達しながら北西に進み，29 日 15 時ごろ大型の強い台風となり硫黄島付近を通過した。31 日朝から西よりに向きを変え，時速 20km 位のゆっくりした速さで潮岬沖を西進し，1 日 6 時足摺岬の南海上で進路を北に変え，18 時 20 分ごろ高知県中土佐町付近に上陸，その後は速度を早めながら四国・中国地方を暴風雨圏に包みながら夜半すぎ日本海に抜けた。



経路図

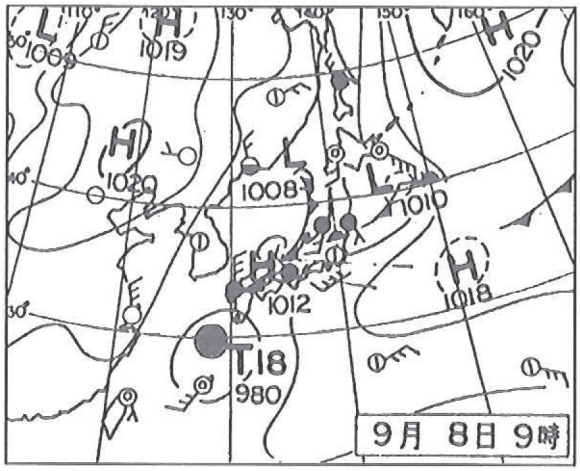
極　値　表

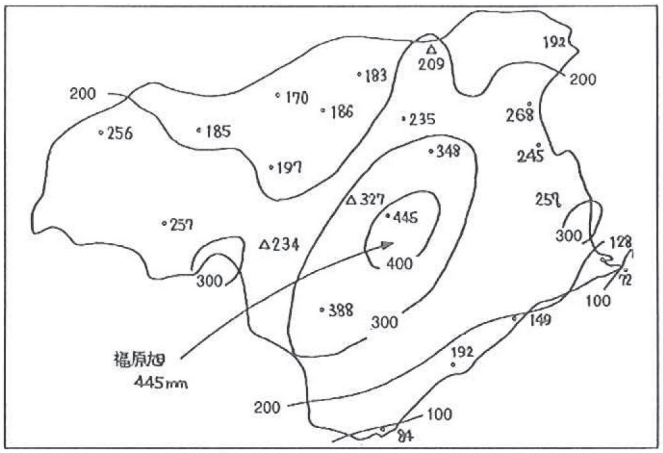
要素 / 観測所	最低気圧 mb	日時分	最大風速 m/s	日時分	最大瞬間風速 m/s	日時分	総雨量 mm
徳島	989.7	1.18.50	南東 17.7	1.19.00	南東 29.3	1.18.40	59.0
剣山	(現地) 782.2	1.18.40	南南東 32.5	1.18.40	南南東 54.1	1.18.32	264.0
穴吹	985.4	1.19.30	北東 12.3	1.16.50			133.5
日和佐	989.8	1.15.20	北東 17.8	1.15.30			40.0

被　害　表

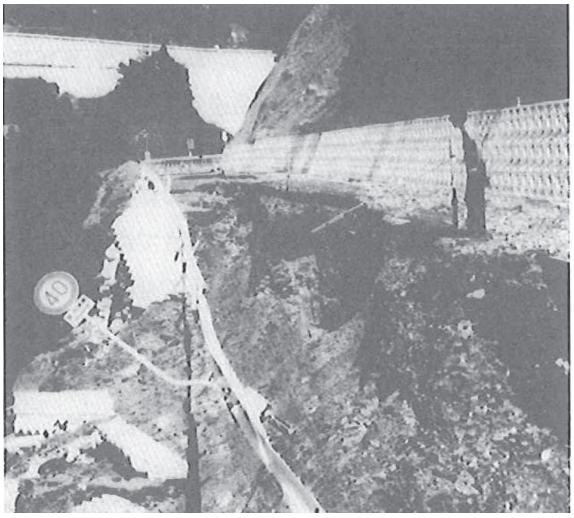
床下浸水	86棟	道路損壊	1ヵ所	堤防決壊	2ヵ所
田冠水	5ha	橋流失	1	山くずれ	3

1974年（昭和49年）9月8日～9日　大雨（台風18号及び前線）





雨量分布図



無残に崩壊した祖谷渓有料道路（徳島新聞社提供）

被　害　表

負傷者	1	畑冠水	564
全壊	12	道路損壊	369
半壊	12	橋流失	21
流失	4	堤防決壊	4
床上浸水	708	山くずれ	129
床下浸水	5,679	鉄道被害	3
一部破損	10	通信施設	667
非住家被害	21	船舶流失	1
田流失埋没	65	罹災世帯	736
田冠水	2,171	罹災者	2,208
畑流失埋没	4		

9月2日，台湾の東海上に発生した弱い熱低は発達しながら東進し，5日3時に南大東島付近で台風18号となった。太平洋高気圧に進路をはばまれ向きを北から西よりに変え，6日には沖縄北方を北西に進んだ。7日には名瀬の西方海上に達し速度が遅くなり，北から北東に転向し加速しながら8日20時10分頃枕崎付近に上陸した。上陸時は中心気圧980mb，最大風速35m/sであったが次第に衰弱を始め豊後水道を通り9日4時すぎ宇和島市北方に再上陸し，その後，東から南東に

向きを変え6時頃，土佐湾に出，温帯低気圧となり東から北東に進み9時すぎには大阪湾に発生した別の低気圧に吸収された。一方，日本海からゆっくり南下してきた前線が四国中部に停滞し，台風に刺激され活動が活発となり，大雨を伴ったため大きな被害が発生した。

中昭和町富田中学校前（徳島新聞社提供）

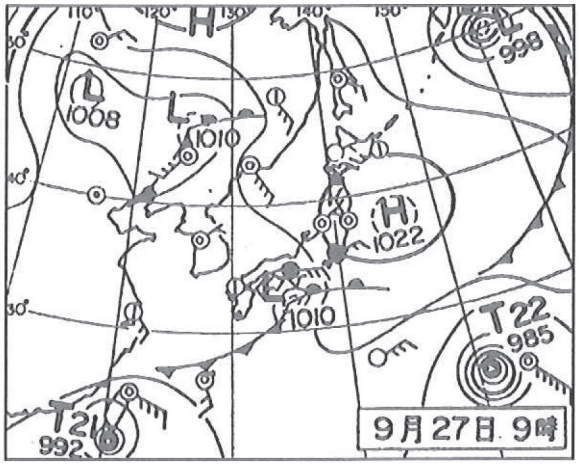
極　値　表

要素 / 観測所	最低気圧		最大風速		最大瞬間風速		総雨量
	mb	日時分	m/s	日時分	m/s	日時分	mm
徳島	1002.7	9.07.26	W 13.3	9.07.50	W 21.6	9.07.43	266.5
剣山	（現地）796.9	9.06.30	SSE 24.0	9.05.00	SSE34.9	9.05.02	231.5
穴吹	1004.2	9.06.30	WSW5.7	9.07.20			185.5
日和佐	1002.2	9.07.00	ENE9.7	9.06.30			148.5

1974年（昭和49年）9月27日　大雨（低気圧）

低気圧が四国沖を通過したのに伴い，27日早朝から大雨となり，徳島市内では道路の冠水により7戸が床下浸水の被害にあった。

日降水量　富岡174mm，日和佐120mm，徳島94mm



1974年（昭和49年）10月26日　光化学注意報

県は13時半，阿南市全域に光化学オキシダント注意報を発令，同市内の四工場に燃料使用カットを勧告するなど緊急対策措置をとった。被害はなく1時間半後に注意報は解除された。

1975年

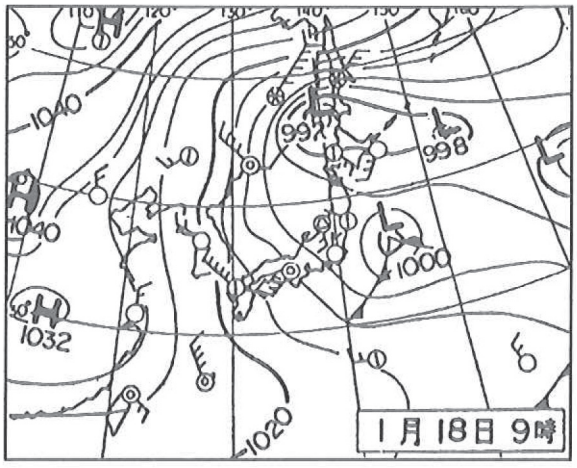
[昭和 50 年]

1975 年（昭和 50 年）　1 月 17 日～ 19 日　大雪（寒波）

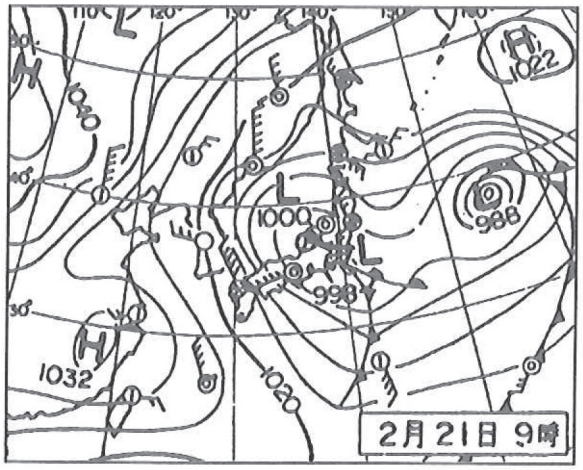
この冬最強の寒波の来襲で，県西部では 17 日朝から雪が降ったり止んだり，県北部では 18 日未明から雪となり各地で交通渋滞し，山間部のバス路線はストップ，山間部の小･中学校は臨時休校した。

各地の積雪は、18 日 9 時に市場 13cm，岩倉 15cm，穴吹 8cm，鳴門 3cm，池田 6cm，一宇 2cm

19 日 9 時には鬼籠野 17cm，一宇 13cm，穴吹 10cm，徳島 1cm



1975 年（昭和 50 年）2 月 21 日～ 23 日　寒波，大雪



冬型の気圧配置が強まり強い寒波の来襲で県西部では 20 日夜から雪となり 23 日にかけ大雪となった。

バスは運休，小・中学校は臨時休校のところがでた。配電線の切断（88 か所），電線折損 1 本のため延べ 31,400 戸が停電した。（四国電力調べ）

21 日 9 時の積雪は穴吹 8cm，池田 11cm，徳島 1cm，鴨島 6cm，22 日 9 時の積雪は穴吹 22cm，岩倉 17cm

池田 10cm，徳島 1cm，鴨島 7cm，京上 21cm，23 日 9 時は京上 33cm，穴吹 10cm

1975 年（昭和 50 年）　3 月 20 日　強風，大雨（低気圧）

低気圧が日本海を発達して通過したため，風雨が強まった。20 日 10 時 40 分頃，吉野川河口付近でクレーン船（200t）が転覆（7 人乗組み）し，1 人負傷，1 人行方不明となった。海上では風波高く船便の欠航が相次いだ。また鳴門海峡一帯の養殖ワカメが強風のため流失（生ワカメ 3,000 トン）する等，海産物に被害が出た。

徳島の最大風速は南南東の風 13.3m/s，日降水量は宍喰 100㎜（120㎜），木頭 82㎜（107㎜），徳島 53㎜（54㎜）（　　）は総降水量

1975 年（昭和 50 年）　3 月　多照

3 月は好天続きのため，月・日照時間は 221.6 時間と開設以来第 4 位の多照となった。

1975 年（昭和 50 年　3 月上旬～ 4 月上旬

3 月の月平均湿度は 57％と平年より 12％低く，空気は乾燥し，火災の発生が目立った。主な火災 3 月 11 日 2 時 45 分徳島市幸町のかまぼこ製造工場から出火，5 棟を全半焼。3 月 30 日夜那賀川町で母子 2 人が焼死する火災があった。31 日阿南市，穴吹町，三加茂町でも火災があり，居宅など 6 棟全焼。

1975 年（昭和 50 年）　4 月 2 日　おそ雪

冬型の気圧配置となり，県西部の池田町では雪となった。

積雪　0cm

1975 年（昭和 50 年）　4 月 8 日　強風（低気圧）

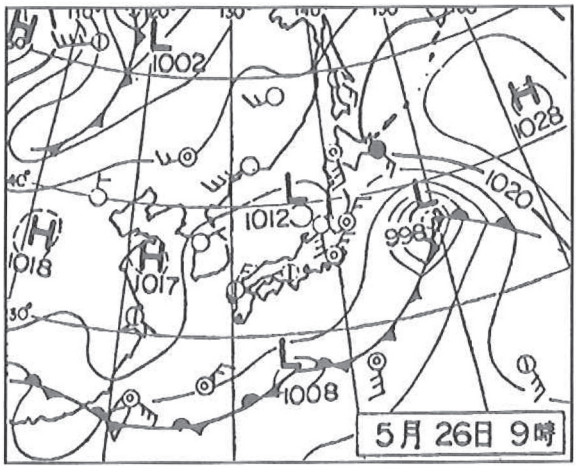
低気圧が発達しながら日本海を通過したため，8 日未明から強まった風波で県沿岸航路は欠航が相次いだが，4 時 40 分頃，鳴門市瀬戸町北泊沖合 700 ～ 800m の海上で貨物船 141t が浸水沈没，原木が流失した。

徳島の最大風速は南南東の風 13.8m/s

1975 年（昭和 50 年）4 月 6 日・9 日・11 日　黄砂

1975 年（昭和 50 年）5 月 26 日降ひょう，落雷

宍喰で路面に積もったヒョウで車がスリップ（徳島新聞社提供）



上空に寒気が流入し大気不安定となり，昼前から午後かけ殆んど県下全域で発雷した。落雷のため市場町で 1 名感電死，送電線断線 4 か所，トランス焼損 3 台，停電 5,000 戸などの被害があった。県北部の吉野川流域及び県南西部（主に宍喰町）では降ひょうを伴い，葉タバコ，スイカ，キュウリなどの農作物 631ha が被害を受け，被害額は 2 億 7 千万円に及んだ。（5 月 29 日現在　県農林水産部調べ）

1975 年（昭和 50 年）　6 月 10 日　降ひょう

上空に寒気が流入し大気不安定となり，県内各地で雷が発生。一部で降ひょうを伴ない農作物が被害を受けた。神山町では直径 1cm以上のものが 14 時頃から約 30 分間降り，地面を一面に白く覆った。葉タバコ 64ha が被害を受け，被害額は 7,318 万円となった（県農林水産部調べ）

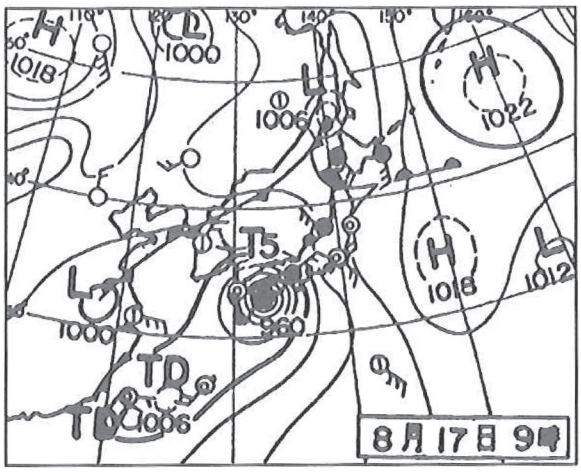
また，剣山でも直径0.7cmのひょうが13時5分から8分までと14時40分から16時5分まで降った。

1975 年（昭和 50 年）　6 月 12 日　降ひょう

10 日に続き 12 日 13 時半頃から約 10 分間，脇町で降ひょうがあり，タバコ 7ha，2 百万円の被害がでた。（徳島新聞）

1975 年（昭和 50 年）8 月 17 日　暴風雨（台風 5 号）

土砂崩れ　西祖谷山村西岡の祖谷有料道路で（徳島新聞社提供）

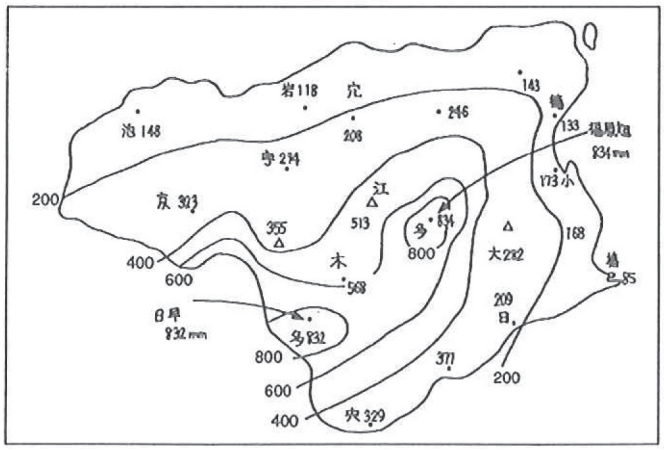


グアム島の西方海上で発生した弱い熱帯低気圧は、12 日 15 時には発達して台風 5 号（990mb）となった。かなり早い速度で北上し硫黄島の西海上に達した。15 日 3 時には大型で非常に強い台風（920mb）となった。その後衰弱しながら，速度を落として北西に進み，17 日 8 時 50 分，宿毛市付近に

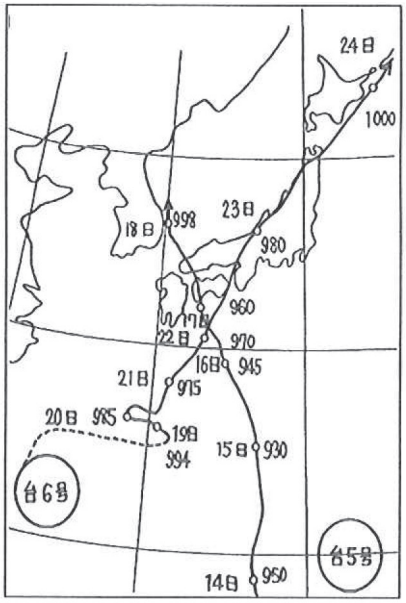
被　害　表　（県警調）

行　方　不　明	1名
床　下　浸　水	31棟
道　路　損　傷	3カ所
山がけくずれ	5カ所

上陸（960mb），四国西岸をかすめて昼過ぎには伊予灘に入り山口県を縦断した。



雨量分布図



経路図

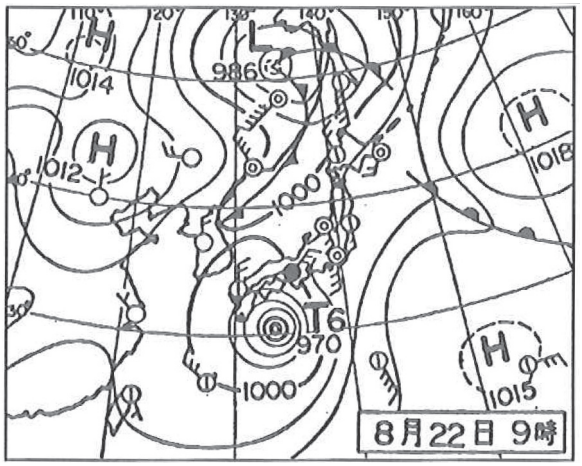
極　値　表

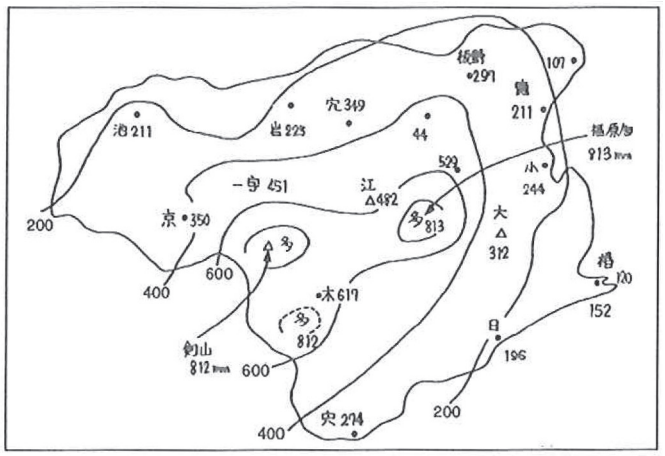
要素 / 観測所	最低気圧		最大風速		最大瞬間風速		総雨量
	mb	日時分	m/s	日時分	m/s	日時分	mm
徳島	998.5	17.12.20	南東 16.2	17.10.40	南東 27.4	17.10.20	106.0
剣山	(現地) 792.1	17.11.00	南南東 27.9	17.03.00	南南東 53.4	17.10.32	313.0
穴吹	995.0	17.11.41	北北東 7.8	17.09.00			192.5
日和佐	994.4	17.08.20	北東 15.0	17.07.00			208.5

1975 年（昭和 50 年）　8 月 22 日～ 23 日　暴風雨（台風 6 号）

台湾の南と台湾海峡で発生した弱い熱帯低気圧は、18 日 3 時沖縄の南海上で合併し，その後も東進を続け，南大東島の南海上に達した 19 日 3 時頃から北北西に向きを変え，19 日 9 時，台風 6 号（994mb）となった。台風は沖縄付近まで北西進し，そこでＵターンする夏型台風の特徴を示し，21 日には南大東島付近からゆっくり北東～北北東進し大型で並の台風に発達して（965 ～ 970mb），23 日 1 時すぎ，徳島東岸を北上，淡路島沿いに進み，5 時 30 分には神戸市に西方に上陸したが，この頃から勢力は徐々に弱まり，40 ～ 50㎞の速い速度で北陸から東北地方を斜断し，23 日 23 時には太平洋に抜けた。この台風の来襲で県下に大きな被害が発生したが，特に木屋平村，一宇村では山（崖）崩れによる多くの犠牲者が出た。

河川の氾濫で一面水浸しとなった麻植郡川島町宮島地区
（徳島新聞社提供）





国道 11 号線をふさいだ鳴門市北灘町の山崩れ現場
（徳島新聞社提供）

道路の高さまであふれた貞光町（徳島新聞社提供）

被　害　表　　（県警調）

死者	15	一部破損	214	堤防決壊	13
行方不明	1	非住家被害	87	山・がけくずれ	294
負傷者	23	田流失埋没	28	鉄軌道被害	1
全壊	72	田冠水	3,292	通信施設	177
半壊	122	畑流失埋没	20	木材流出	1
流失	43	畑冠水	1,201	ろかい舟	1
床上浸水	1,482	道路損壊	403	罹災世帯	1,719
床下浸水	9,033	橋梁流失	42	罹災者	6,131

極　値　表

要素 / 観測所	最低気圧		最大風速		最大瞬間風速		総雨量
	mb	日時分	m/s	日時分	m/s	日時分	mm
徳島	971.1	23.02.30	東 18.6	23.00.50	東 34.7	23.00.40	209.5
剣山	(現地) 774.8	23.01.00	北北西30.0	23.01.10	北北西 42.5	23.01.04	820.0
穴吹	975.9	23.00.50	北東 10.3	22.15.30			349.0
日和佐	969.5	23.00.30	北東 14.3	22.23.20			191.0

1975 年（昭和 50 年）　9 月　高温（残暑）

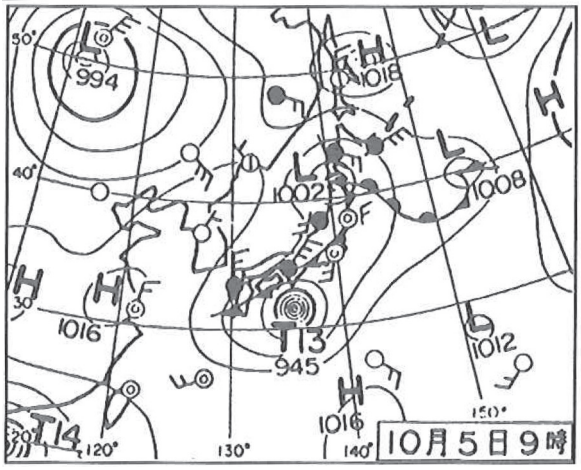
太平洋高気圧は根強く，夏型の気圧配置は 21 日ごろまで解消せず，厳しい残暑が続いた。このため，月平均気温は平年より 1.5℃ 高く，開設以来第 3 位の高温の月となった。また，大気不安定

のため雷の発生が目立ち，9 月 18 日の雷雨では市場町・石井町などで 1，400 戸が停電した。

1975 年（昭和 50 年） 9 月 8 日　異常潮位

朝の満潮時には大潮と重なり（最高潮位 313cm），小松島市内で 9 戸が床下浸水，国道・県道の一部が冠水した (被害は徳島新聞)。

1975 年（昭和 50 年）10 月 5 日　大雨



台風 13 号が四国はるか南沖を東進したため，徳島で日降水量 73㎜，日和佐で 105㎜大雨があった。

徳島の最大風速は北北西の風 8.2m/s

この台風の影響により八丈島で最大瞬間風速 67.8 m /s を記録し，530 戸が全半壊するなど住宅 2,000 戸に被害があった。

1975 年（昭和 50 年）10 月 7 日　強風雨

発達した低気圧（2 つ玉）の通過で風雨が強まり，牟岐線も一時止まり，海の足も欠航などで乱れた。

日和佐日降水量 163㎜，徳島の最大風速は南南東の風 14.7 m /s

1975 年（昭和 50 年） 10 月　寡照，高温

10 月前半は短かい周期で天気変化し，月末には前線が停滞して 10 月としては珍らしく曇雨天の日が多かった。日照時間は少なく，月日照時間は 122.8 時間で明治 26 年以降第 3 位の寡照の月となり，気温は月平均で平年より 1.0℃高く，開設以来第 4 位の高温の月となった。

1975 年（昭和 50 年）11 月 6 日～ 7 日　大雨（低気圧）

山陰沖を通過した低気圧のため大雨となり，鳴門市内で床下浸水 30 戸（県警調べ）の被害があった。徳島 89㎜，鳴門 59㎜，小松島 115㎜

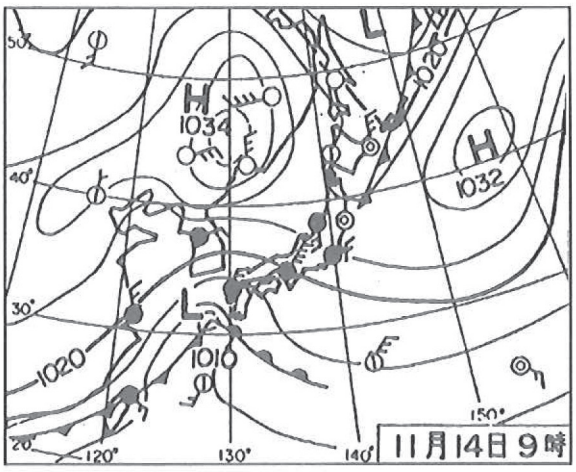
1975 年（昭和 50 年）11 月 14 日～ 15 日　強風雨（低気圧）

低気圧が四国沖を発達しながら通過したため季節はずれの大雨となり，大雨警報が発表された。

日和佐 249㎜（日降水量），徳島の最大風速は南南東の風 12.4m/s，崖崩れ 1 カ所（県警調べ）

徳島市，石井町で田畑の冠水 500ha，ホウレン草の被害 1 億 6 千万円（県調べ），国鉄牟岐線上下一往復運休，冠水による国道の通行止めなどの被害があった。

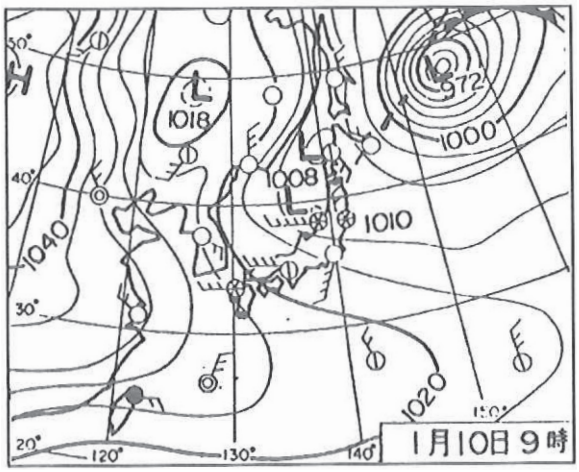
1975 年（昭和 50 年）11 月　多雨



降水量は上旬・下旬の大雨のため平年の 2.5 倍となり，開設以来第 3 位の多雨の月となった。

1976年

［昭和 51 年］



1976 年（昭和 51 年）　1 月 10 日～ 12 日　大雪（寒波）

今冬一の寒気団の南下で日本海側を中心に厳しい寒波に見舞われたが，県下各地でも雪となり，山間部のバスは麻痺状態となり小・中学校では臨時休校するところが多かった。

10 日の積雪	穴吹 7cm，池田 9cm
11 日の積雪	穴吹 7cm，池田 9cm，徳島 2cm
12 日の積雪	京上 15cm

1976 年（昭和 51 年）1 月 22 日～ 23 日　大雪（寒波）

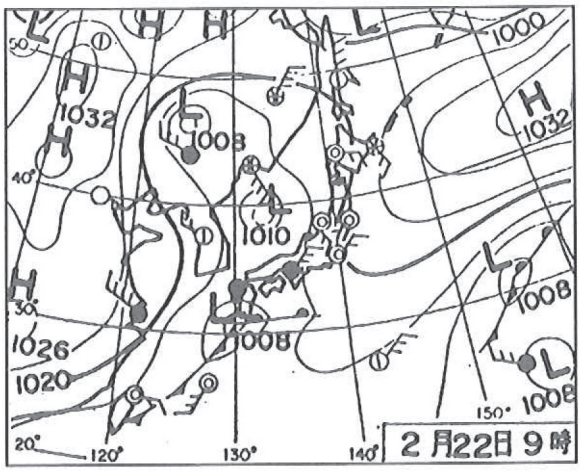
22 日から 23 日にかけての寒波で県西部を中心に断続的に雪が降り，山間部のバスは大きく乱れ，運休などで小・中学校では臨時休校するところがあった。

23 日積雪　穴吹 4cm，京上 17cm，岩倉 4cm

1976 年（昭和 51 年）2 月 16 日　高波

16 日正午すぎ，高波のため潮流測定船が転覆し，2 名が行方不明となった。

1976 年（昭和 51 年）2 月 22 日　強風雨（低気圧）



発達した低気圧が四国沖を通り，強風雨となった。このため鳴門市沿岸の養殖ワカメ約 1,000 トンが流出，被害額は 5 千万円にのぼった（徳島新聞）。徳島の最大風速は北西の風 11.3m/s（瞬間最大風速は北西の風 18.9m/s），徳島の降水量 32.0㎜

1976 年（昭和 51 年）2 月 28 日　強風雨 (低気圧)

発達した低気圧が日本海を通過したため南寄りの暖気が流入し，春一番となり気温は上昇した。

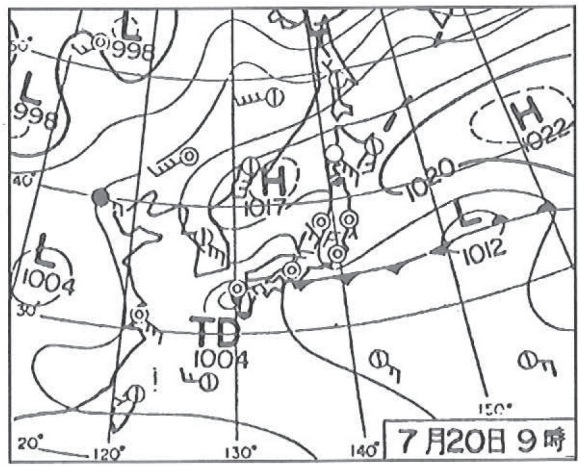
徳島の最大風速は南南東の風 12.4m/s（瞬間最大風速南南東の風 19.4m/s）

9 時日降水量　日和佐 148㎜（189㎜），宍喰 153㎜（199㎜），徳島 37㎜（52㎜）（　）内は総降水量

1976 年（昭和 51 年）2 月　高温

2 月中旬から下旬にかけ気温が非常に高く，月平均では平年より 2.4℃高く（7.8℃），開設以来第 3 位の高温の月となった。

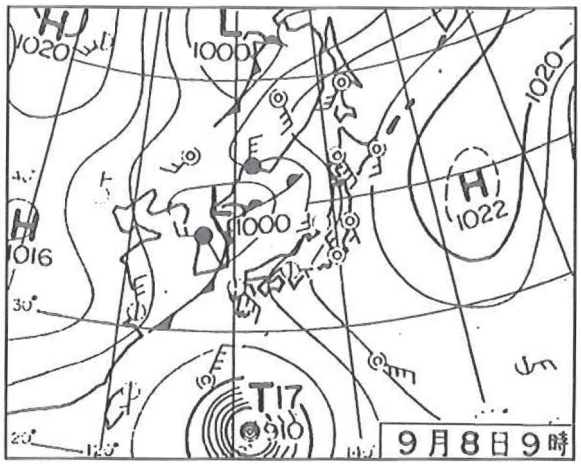
1976 年（昭和 51 年）7 月 20 日頃　大雨（低気圧）



11 日にトラック諸島で台風となり，18 日夕方五島列島の南海上で中型ながら強い勢力を保ち北西進を続けたが，次第に衰弱し，19 日 16 時に 988mb となり，16 時 30 分長崎に上陸，19 日 23 時に熱低となって西進した。この台風が梅雨前線を刺激してその活動が活発となり，19 日から 20 日にかけ大雨となった。徳島の最低気圧 1007.5mb，最大風速 7.3m/s，総雨量 285.5㎜であった。被害は次の通りである。

床上浸水 10，床下浸水 192，田冠水 7ha，畑 6ha，道路損壊 1，山・がけ崩れ 6，罹災世帯 10

1976 年（昭和 51 年）9 月 8 日～ 13 日　大雨（台風 17 号と前線による）



徳島市佐古（徳島新聞社提供）

9 月 3 日カロリン群島頭部付近に発生の熱低が 4 日 15 時台風 17 号となり，勢力を強めながら北西進し，8 日の 9 時沖の大東島の南々東で最も発達し，中心気圧 910mb で最大風速 60m/s の大型台風となった。11 日の 9 時鹿児島の南西約 200㎞の海上に到達して 12 日昼頃までその海域に停滞し，台風周辺の降雨帯が日本列島に沿う前線帯を刺激して台風の雨と前線の雨が強まり，大雨となった。台風は 13 日 1 時 40 分長崎付近に上陸し，速度を増し，13 日 9 時浜田の西方 100㎞に進み，次第に衰弱しながら日本海を北上した。

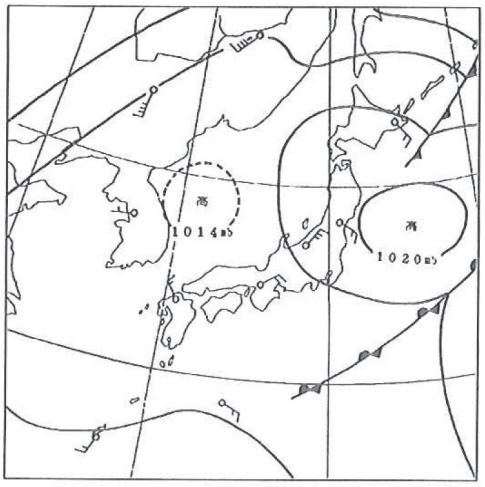
県下は約 7 日間雨が続き，各地に記録的な雨量を観測，大きな被害を受けた。徳島の極値最低気圧 997.0mb，最大風速 18.7m/s，最大瞬間風速 31.0m/s，総雨量 825.0㎜，剣山 1,837.5㎜，日和佐 475.5㎜，木頭村日早（四国電力）では 2,781㎜となり，これは日本の観測は史上最大の記録であった。

死者 10，負傷者 9，罹災世帯 4,067，家屋全壊･流失 187，家屋半壊･一部破損 103，床上浸水 3,777，

床下浸水 16,378，耕地流失・埋没 17ha，冠水 3,962ha，山・崖崩れ 296，道路損壊 708，橋梁破損 15，堤防 148 か所，鉄軌道 3 か所，木材流失 700㎡，その他停電，国鉄運休等の被害

1976 年（昭和 51 年）10 月 18 日　集中豪雨

局地的集中豪雨の牟岐町中村の道路（徳島新聞社提供）



15 時の天気図では四国付近に低気圧や前線は見られない。しかし，大気不安定な状況で，室戸岬レーダーには，四国各地に積乱雲による強い降雨域が点在した。その積乱雲の一つが非常に発達して牟岐町に接近し，夕方前から夜にかけて 400㎜をこえる集中豪雨をもたらせた。国鉄牟岐保線区の観測によると牟岐町の降水量は，18 時から 19 時の間に 86㎜，19 時から 20 時の間に 98㎜，20 時から 21 時の間に 67㎜であった。人的被害はなかったが，牟岐川が氾濫し，牟岐町中心部では路上 50㎝から 60㎝の高さまで浸水した。全壊 2 棟，床上浸水 350 余戸，被災者数は 10,205 人。

1977年

［昭和 52 年］

1977 年（昭和 52 年）2 月 15 日～ 16 日　異常低温（寒波）

15 日からの優勢な大陸高気圧の張出しにより寒気団の南下で厳しい寒さとなり，県西部を中心に降雪が断続し，大雪，強風，波浪，異常低温注意報を発令した。16 日には徳島の最低気温－4.6℃，剣山では開設以来の最低気温－20.4℃の新記録となった。この寒波により山間部のバスは路面凍結と積雪により大巾に乱れ，学校も臨時休校が続出，水道管の破裂 1,200 戸（徳島市内），ガス，電気等の事故続出，農作物の被害も多かった。

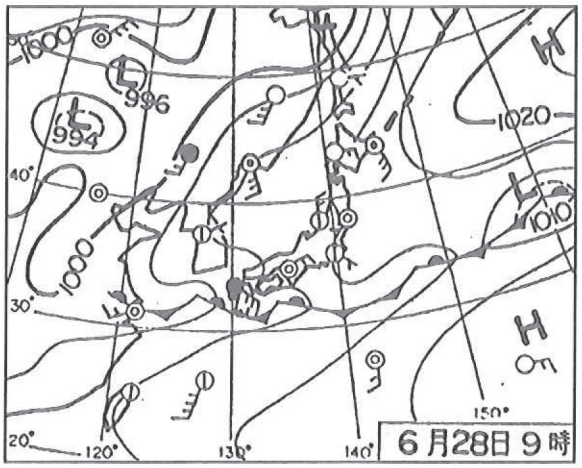
1977 年（昭和 52 年）3 月 12 日　阿波町の山火事

14 時 15 分頃，阿波郡阿波町名東の岡，国指定天然記念物として知られる「阿波の土柱」波涛嶽の麓から出火，火は高歩頂山（標高 200m）の中腹から頂上にかけて燃え拡がり，松林など約 30ha を焼いた。

1977 年（昭和 52 年）6 月 28 日　大雨（四国南岸 B・F と低気圧）

28 日，四国の南岸に停滞する梅雨前線と土佐湾付近に低気圧が発生し，3 時 20 分頃より雨となり海部では総降水量 310㎜を記録した。

床上浸水 1，床下浸水 42，田冠水 205ha，道路損壊 7，河川損壊 7，崖崩れ 22，鉄道不通 1，罹災世帯 1



1977 年（昭和 52 年）7 月 17 日　大雨（梅雨前線）

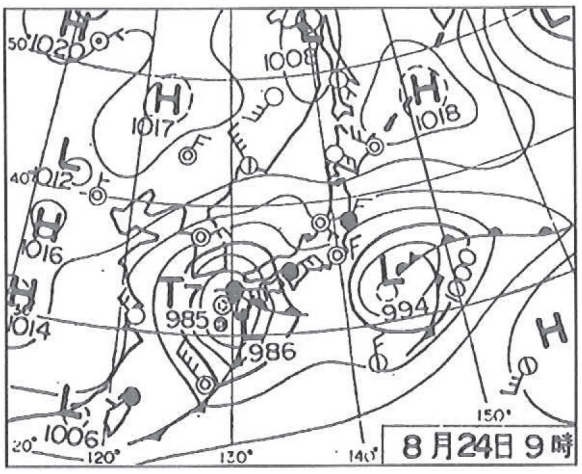
山陰沖に北上していた梅雨前線の南下に伴い，17 日 22 時～ 23 時にかけ徳島に集中した大雨があり，10 分間降水量 21.0㎜（7 月極値の順位 3 位，全年 6 位），1 時間降水量 77.0㎜（7 月極値の順位 2 位，全年 5 位）を記録した。日降水量は 81.5㎜であった。各所で道路が冠水した程度で被害はなかった。

1977 年（昭和 52 年）8 月 22 日　日和佐町の山火事

12 時 30 分頃，海部郡日和佐町山河内字西山の 1 番谷山（標高 560m）の中腹から出火，折から台風 8 号の影響による北西 14 ～ 15m/s の強風に煽られ 38 時間余りにわたって延焼を続け，松・杉などの造植林を含め，約 92ha が焼失した。この間同町消防団はじめ牟岐・由岐両町の消防団などが消火作業に当たったが，強い火勢と急傾斜地のため消火活動が捗らず，県は陸上自衛隊中部方面航空隊にヘリコプターの出動を要請し，県下で初めて空中からの消火剤散布による消火活動を実施した。

被害額　約 1 億 2 千万円（日和佐町役場調べ）

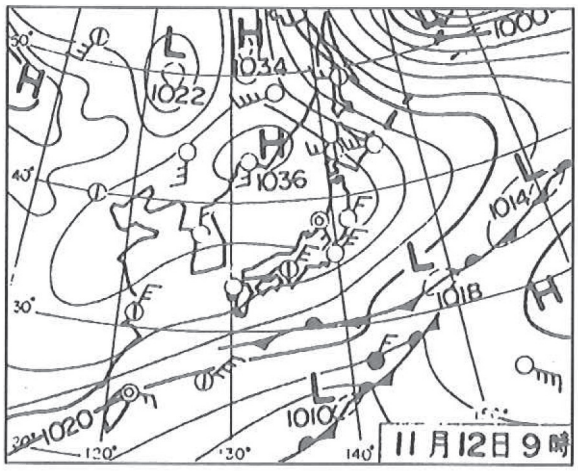
1977 年（昭和 52 年）8 月 24 日　大雨（台風 7 号）



24 日正午頃，台風 7 号は九州西岸に上陸，九州を横断しその後温低となる。徳島の降水量は 79㎜の大雨となり被害が出た。なお，この台風による降水量は南部が多く，宍喰では 502㎜に達した。

家屋半壊 1，床上浸水 12，床下浸水 91，山崩れ 4，道路損壊 1，田冠水 100ha

1977 年（昭和 52 年）11 月 12 日～ 17 日　大雨（前線と低気圧）

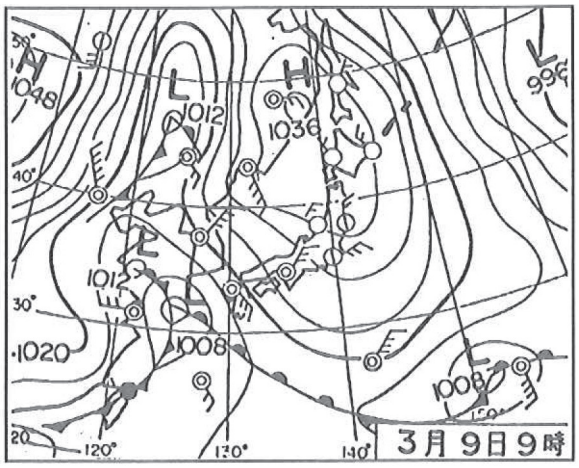


四国の南岸に前線が停滞し，16 日には前線上を低気圧が通過したので徳島で 1,345㎜の降雨があった。11 月としては異例な降水量で開設以来の記録となった。このため，海空の交通が麻痺した。

1978年

［昭和 53 年］

1978 年（昭和 53 年）3 月 9 日～ 10 日　強風



前線を伴った低気圧が発達しながら日本海を通過したため，徳島で最大瞬間風速は南南東の風 23.2m/s を記録し，鳴門市沿岸のノリ養殖及びワカメ養殖に被害があった。

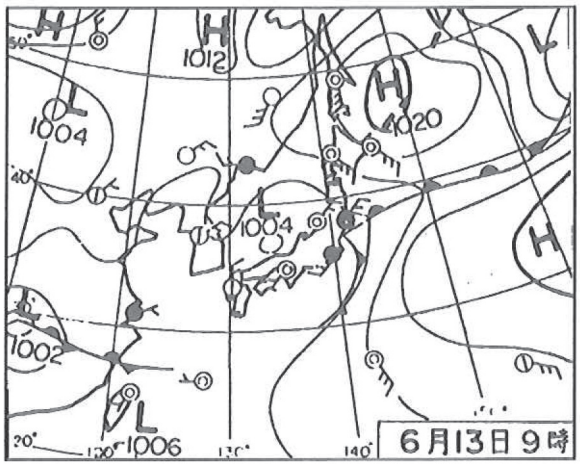
ノリ養殖	施設被害	4千2百万円	ワカメ養殖	施設被害	6千9百万円
	生産被害	3億5千万円		生産被害	1億6千1百万円
合計被害額　6億2千2百万円(県農林水産部調べ)					

1978 年（昭和 53 年）5 月下旬　少雨

帯状の高気圧におおわれて晴天が続き降水量は非常に少なく，旬間降水量は 1.5㎜であった。これは 1891 年（明治 24 年）～ 1978 年（昭和 53 年）の 87 年間の旬別少雨記録として第 3 位であり，1919 年（大正 8 年）以来の少雨であった。

1978 年（昭和 53 年）6 月 13 日　降ひょう

早朝，美馬郡・三好郡の一部で降ひょうがあり，農作物に被害があった。上空に寒気の流入と寒冷前線の通過により大気不安定となり，徳島で 1 時 20 分より発雷があり，3 時 40 分に終った。



葉タバコ被害 （脇町，美馬町，三加茂町）	82.6ha	1億9百30万円
ハッサク蜜柑被害 （美馬町，三野町）	30.0ha	2千百万円
桑被害 （三野町，三加茂町）	2.7ha	3百万円
ハウスいちご被害	0.1ha	80万円（貞光町）
合　　計	115.4ha	1億3千4百10万円

1978 年（昭和 53 年）6 月 11 日～ 7 月 4 日　梅雨

入り　　6 月 11 日（平年 6 月 8 日より 3 日遅く，昨年 6 月 7 日より 4 日遅い）
明け　　7 月 4 日（平年 7 月 14 日より 10 日早く，昨年 7 月 12 日より 8 日早い）
期間　　23 日（平年 36 日より 13 日短く，昨年 35 日より 12 日短い）

出梅が早く期間が短かかった。1964 年 7 月 1 日と 1973 年 7 月 3 日に次いでの第 3 位の早い梅雨明け。また，23 日の期間は 1964 年（20 日間），1967 年（22 日間）に次いで第 3 位であった。

1978 年（昭和 53 年）8 月 27 日　板野町の山火事

13 時 30 分頃, 板野郡板野町那東字キビガ谷の雑木林から出火, 火は延べ 5 日間 84 時間余にわたって燃え続け約 110ha を焼いた。この間，町は現地に災害対策本部を設置するとともに，自衛隊ヘリコプターによる空中からの消火剤の散布及び県広域消防相互応援協定に基づく隣接消防機関の応援を得て大規模な防御活動を展開し，民家等への延焼を阻止した。

被害額　2 千 5 百万円（板野西部消防組合調べ）

1978 年（昭和 53 年）　夏の干ばつ

3 月中旬から 4 月上旬まで寒気の流入で低温が続き，桜は平年より 1 週間も遅い開花となった。

逆に４月中旬からは暖気の進出が強く，初夏並の気温となった日もあり，寒暖の差が大きかった。５月中旬県南で大雨があり，その後太平洋高気圧におおわれて晴天が続き，６月 11 日梅雨入りとなった（平年より３日早い）。入梅後も太平洋高気圧が強く，早々に梅雨末期のような活動を示し，前線は日本海に停滞することが多かった。そのため全般に高温傾向で経過した。梅雨明けは７月４日（平年より 10 日早い），その後高温晴天が続いた。台風８号が８月２日接近したが衰弱し，県南山間部を除いて期待する程の雨量がなく，県北部に干害による被害が多かった。９月上旬にようやく台風，低気圧によって時々降雨があり，干害は次第に解消した。

	7　月		8　月		9　月	
平均気温	27.6	（ +1.8）	27.7	（ +0.8）	24.5	（ +1.0）
最高気温（平均）	31.7	（ +2.1）	31.9	（ +0.6）	28.3	（ +0.6）
降水量	mm 69.5	（－125.5）	90.5	（ －78.1）	110.0	（－178.8）
日照	時間 318.4	（ +113.9）	282.4	（ +41.4）	153.9	（－16.0）

作物名	被害面積	被害金額
水稲	645ha	185百万円
果樹	1,065	762
野菜	218	189
その他	1,866	489
計	3,794	1,625百万円

自家用トラックにビニール張りの急造タンクを積み，吉野川の水をくんで田畑まで運ぶ農家の人（脇町の小島潜水橋）
（徳島新聞社提供）

日照続きでほとんど底をついた県営宮川内ダム
（徳島新聞社提供）

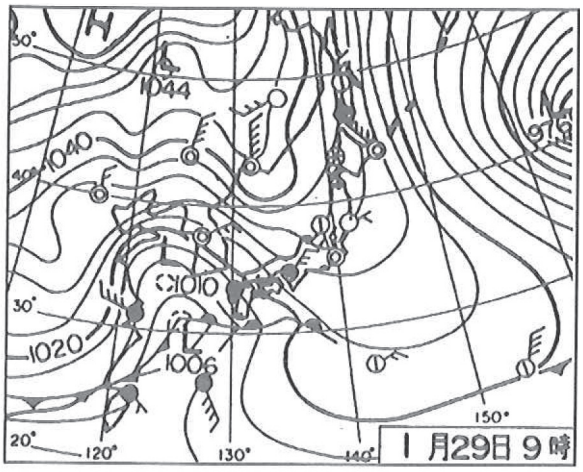
1979年

［昭和 54 年］

1979 年（昭和 54 年）1 月 29 日　大雨（低気圧）

四国沖を通過した低気圧により季節はずれの大雨となり，徳島の 10 分間降水量 16.0㎜は 1 月の第 1 位となる。（従来の極値は 1950 年 1 月 30 日の 7.0 ㎜）

29 日　日降水量　宍喰 132㎜，福原旭 101㎜，徳島 59㎜



1979 年（昭和 54 年）2 月　暖冬

2 月の月平均気温 8.3℃，平年より 2.9℃も高く，これは 1959 年（昭和 34 年）の 8.5℃に次ぐ第 2 位の高温記録となった。

1979 年（昭和 54 年）2 月 23 日　大雨

四国地方を東進した低気圧により県南部で大雨となり，日降水量は宍喰 154㎜，日和佐 133㎜，徳島 20㎜であった。

1979 年（昭和 54 年）3 月 30 日　高温

日本海の低気圧への暖気流入に伴い，徳島の最高 25.8℃，3 月の第 1 位となる。（従来の極値は 1956 年 3 月 25 日の 24.7℃）

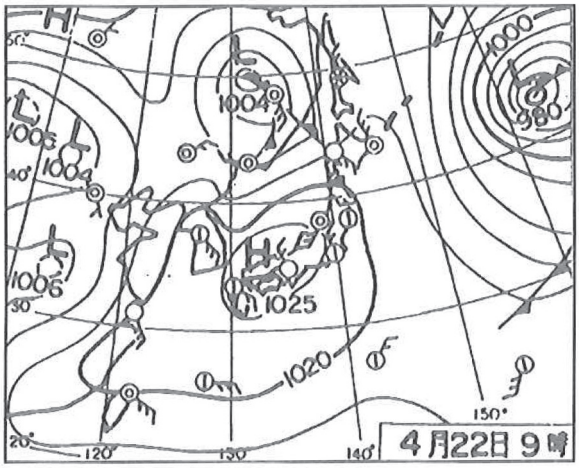
1979 年（昭和 54 年）4 月 8 日　大雨（前線）

日本海の低気圧から南西にのびる前線に伴う大雨があり，日降水量は宍喰 270㎜，福原旭 139㎜，徳島 81㎜であった。

1979 年（昭和 54 年）4 月 9 日　異常乾燥

最小湿度　14%（従来の極値 14%　1977 年 4 月 11 日）

1979 年（昭和 54 年）4 月 22 日　晩霜



移動性高気圧に覆われ，放射冷却により京上で最低気温－ 1.3℃を観測，県西部の山間部及び那賀川上流域の一部に霜害があり，茶 209ha，桑 74ha に被害をうけた。

被害額　2 億 3 千 5 百万円

1979 年（昭和 54 年）5 月 26 日　降ひょう

上空に強い寒気が流入し，大気が不安定となり昼前から夕方にかけて県南部を除いた各地にひょうを伴った強い雷が発生，降ひょうにより梨，葉タバコ，スイカ等 515ha にわたり被害があった。

被害額　6 億 1 千 2 百円

1979年（昭和54年）6月27日～30日　大雨（梅雨前線）

四国地方に停滞した梅雨前線の活動が活発になり，総降水量は剣山 610.5㎜，木頭 463㎜，京上 438㎜，徳島 233.5㎜となり，那賀川上流で死者 1 名を含め被害は県下各地に及び，被害額は 27 億 5 千万円となった。（県調べ）

1979 年（昭和 54 年）8 月 23 日　降ひょう

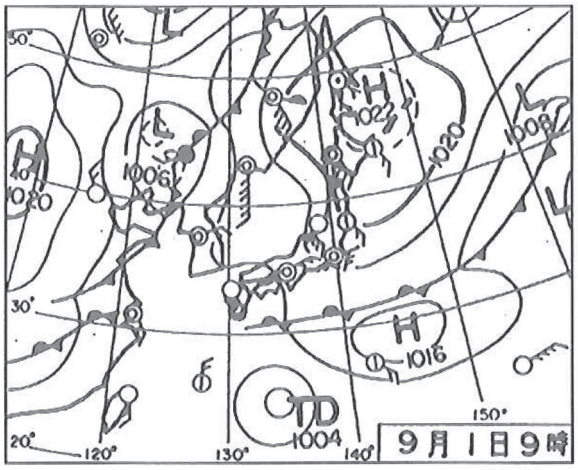
上空に寒気が流入し大気不安定となり，17 時 30 分頃から約 40 分，名東郡佐那河内村全域で直径 2

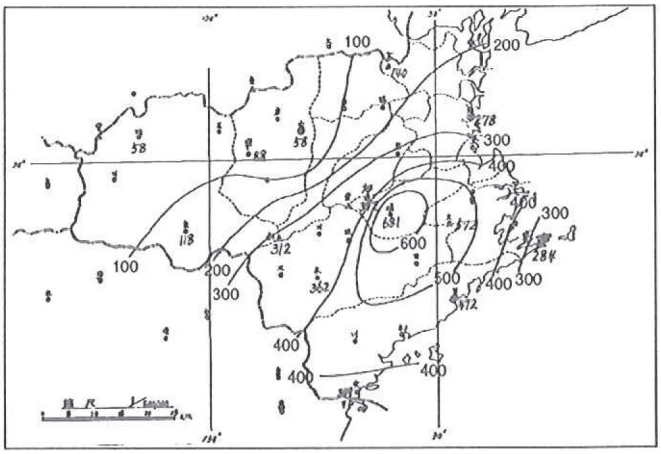
山崩れで全壊した民家　海南町浅川（徳島新聞社提供）

～ 3cmのひょうが降り，地面を白く覆った。

温州みかん 125ha，被害額 2 億 3 千 8 百万円

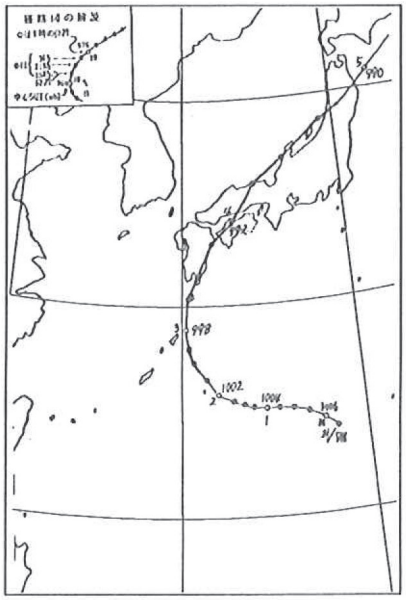
1979 年（昭和 54 年）9 月 1 日～ 4 日　暴風雨（台風 12 号）





雨量分布図

南大東島の北にあった熱帯性低気圧が急に発達（990mb）し，9 月 2 日 18 時台風になる。3 日 21 時 30 分頃，鹿児島県志布市付近に上陸し，その後豊後水道を通り 4 日 6 時頃，宇和島市付近に再上陸，四国北西部から玉野市付近を通り，16 時には日本海に出て北東に進んだ。徳島で最大風速は南南東の風 13.8m/s（4 日），最大瞬間風速は南南東の風 25.9m/s（4 日）を観測，各地の総降水量は福原旭 681㎜，太竜寺 572㎜，日和佐 472㎜，旭丸 372㎜，木頭 362㎜，宍喰 349㎜，徳島 278㎜となった。



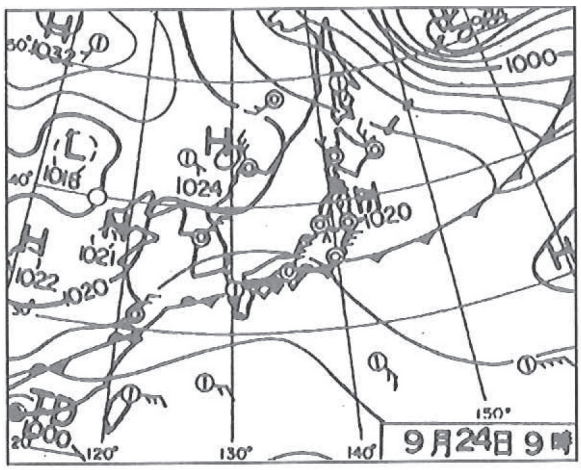
経路図

被害額　12 億 5 千 9 百万円

1979年（昭和54年）9月24日～10月1日　暴風雨（前線と台風16号）

（1）前線の概況

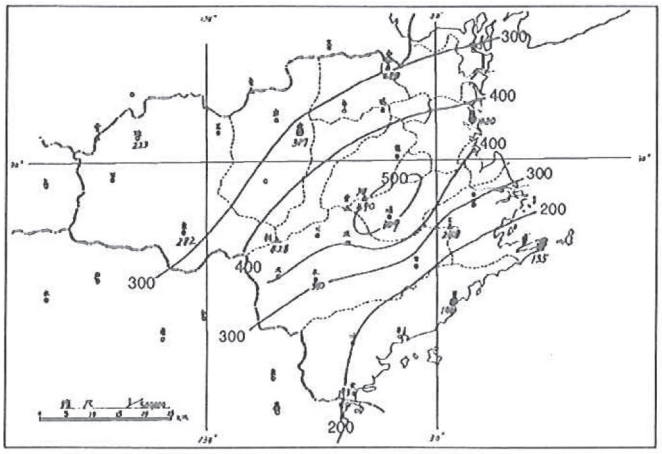
24 日 3 時にカムチャッカ半島付近の低気圧の中心から南西にのびる前線が西日本に停滞，気圧の谷の接近に伴い 24 日 15 時頃から前線の活動が活発となり，徳島の 1 時間雨量（24 日 20 時～ 21 時）は 62㎜の強雨となった。25 日には移動性高気圧が日本海を南東進するに従い前線の活動も弱まり，四国の南海上に停滞した。その後，台風の北上に伴い前線も再び北上した。



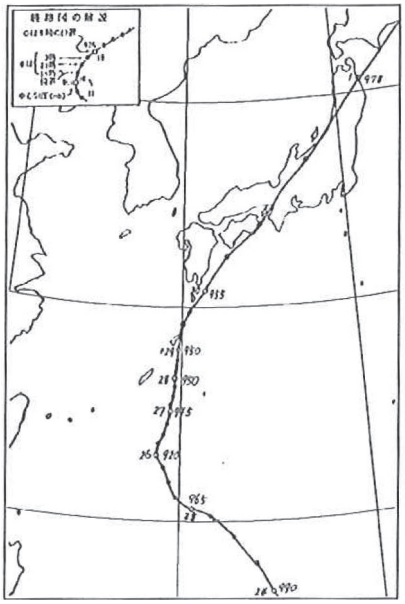
（2）台風 16 号

9 月 21 日 21 時ヤップ島北東海上に熱帯性低気圧が発生，23 日 15 時台風となる。26 日 6 時沖縄の南南東海上で 920mb まで発達，29 日 9 時奄美大島の南海上で 950mb になり北東に転じて加速し，30 日 18 時室戸岬の西に上陸，23 時大阪市に再上陸し 90㎞ / h の速度で東北地方を通過し，10 月 1 日 6 時八戸の北で海上に出て 15 時根室の北で温帯低気圧となった。

徳島では 20 時 40 分最低気圧 961.1mb，最大風速は東の風 23.0m/s，最大瞬間風速は東の風 41.2m/s を観測，また 20 時 40 分より約 10 分間風速は 2.7m/



雨量分布図



経路図

sと弱くなり，風向も東から北西に変わり，この間徳島市付近は台風眼の一部に入り，風の吹き返しが非常に強かった。総降水量は福原旭 509㎜，旭丸 490㎜，剣山 428㎜，徳島 420 となった。

死者 2，負傷者 9，家屋全壊 7，半壊 15，床上浸水 991，耕地の流失・埋没 8ha，道路損壊 98，耕地冠水 3,442ha，山（崖）崩れ 96

被害額　157 億円　（県調べ）

大木（アメリカカエデ）倒れる　城東小学校校庭
（徳島新聞社提供）

鴨島町内原の神社　直径 2，3m のムクの大木が強風のため倒れた
（徳島新聞社提供）

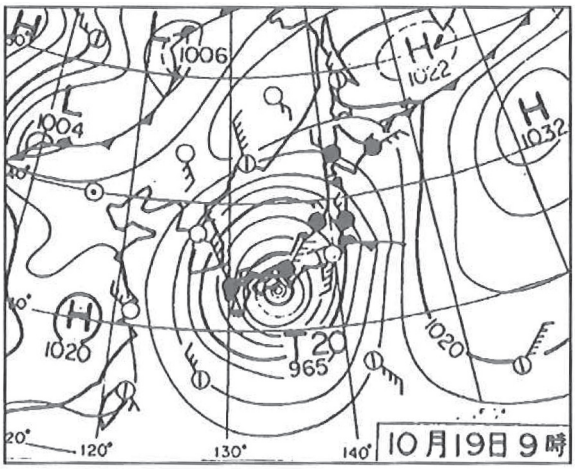
1979 年（昭和 54 年）10 月 19 日　暴風雨（台風 20 号）

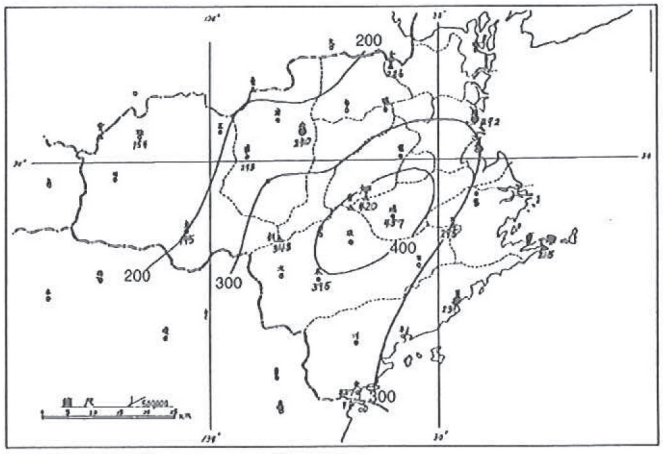
10 月 4 日 15 時トラック島の東海上で発生，6 日 15 時に台風となる。その後北西に進みながら勢力を強め，12 日 15 時には沖の鳥島の南南東 600㎞付近に達し，中心示度 870mb と史上かってない最低気圧となり，中心付近の最大風速は 70m/s と超大型となった。18 日 9 時那覇の南 150㎞の海上で北東に向きをかえ，加速しながら 19 日 6 時には足摺岬の南 100㎞の海上を北東に進み，9 時 40 分和歌山県白浜町付近に上陸し，15 時には東北地方へ進んだ。

徳島県下では 18 時早朝から降雨がはじまり，総降水量は福原旭 457㎜，旭丸 430㎜，剣山 346㎜，徳島 292㎜となり，那賀川・勝浦川流域が特に多かった。徳島における極値は最低気圧は 973.8mb，最大風速は東南東の風 16.7m/s，最大瞬間風速は南南東の風 29.5m/s，であった。

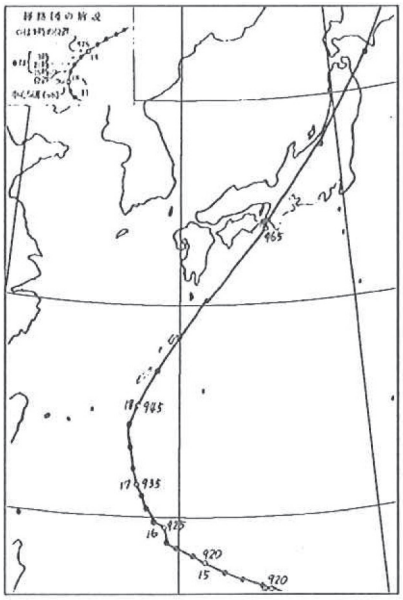
18 日の徳島の 10 分間降水量 22.5㎜は 10 月の第 1 位となる。（従来の極値 21.8㎜，1942 年 10 月 17 日）

死者 1，負傷者 3, 床下浸水 325, 耕地冠水 527ha, 道路損壊 6, 山（崖）崩れ 18, 被害額 96 億円（県調べ）





雨量分布図



経路図

1979 年（昭和 54 年）11 月 9 日～ 10 日　大雨（低気圧）

低気圧が土佐沖を東進したため，大雨となった。

総降水量　木頭 223㎜，宍喰 198㎜，旭丸 193㎜，福原旭 186㎜，徳島 134㎜

1980年

［昭和 55 年］

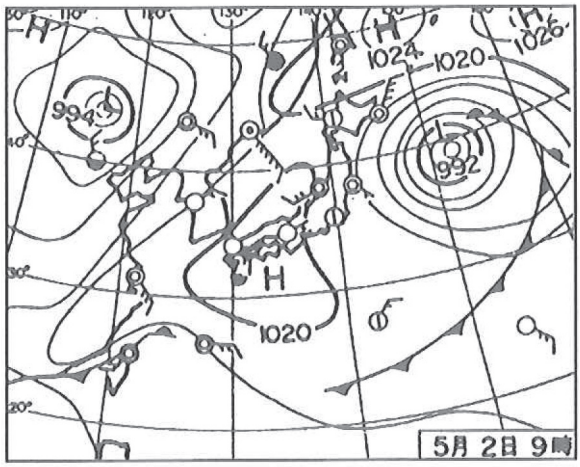
1980 年（昭和 55 年）2 月 10 日～ 13 日　上板・海南町の山火事

前月終りから優勢な冬型の気圧配置が続き，19 日まで全く降雨がなく空気が非常に乾燥した日が続き，10 日には板野郡上板町泉谷，13 日には海部郡海南町相川で山火事が発生した。損失面積は泉谷 21.5ha，相川 49.4ha におよんだ。　（県調べ）

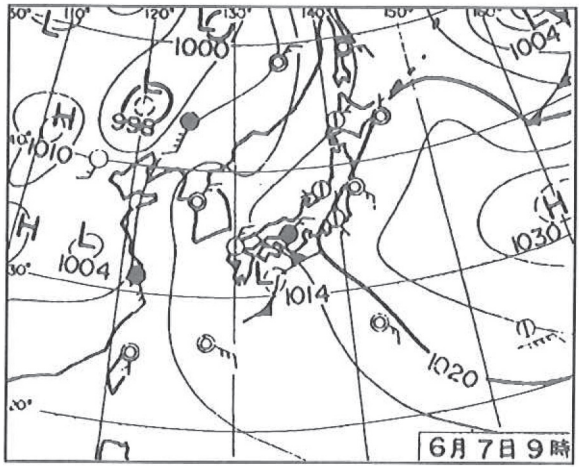
1980 年（昭和 55 年）5 月 2 日　晩霜

移動性高気圧に覆われ，放射冷却による早朝の冷え込みが強く，京上で－ 0.6℃を観測，県西部及び山間部を中心に茶・桑に晩霜による被害があった。

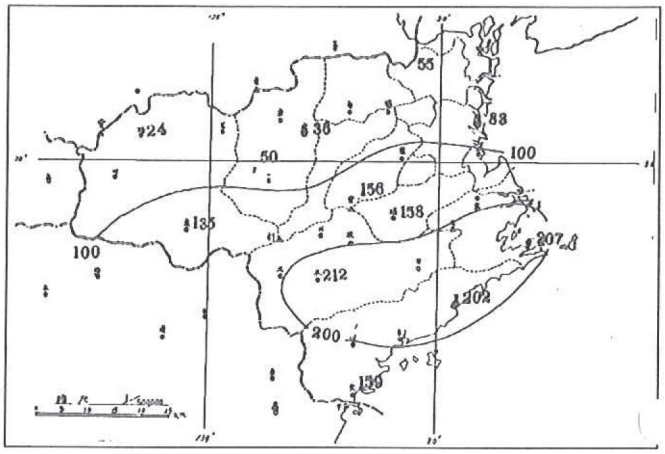
被害額　　1 億 2 千 2 百万円　（県調べ）



1980 年（昭和 55 年）6 月 7 日～ 9 日　大雨（梅雨前線）



梅雨前線の活動が活発となり，県南部を中心に 3 日間で 200 ～ 250㎜の降雨があり，蒲生田 207㎜，日和佐 202㎜，木頭 212㎜を観測した。また，徳島でも 7 日に 10 分間降水量の最大値 13.5㎜を観測し，6 月の極値の順位第 5 位となった。



雨量分布図

1980 年（昭和 55 年）7 月 23 日　降ひょう

前線の南下に伴い寒気の流入により大気が不安定となり，吉野川中流域沿い（阿波・山川・穴吹・脇・貞光の各町）で直径 1 ～ 2cmの降ひょうを伴った強い雷雨があり，農作物の一部に被害があった。

被害面積　47.98ha，被害金額　2 千 3 百万円　（県調べ）

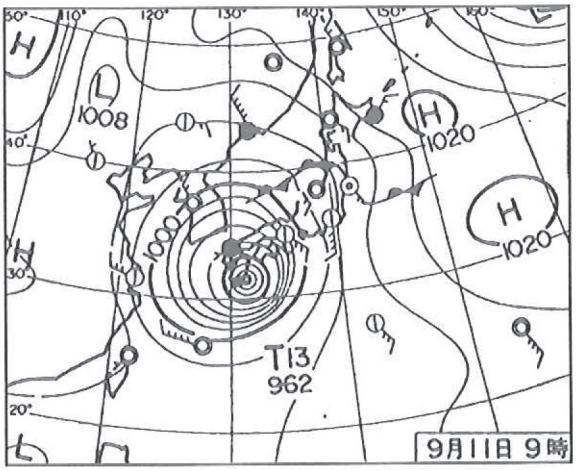
1980 年（昭和 55 年）7 月下旬～ 8 月　異常低温と寡照（不作）

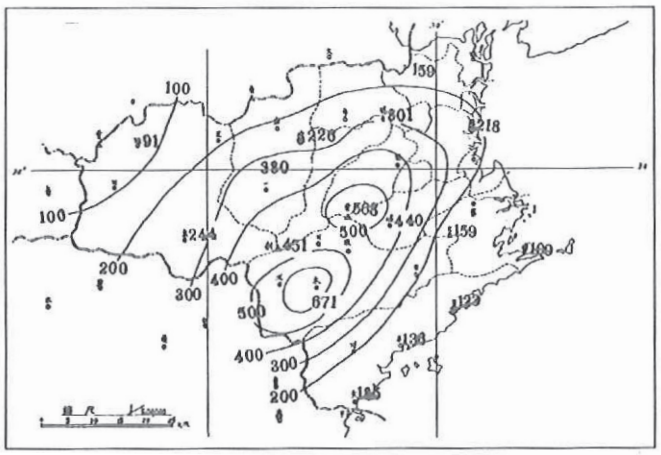
7 月下旬より低温傾向となり，日照不足も 8 月にかけて次第に顕著となった。特に 8 月上旬の平均気温は 24.8℃と 40 年ぶりの異常な低温を記録。日高気温の平均は 28.5℃と平年に比べ 2.8℃低く，また日照時間も 102.0 時間で平年比 42％と異常に少なく，共に開設以来第 1 位の記録となった。

この異常低温と寡照の影響を受け，水稲成育の遅れ，軟弱徒長が目立ち，葉イモチの発生面積約 10,000ha に達した。このため水稲の作柄は「不良」となり，農作物全体の中で最も大きな被害を受けた。その他，野菜・果樹・特用作物等の被害もかなり大きく，農作物全体として総額 69 億 1 千万円の被害となった。

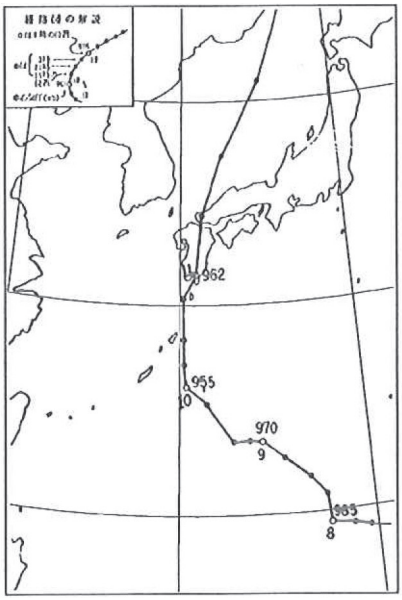
1980 年（昭和 55 年）9 月 11 日　暴風雨（台風 13 号）

台風 13 号は 11 日 8 時 (962mb) 九州の大隅半島に上陸し，そのまま北上を続け，九州を縦断し，周防灘を経て 11 日 15 時山口県に再上陸，その後，中国地方西部を横断し，日本海に抜け北東進を続けた。





雨量分布図



経路図

倒壊した製綿工場　矢三３丁目（徳島新聞社提供）

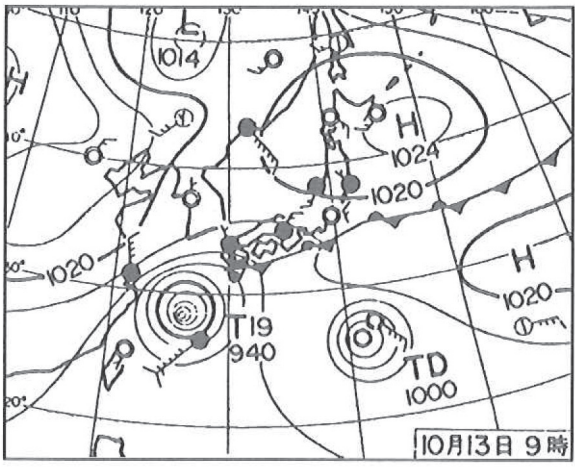
この台風の本県最接近時の中心示度は 965mb，徳島における最低気圧 989.1mb，最大瞬間風速は南南東の風 36.5m/s を 11 日 13 時 10 分にそれぞれ観測した。また雨量は福原旭 , 旭丸等県中部山地の南東斜面を中心とする一帯が極端に多く，旭丸では 568㎜（10 日～ 11 日）を観測した。

死者 1，負傷者 1，床下浸水 1,072，山 (崖) 崩れ 36　等　(県警調べ)

被害額　62 億 3 千 6 百万円。(県調べ)

1980 年（昭和 55 年）10 月 13 日～ 14 日　暴風雨（台風 19 号）

台風 19 号は 11 日 9 時中心示度 925mb で宮古島の東南東の海上を北上し，次第に北北東から東北東に進路をかえ，14 日 9 時には 950mb で足摺岬の南 150㎞の海上を時速 50㎞で加速しながら東海道沖へと進んだ。

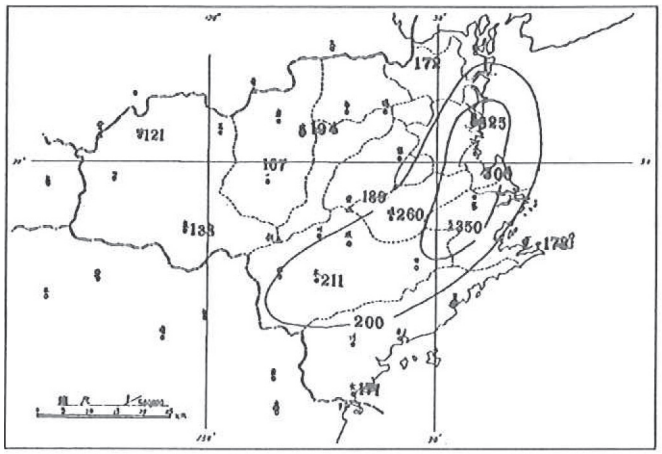


この台風に伴う徳島における最低気圧は，14 日 14 時 10 分 998.7mb，最大瞬間風速は 14 日 10 時 20 分 N19.1m/s を観測した。

また，総降水量は太竜寺山 350㎜，徳島 325㎜，福原旭 260㎜，木頭 211㎜となり，その他の観測所では 200㎜以下であった。特に徳島の 13 日の日降

水量 216.5㎜は 10 月の極値の順位第 3 位となった。

被害額　6 億 5 千 6 百万円（県調べ）



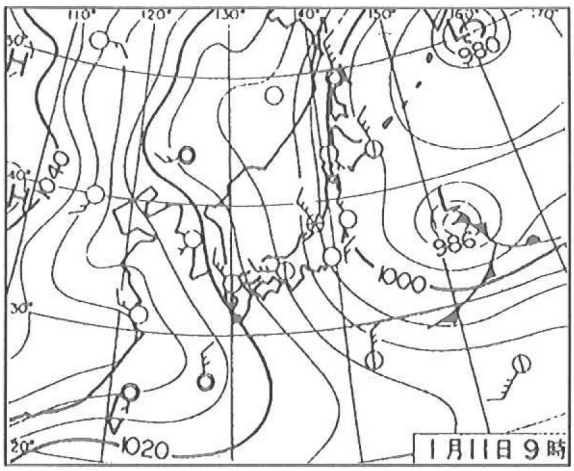
雨量分布図

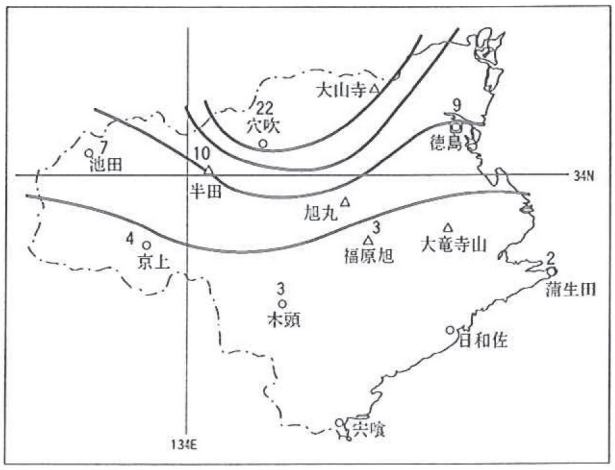
数十メートルにわたって山腹崩壊土砂に埋った県道　木沢村
（徳島新聞社提供）

1981年

［昭和 56 年］

1981 年（昭和 56 年）1 月 11 日　積雪





積雪の深さ（09 時）（cm）

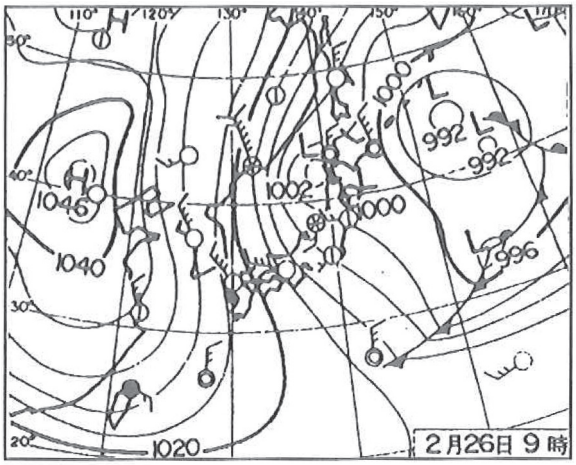
大陸から優勢な高気圧が張り出し，西日本付近は等圧線が南北に立って込み合う強い冬型の気圧配置になった。11 日には輪島上空 5,500m 付近に氷点下 40 度の強い寒気が流入した。このため，徳島の日平均気温は 0.8 度，最低気温は氷点下 1.1℃となり，京上の日平均気温は氷点下 3.1℃，最低気温は氷点下 4.7℃と冷え込んだ。また，北西の季節風が強く，最大風速は徳島で 9m/s，池田で 5m/s であった。

寒気の流入と強い季節風により，海部郡の沿岸部を除く各地で積雪があった。11 日 09 時の県下各地の積雪は，穴吹 22cm・半田 10cm・徳島 9cm・池田 7cmなどであった。

1 月の積雪第 1 位の記録は 1906 年（明治 39 年）の 13cmであり，今回の徳島市の積雪 9cmは，1 月としては 1892 年の観測開始以来，第 3 位の記録である。なお，徳島市における最深積雪の記録は，1907 年（明治 40 年）2 月 11 日の 42cmである。

この積雪により，県下の交通機関は西部を中心に大混乱し，徳島市バスは 68 便が運休，翌 12 日も早朝 5 便が運休した。

1981 年（昭和 56 年）2 月 25 日～ 27 日　異常低温



凍結のため破裂し水を噴き上げる給水管　鳴門市大津町吉永
（徳島新聞社提供）

25 日から冬型の気圧配置が強まった。輪島の上空 5,500m には氷点下 48℃の寒気があり，氷点下 30℃の線が本州南岸まで南下した。富士山頂では 27 日の最低気温が氷点下 38℃と，富士山測候所の観測開始以来最低気温を記録するなど全国的に冷え込んだ。

徳島でも 25 日から冷え込みが強く，26 日には徳島市で最高気温が氷点下の真冬日になった。

徳島市の真冬日は，1936 年 1 月 17 日以来，45 年ぶり 2 度目である。

26 日の県下各地の日平均気温と最高気温・最低気温は次のとおりである。

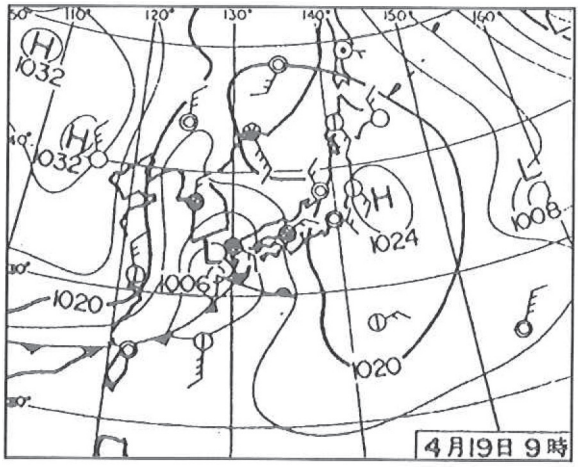
なお，27 日に記録した徳島の最低気温氷点下 5.9 度は，観測開始以来第 2 位の記録である。京上では 27 日に 25cmの積雪があった。

この異常低温により，交通の混乱や水道管の破裂，農作物被害などが発生した。交通はバスが 26 日の始発から正午まで運休，午後から旧市内と国道は回復したが，その他は終日運休した。

水道管破裂は，徳島市水道局調べで修理件数 3,473 件，業者に直接修理依頼したものが 4,000 ～ 5,000 件あるもよう。県南でも低温による水道管破裂が，牟岐で約 200 件，宍喰で約 150 件発生した。

農作物被害は，果樹・野菜・麦・花き等に大きな被害が生じた。中でも柑橘類の被害が大きく，勝浦郡など温州みかんに甚大な被害が発生し，徳島県が 1983 年（昭和 58 年）3 月に「かんきつ寒害記録」を刊行している。農作物の総被害面積は，6,582ha におよんだ。

1981 年（昭和 56 年）4 月 19 日～ 20 日



日本の東海上に中心を持つ高気圧の勢力が強く，低気圧は九州付近で閉塞して二つになって接近した。低気圧の主力は四国の南岸を東北東に進み，19 日に県南部を中心に強い雨を降らせた。この強雨で海部郡日和佐町の県道，日和佐－鷲敷線の北河内で土砂崩れがあり通行止めとなった。

風は 19 日から 20 日にかけて強まり，最大風速は徳島で 20 日 10 時 00 分に西北西の風 12.9m/s，最大瞬間風速は徳島で 20 日 09 時 30 分に西北西の風 23.1m/s を観測した。この強風により，船舶の欠航が相次ぐなど海上交通が混乱した。

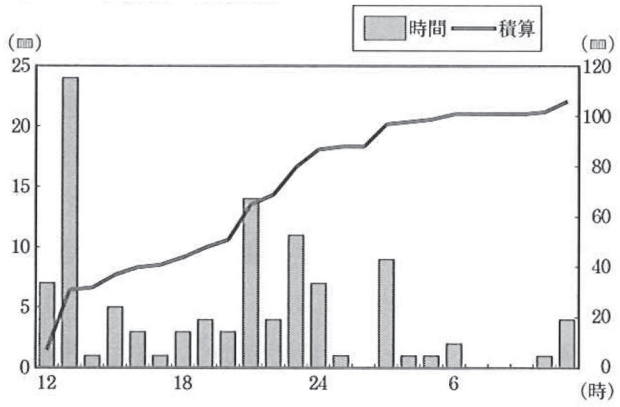
1981 年（昭和 56 年）7 月 11 日～ 12 日　土砂崩れ

太平洋高気圧の勢力が強まり，梅雨前線は日本海南部まで北上した。四国地方は太平洋高気圧の縁辺流による強い暖湿気の流入で，大気は不安定となり県南部では積乱雲が発達した。

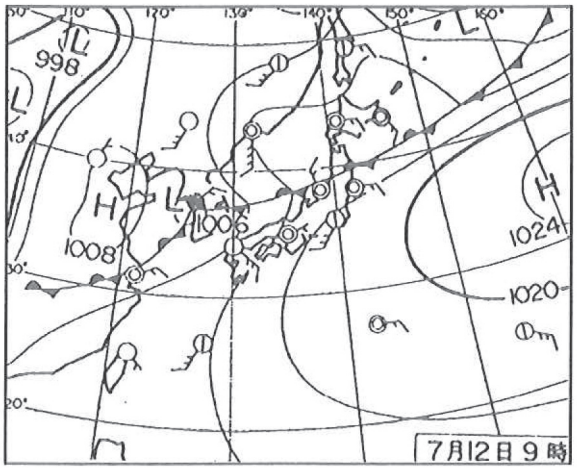
雷を伴った強い雨は，11 日から 12 日まで降り続き，木頭では 11 日 01 時から 12 日 23 時までの降水量が 145㎜，11 日の日降水量が 95㎜となった。その他の観測所での総降水量は，蒲生田 98㎜，日和佐 80㎜，宍喰 95㎜であった。

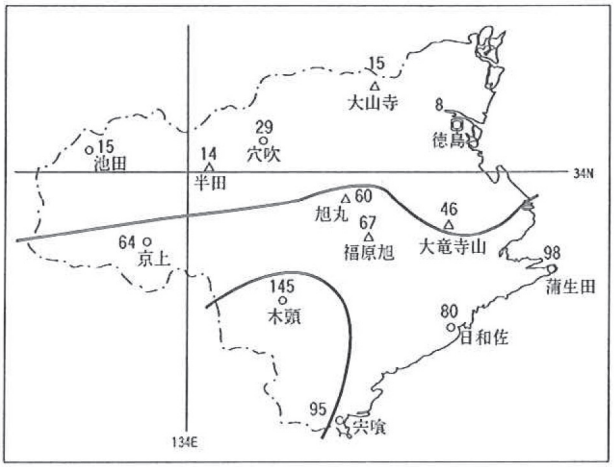
この強雨により，那賀郡木頭村折宇の国道 195 号線で土砂崩れがあり，通行止めとなった。

木頭（7 月 11 ～ 7 月 12 日）



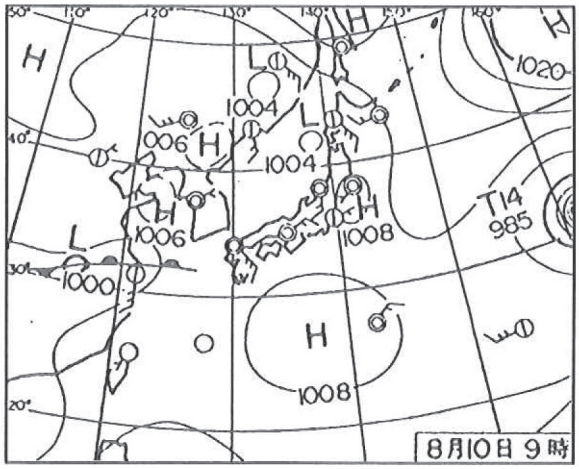
穴吹町の土砂崩れ現場（徳島新聞社提供）

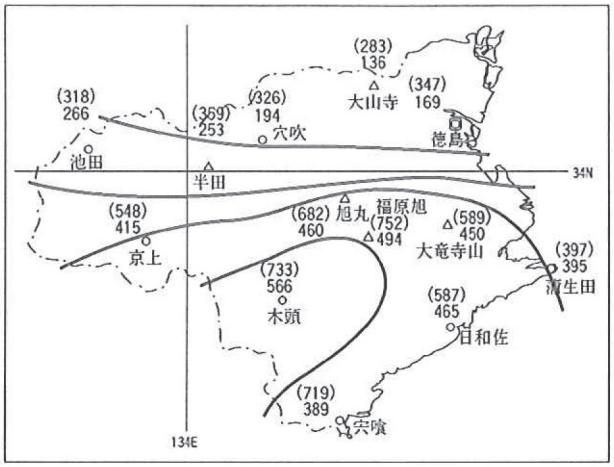




総雨量（mm）

1981 年（昭和 56 年）夏　干害





総雨量（mm）（　）内は平年値

四国地方の梅雨は 7 月中旬の後半に明けた。梅雨明け後は太平洋高気圧におおわれて，安定した晴天が続いた。

7 月 30 日夜半過ぎに台風第 10 号が宮崎県日南市付近に上陸，8 月 3 日から 4 日にかけては台風第 12 号が本州の東海上を北上，23 日には台風第 15 号が千葉県館山市付近に上陸した。

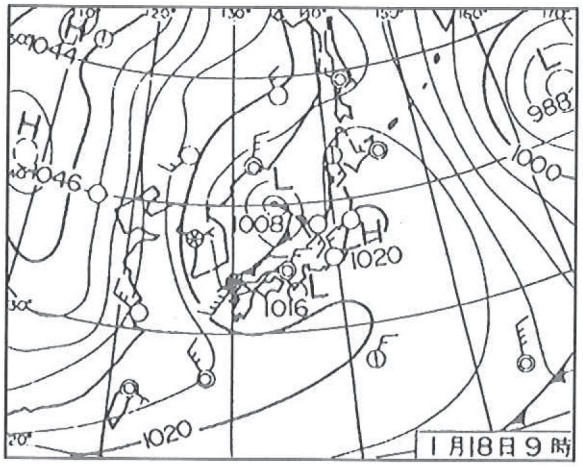
このように，台風は徳島から離れて通ったため，降水量は平年に比べて極めて少なかった。徳島の月降水量は 7 月が 103.5㎜で平年比 53％，8 月は 65.0㎜で平年比 25％で，7 月 16 日から 7 月 31 日までの 16 日間は無降水が継続した。

このため，阿波郡市場町の一部で，8 月 26 日から 9 月 17 日までの間，隔日給水になるなど一部で水不足が発生した。幸いにして，野菜の被害は小さかった。

1982年

［昭和 57 年］

1982 年（昭和 57 年）1 月 16 日～ 20 日　積雪・凍結

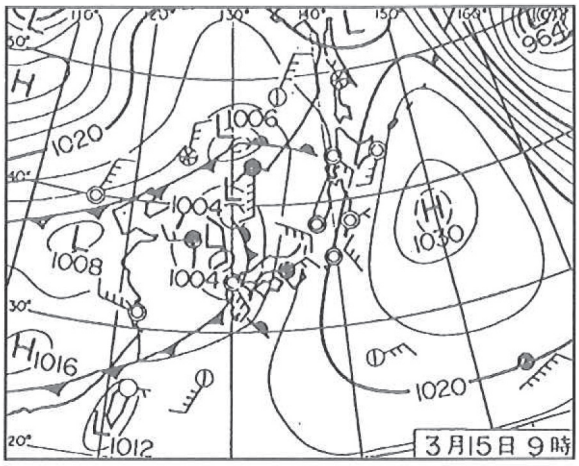


冬型の気圧配置が強まったため，強い寒気の南下で県西部を中心に積雪と凍結があった。このため，山間部を中心に交通が混乱した。16 日から 20 日までの徳島の期間平均気温は 2.7 度であった。この期間において，最低気温を観測した日の各観測所の気温は次のとおりである。

積雪と凍結によって陸上の交通が混乱し，徳島市内は午前中，山間部では終日全便運休した。また，鉄道は急行が 4 本運休したほか，ダイヤに遅れが生じた。

観　測　所	日	平　均　気　温	最　高　気　温	最　低　気　温
池　　田	18	0.0	5.6	−4.7
穴　　吹	18	1.0	7.4	−4.9
徳　　島	18	3.2	10.7	−2.0
京　　上	17	−2.7	1.2	−8.1
蒲　生　田	19	2.4	4.7	−0.6
木　　頭	20	−1.3	6.8	−6.3
日　和　佐	20	2.6	8.3	−2.7
宍　　喰	20	2.2	7.7	−2.3

1982 年（昭和 57 年）3 月 14 日～ 15 日　強風



14 日は移動性高気圧の後面で吹く南東の風が強まった。15 日は深い気圧の谷の中に入り，夕方には四国付近で 1004hPa の低気圧が発生，日本海にも低気圧があり二つ玉低気圧となった。四国付近の低気圧は発達しながら北東に進み，徳島では南よりの風が強まった。

最大風速は徳島で 15 日 10 時 00 分に南南東の風 13.1m/s，最大瞬間風速は徳島で 15 日 10 時 00 分に南南東の風 22.6m/s を観測した。

この強風により，船便に欠航や遅れが発生し，航空便に欠航が発生した。また，強風により海藻類の養殖施設やわかめなどに多少の被害が発生した。

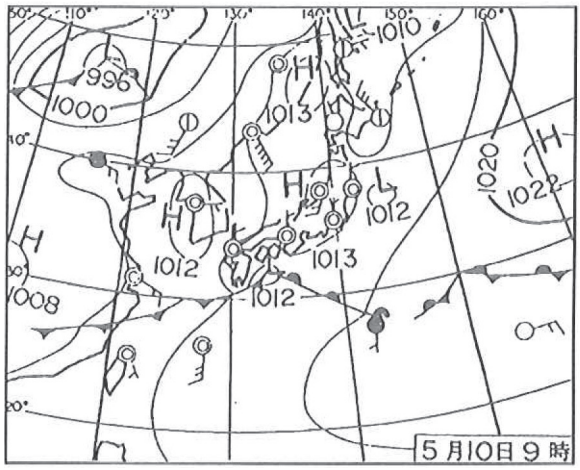
1982 年（昭和 57 年）5 月 9 日～ 13 日　濃霧

日本の南海上に前線が停滞し，前線上に発生した低気圧が 10 日に四国沖を通過した。また，東海上には高気圧があって暖湿気が流入したため，沿岸および沿岸海上では濃い霧が発生し，9 日の鳴門海峡の視程は 50m 程度になった。

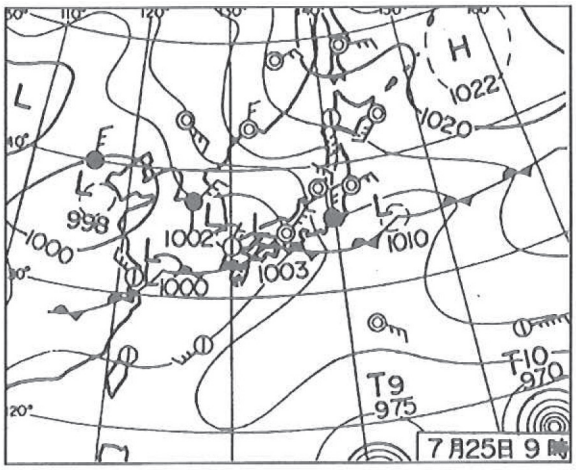
鳴門海峡の飛鳥東方 200m 付近で，砂利運搬船第 11 日港丸 999 トンと，貨物船第 7 栄福丸 498 トンが衝突，この事故で第 11 日港丸が沈没し，第 7 栄福丸が小破した。また，11 日は濃霧により船便の欠航・遅延と航空便の遅延が生じ，13 日は船便と航空便に欠航・遅延が生じた。

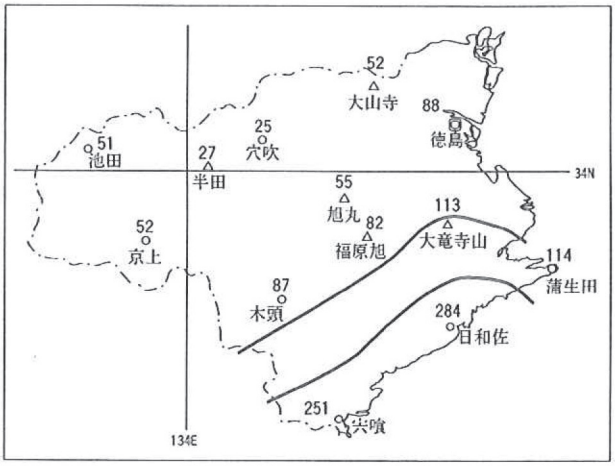
期間中の徳島の湿度

日	平均湿度	最小湿度
9	74	57
10	79	60
11	86	66
12	78	60
13	81	57



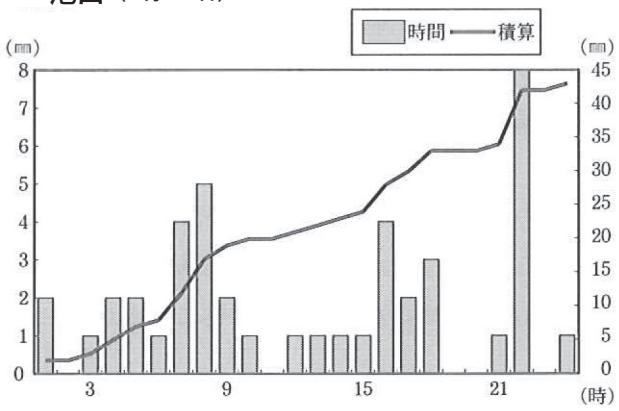
1982 年（昭和 57 年）7 月 23 日～ 25 日　大雨



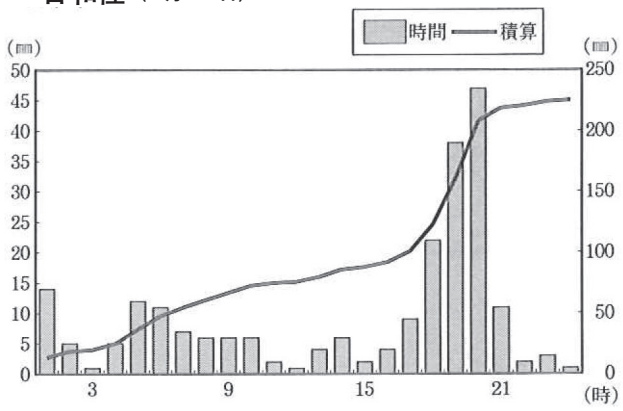


総雨量（㎜）

池田（7 月 24 日）



日和佐（7 月 24 日）



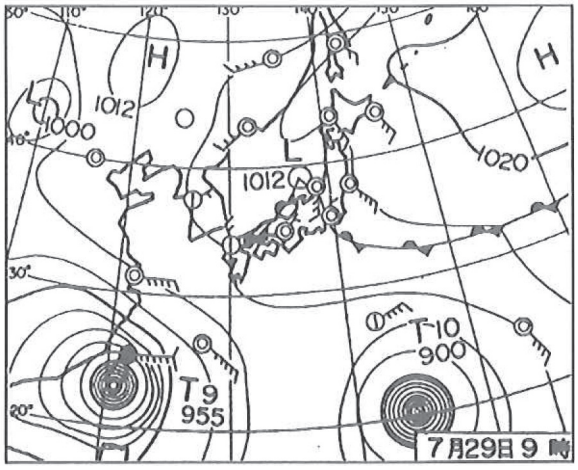
梅雨前線上に発生した低気圧が 23 日には東シナ海まで接近し，24 日から 25 日にかけて西日本を通過した。この低気圧と梅雨前線により西日本各地で大雨が降り，23 日には長崎大水害が発生し 24 日には熊本豪雨が発生した。

徳島では 23 日の夕方から雨が降り始め，24 日には県南部で 200㎜を超える大雨が降った。24 日の日降水量は日和佐 225㎜，宍喰 220㎜であった。この大雨により，24 日夕方には牟岐線の由岐－牟岐間と桑野－由岐間の運転が休止，牟岐線普通列車 3 本が運休した。24 日 08 時 30 分には海部郡日和佐町北河内で，幅 10m，高さ 10 ｍにわたって山崩れが発生した。この流出土砂によって，納屋（住家）が半壊し，建築中の 2 階建て住宅の一部を破損した。

24 日 10 時頃，三好郡山城町信楽地区で山崩れが発生し，県道栗山－殿野間が通行止め。また，

阿南市でも数ヵ所で山崩れが発生した。

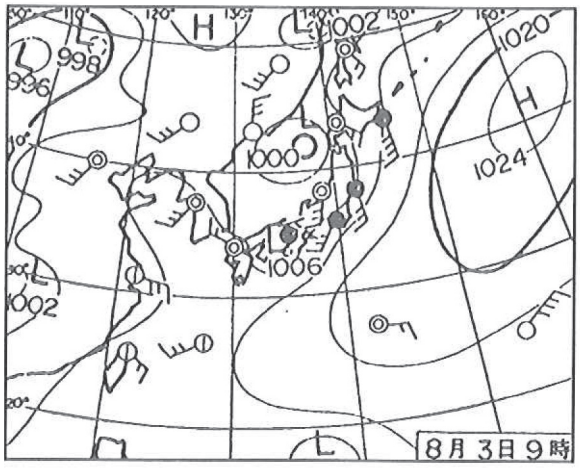
1982 年（昭和 57 年）7 月 29 日　雷



梅雨明け直後で北のほうに梅雨前線があり，太平洋高気圧からの暖湿気が流入して不安定な気象状態になった。また，強い日差しにより熱せられた地面で空気が暖められ，午後には一層不安定な気象状況になった。

このため，積乱雲が発達して各地で発雷し，落雷による被害が多発した。四国電力徳島営業所の調べによると，18 時 05 分頃，板野郡板野町で高圧線に落雷し町内約 1,400 戸が停電，18 時 15 分頃には美馬郡美馬町で約 700 戸が停電，19 時 20 分頃には徳島市内の約 600 戸が停電，20 時 15 分頃には阿南市内で約 1,000 戸が停電した。

1982 年（昭和 57 年）7 月 1 日～ 8 月 21 日　冷害

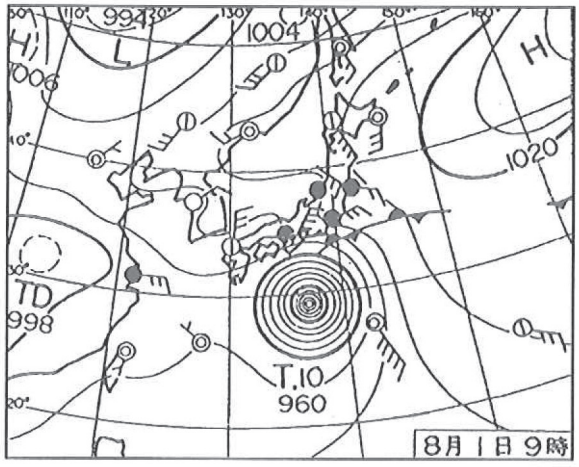


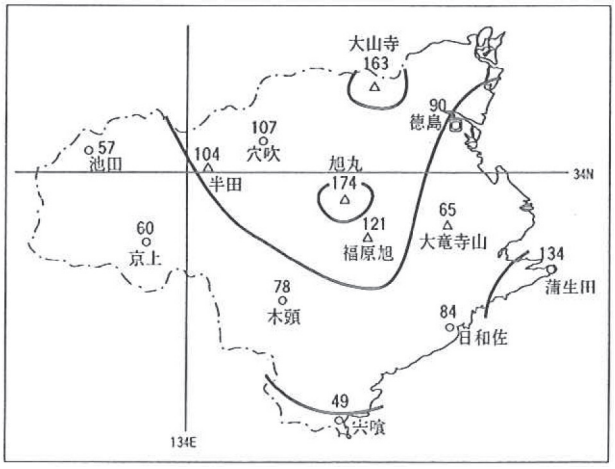
7 月は梅雨前線が南海上に停滞し，オホーツク海高気圧から噴き出す冷たい空気が流入した。いわゆる，北東気流型の天気で，冷害を発生させる代表的な気圧配置である。

7 月の月平均気温は，徳島市で 24.0 度，平年より 1.9 度低かった。また，最低気温は 7 月 1 日に平年より 5.1 度低い 16.2 度を観測した。8 月に入ると徐々に高温に向かったが，前半は平年より低い状態が続いた。

この低温により県南部では 200ha にわたって水稲にイモチ病が発生し，県北部では板野郡の葡萄園で 100ha が斑点病になるなど農作物に被害が発生した。

1982 年（昭和 57 年）8 月 1 日～ 2 日　台風 10 号

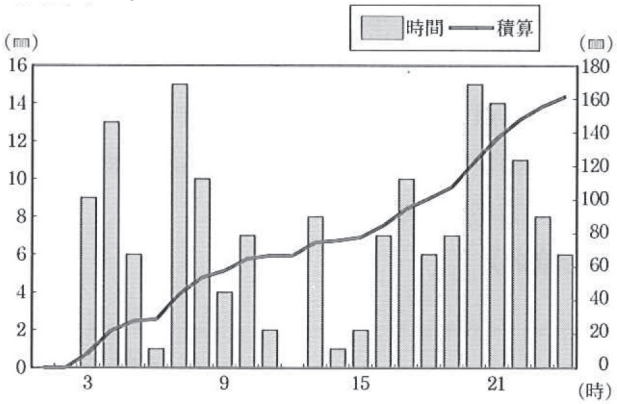




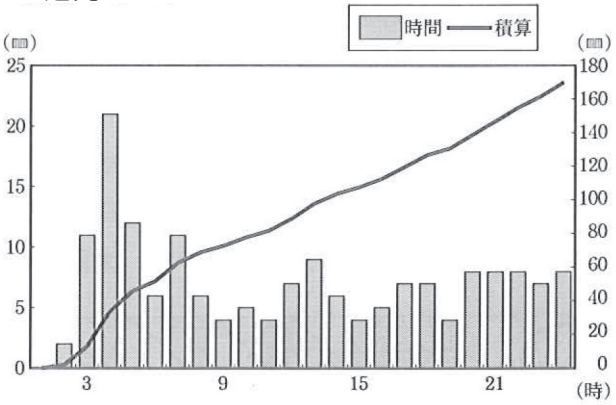
雨量分布図（㎜）

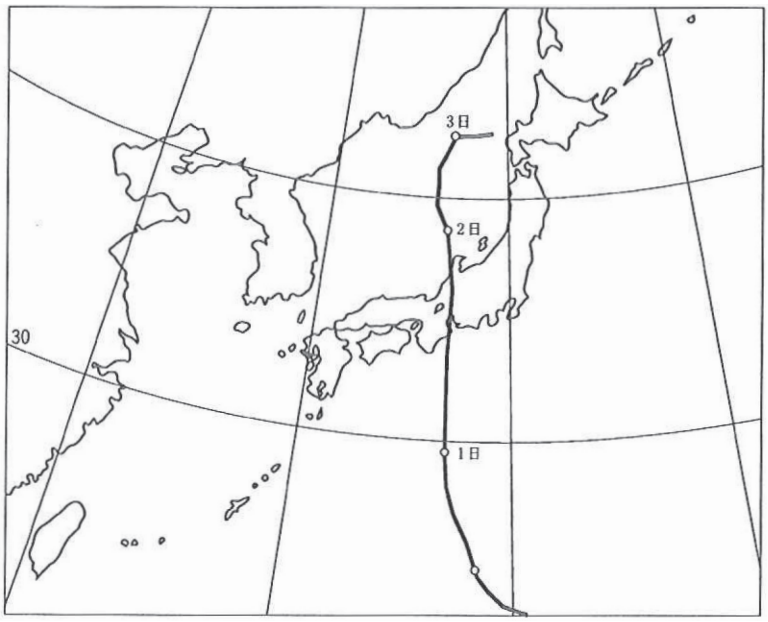
台風 10 号は 7 月 24 日 03 時に日本の遥か南東洋上で発生し，27 日までゆっくりと西に進んだあと向きを北西に変えて日本に接近した。8 月 1 日午後 6 時には潮岬の南東約 200㎞の海上まで接近し，1 時間 35㎞の速さで北上，2 日午前 0 時に渥美半島西部に上陸した。2 日午前 6 時過ぎに日本海へ出て午後 3 時に温帯低気圧になった。

大山寺（8月1日）



旭丸（8月1日）





経路図

徳島では1日の昼頃から風が強まり，最大風速は徳島で1日19時40分に北北西の風8.5m/s，最大瞬間風速は徳島で1日20時40分に北西の風，19.1m/sを観測した。

総降水量の最大値は神山町の旭丸で1日02時から2日01時までに173㎜を観測，日降水量の最大値は神山町の旭丸で1日に170㎜を観測した。1時間降水量の最大値は木頭で，1日03時から04時までの間に30㎜を観測した。

台風本体の雨雲は1日早朝から徳島県にかかり始め，1日昼前と夜半前に強い雨が降った。

台風の雨により1日15時30分頃，美馬郡半田町の蔭名－小野間で高さ5m，幅3mにわたって山肌が崩壊した。2日01時頃，池田町西山香川用水取り入れ口西方200mの山肌が，約300立方メートル崩壊した。

道路関係では，山腹崩壊や路肩損壊等で，県道11ヵ所，市町村道5ヵ所で被害が発生した。

農林水産施設関係では上勝町・神山町・佐那河内村等で畦の損壊，水路や農道決壊19ヵ所が発生した。

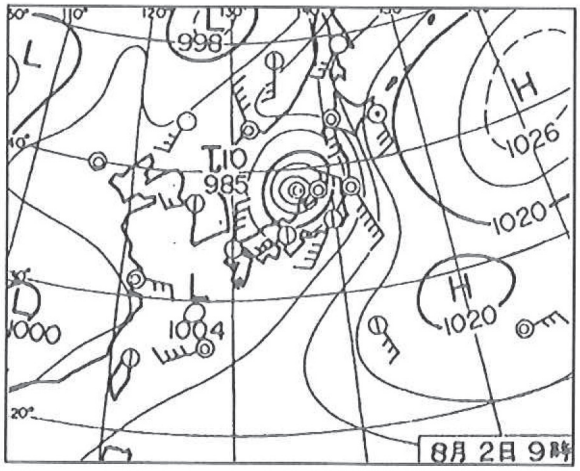
農作物関係では，鳴門町・松茂町・北島町で蓮根14ha，梨273haに倒伏や落果の被害が発生した。

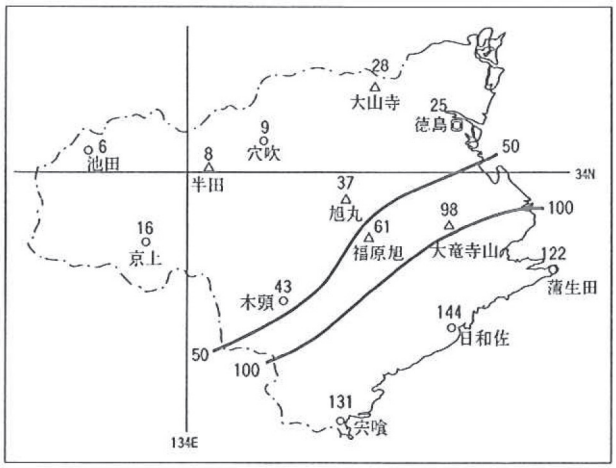
海上交通は，1日午後から2日午前中にかけて全便欠航。航空は，1日に5便が欠航した。

2日午後には，海部郡海南町の大里海岸で，県外から臨海学校に来ていた小学生2名が高波にさらわれ，救助のために海へ飛び込んだ引率者1名の計3名が行方不明となった。

日和佐町大浜海岸に打ち寄せる大波
（徳島新聞社提供）

1982 年（昭和 57 年）8 月 2 日～ 3 日　大雨（台風 9 号崩れ）





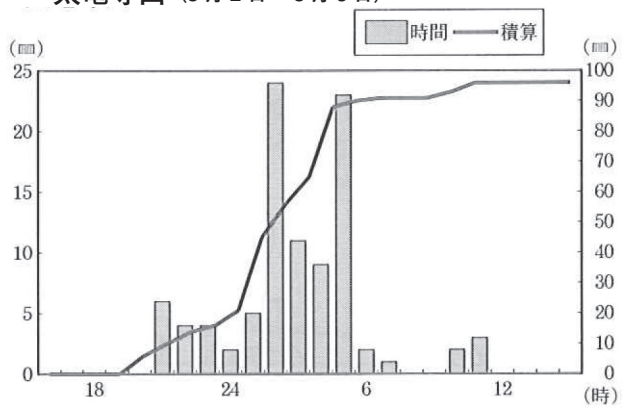
総雨量（㎜）

台風第 10 号が遠ざかった 2 日の日中には一時的に晴れ間が広がった。しかし，大陸に上陸して弱まった台風 9 号崩れの低気圧が四国の南海上を通過したため，2 日夜から 3 日にかけて県南部を中心に大雨が降った。総降水量の最大値は日和佐で 144㎜，日降水量の最大値は日和佐で 3 日に 115㎜を観測した。1 時間最大値は日和佐で，3 日 05 時から 06 時の間に 59㎜を観測した。

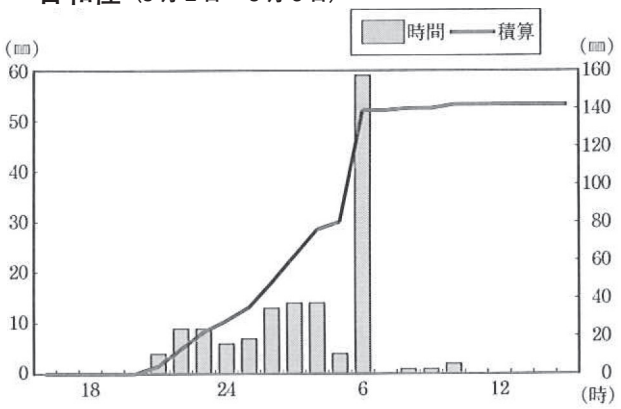
阿南市加茂町では，3 日 06 時 45 分頃，山肌が崩れ約 5 トンの土砂が流出した。3 日朝には阿南市富岡町西池田地区で 7 戸，滝の下地区で 6 戸，宝田町井関地区で 5 戸がそれぞれ床下浸水した。

また，鉄道は牟岐線の普通列車上下 5 本に 10 分から 80 分の遅れが生じた。

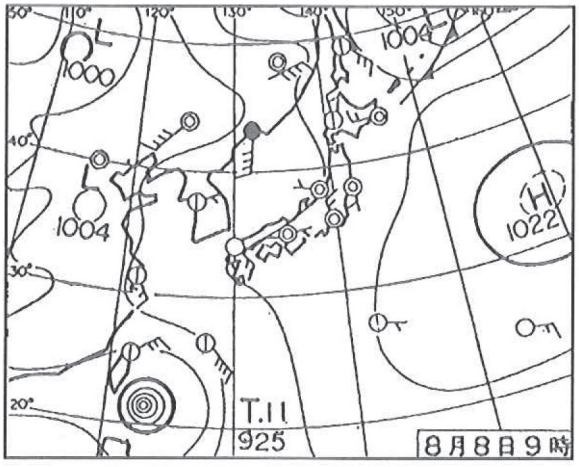
太竜寺山（8 月 2 日～ 8 月 3 日）



日和佐（8 月 2 日～ 8 月 3 日）



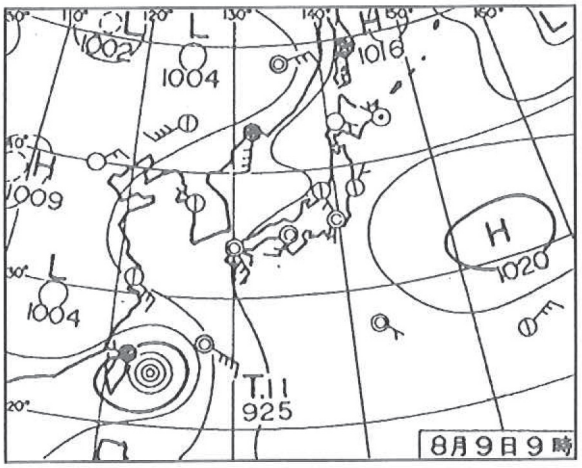
1982 年（昭和 57 年）8 月 8 日　ヒョウ



四国地方は日本の東海上に中心を持つ太平洋高気圧の縁辺に位置し，暖湿気の流入で大気不安定となった。このため，全国的に雷の被害が続出した。

徳島県でも積乱雲が発達して各地で発雷した。県西部の三好郡三加茂町では，15 時 30 分～ 16 時 00 分にかけて激しい雷とともに直径 2 ～ 3㎝のヒョウが降った。このヒョウにより，農家 20 戸で栽培しているキュウリが被害を受け，約 2ha で全滅状態となった。

1982 年（昭和 57 年）8 月 9 日　雷



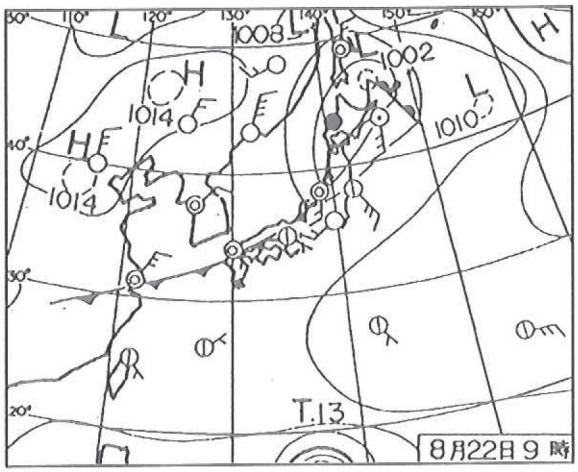
前日はヒョウが降るなど激しい天気になった。この日はヒョウは降らなかったが，前日同様，大気は不安定な状態が続いて積乱雲が発達した。

14 時頃には，徳島市内を中心に激しい雷雨があり，高圧線トランスなどに落雷した。このため，徳島市内の 6,800 戸が停電し，信号機 17 箇所に異常が発生した。

1982 年（昭和 57 年）8 月 19 日～ 23 日　赤潮

鳴門市北灘沖と内の海に赤潮が発生した。県水産課の調べによると 21 日に，北灘沖で 1cc中に，有害プランクトンである紡錘型ホルネリアを最低 116 個～最高 3,280 個を検出した。この赤潮により養殖ハマチ 93,970 匹に被害が出た。

なお，県水産課の調べによると 09 時～ 11 時の海水温度の観測値は次のとおりであった。



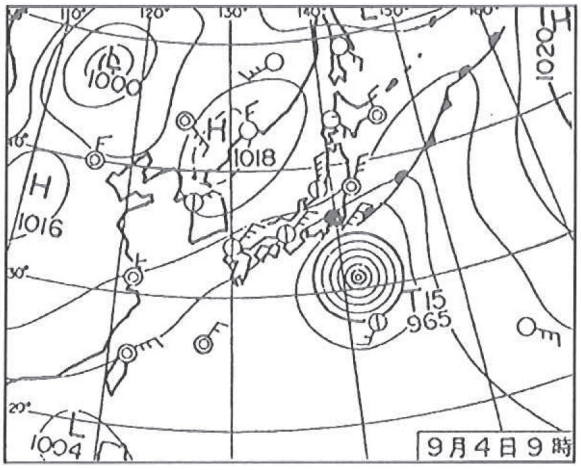
鳴門市北灘沖の水温

09 日水深 1m	・・・ 26.2 ～ 26.8℃
20 日水深 1m	・・・ 26.3 ～ 26.5℃
21 日水面	・・・・・ 26.9 ～ 28.6℃
22 日水深 1m	・・・ 27.1 ～ 28.3℃
23 日水面	・・・・・ 26.9 ～ 28.4℃

鳴門市内の海の水温

21 日水面	・・・・・ 26.0 ～ 26.8℃
22 日水面	・・・・・ 26.2 ～ 26.9℃

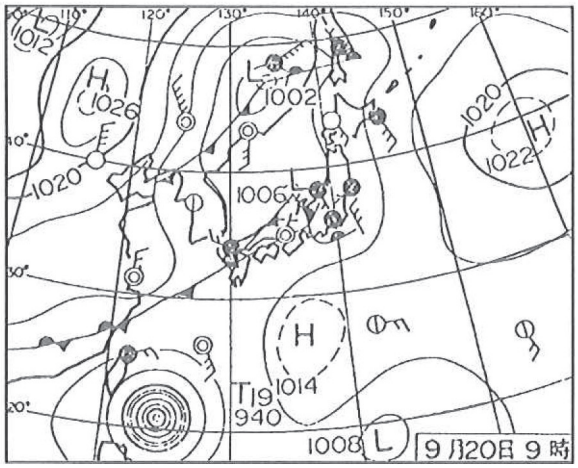
1982 年（昭和 57 年）9 月 4 日～ 6 日　山火事



4 日の夕方に鳴門市大津町の大代山から出火した山火事は，2 昼夜にわたって燃え続け，6 日の夕方になって 48 時間ぶりに鎮火した。焼失面積は 117ha にのぼり，昭和 53 年 8 月に発生した板野郡板野町の山火事で焼失した面積 110ha 上回って戦後最大になった。

この期間，徳島の最大風速は 4 日 09 時 50 分に北の風 7.0m/s，最大瞬間風速は北北西の風 15.6m/s であった。

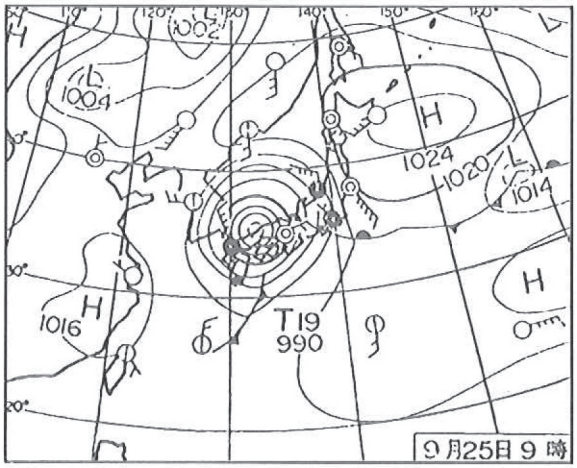
1982 年（昭和 57 年）9 月 20 日　雷

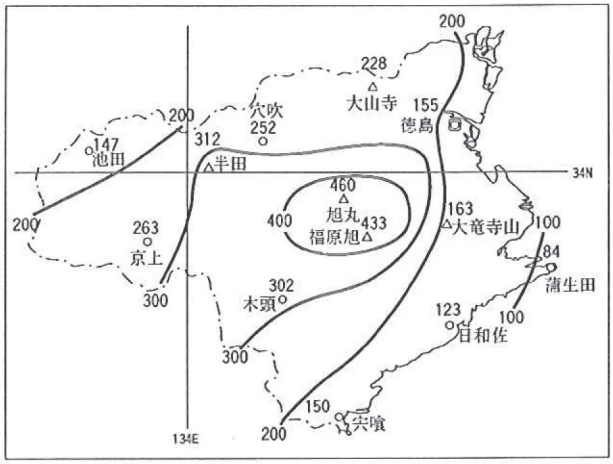


低気圧が山陰沿岸沿いを東北東に進み，寒冷前線が四国地方を通過した。この寒冷前線の通過により，徳島市では夕方に激しい雷が発生し，17 時 10 分頃に徳島駅構内に落雷した。このため，列車上下 7 本に 20 ～ 40 分の遅れがでた。また，17 時 15 分頃にも市内のトランスに落雷し，付近の住家 1,330 戸が停電した。

1982 年（昭和 57 年）9 月 23 ～ 25 日　台風第 19 号

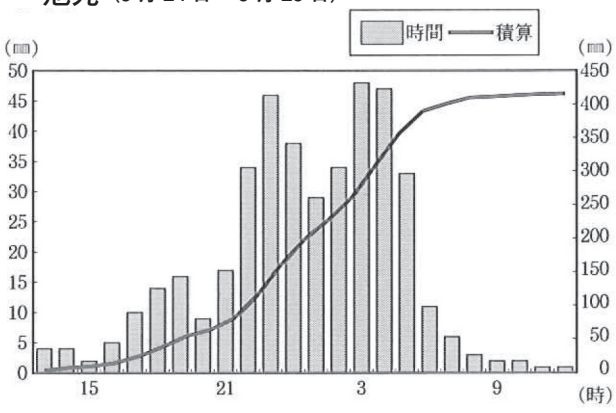
台風第 19 号は 9 月 16 日 21 時に発生し，22 日には南西諸島の南側を進んで日本に接近した。足摺岬の南南西約 200km付近の海上から進路をほぼ真北にとり，25 日 02 時 30 分ころ愛媛県宇和島市付近に上陸した。その後はやや衰えながら伊予難を通り，25 日 06 時頃に広島に再上陸，25 日 08 時過ぎに松江市西方から日本海へ出た。



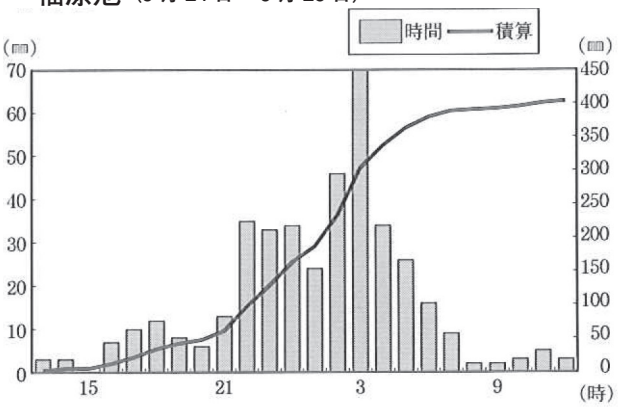


総雨量（mm）

旭丸（9 月 24 日～ 9 月 25 日）

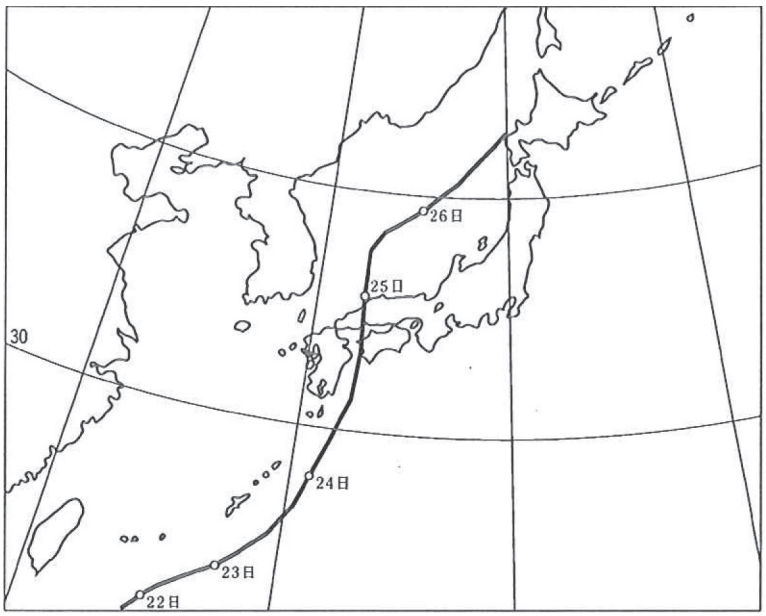


福原旭（9 月 24 日～ 9 月 25 日）



徳島県での最大風速は徳島市で 25 日 06 時 40 分に南南東の風 21.0m/s，最大瞬間風速は徳島市で 25 日 05 時 00 分に南南東の風 39.4m/s を観測した。

23 日早朝から降り始めた雨は，県南部山間部を中心に 25 日夕方前までと降り続いた。総降水量



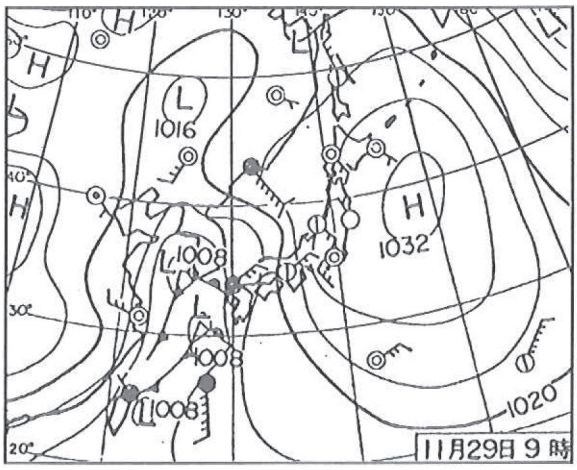
台風第 19 号　経路図

の最大値は神山町旭丸で 460㎜，日降水量の最大値は上勝町福原旭で 25 日に 240㎜を観測した。

降り続いた雨のために，24 日午後 6 時ごろ木屋平村で山腹が幅 30m，高さ 5 ～ 7m にわたって崩壊し，県道穴吹－木屋平線が全面通行止めとなった。25 日午後 3 時ごろ勝浦郡勝浦町では山腹が崩壊し，土砂が民家を直撃して半壊し二人が首まで埋まったが自力で脱出した。また，同時刻ころ神山町の県道神山－鮎喰線が山腹擁護ブロックの崩壊で片側通行となった。25 日 7 時ごろ相生町の日比谷発電所を直径 3m の岩石が直撃して発電が停止した。その他，麻植・阿南両郡で 66 世帯が床上浸水，県下全域で 935 戸が床下浸水した。

強風により空と海の便に大きな乱れが生じ，農業では 1,300ha の稲が倒れるなどの被害が発生した。

1982 年（昭和 57 年）11 月 29 ～ 30 日　強風



黄海と東シナ海に 1008hPa の低気圧があり，共に東北東に進んだ。2 つの低気圧は，発達しながら 29 日から 30 日にかけて日本海中部と西日本南岸を通り，徳島県では強い風雨に見舞われた。

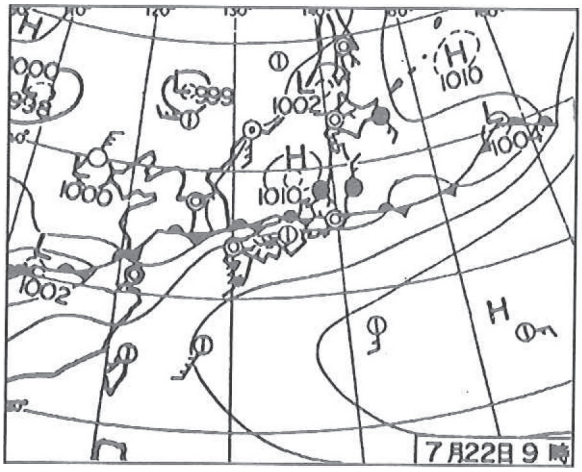
突風を伴った南よりの強風で，土木・農業・水産関係に被害が発生した。農業関係ではホウレンソウや大根畑の浸水，蒔いたばかりの洋人参の種の流失，ビニールハウスの倒壊などの被害が発生した。水産関係ではノリ養殖施設と小型定置網などに被害が発生した。

阿南市富岡町では，突風にあおられたバイクが市道脇の用水路に転落，運転していた男性 1 人が死亡した。また，徳島市と阿南市の海岸には強風のため 500 トン級のクレーン船など 5 隻が吹き寄せられて座礁した。

1983年

［昭和 58 年］

1983 年（昭和 58 年）7 月 18 日～ 23 日　赤潮



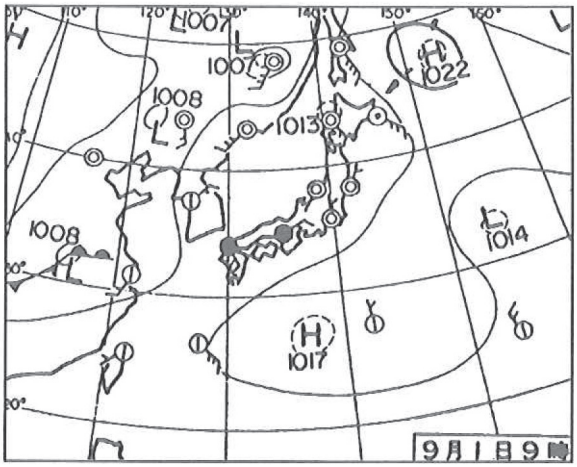
中旬前半に九州南部と四国地方が梅雨明けした。

徳島では，18 日から 23 日にかけて鳴門市北灘沖・阿南市橋湾・海部郡由崎沖で赤潮が発生した。徳島県水産課の調べによると，有害プランクトンである紡錘型ホルネリアを海水 1cc 中に最大 8,200 個を検出確認した。この赤潮による養殖ハマチの被害は 24,400 匹にのぼった。

1983 年（昭和 58 年）9 月 1 日　雷

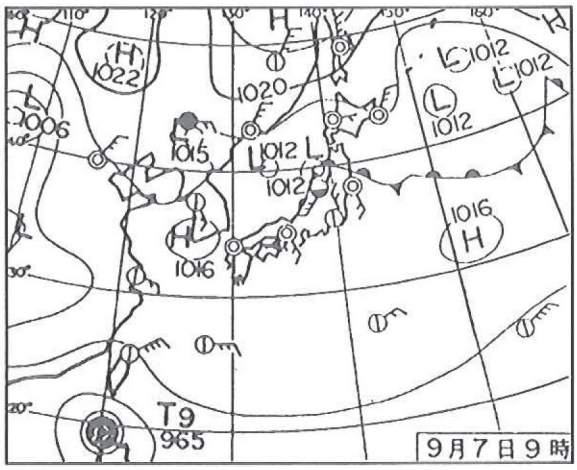
太平洋高気圧の勢力が弱まり，四国地方は高気圧の縁辺流による暖湿気が流入した。また，上空には寒気が入って大気は不安定になり，各地で積乱雲が発達し発雷した。

四国電力徳島支店の調べによると 16 時 29 分頃，鳴門市大麻町で送電線に落雷し，鳴門市と板野郡で合計 31,000 戸が停電した。また，徳島市や麻植郡など 12 カ所で交通信号所が故障した。

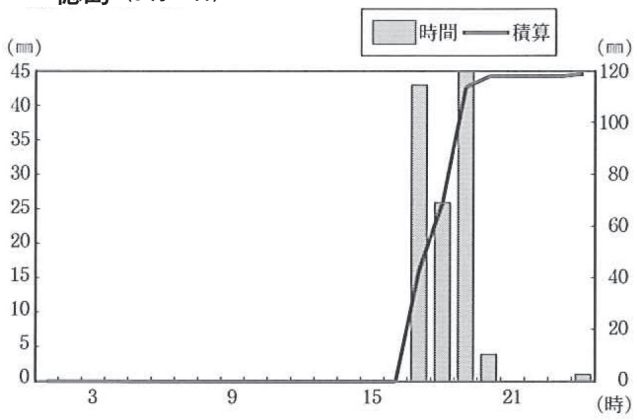


1983 年（昭和 58 年）9 月 7 日　雷雨

秋田沖にある低気圧から南西にのびる寒冷前線が四国地方を通過した。このため，太平洋高気圧からの暖湿気と前線北側の寒気とがぶつかって，積乱雲が発達し雷を伴った激しい雨が降った。



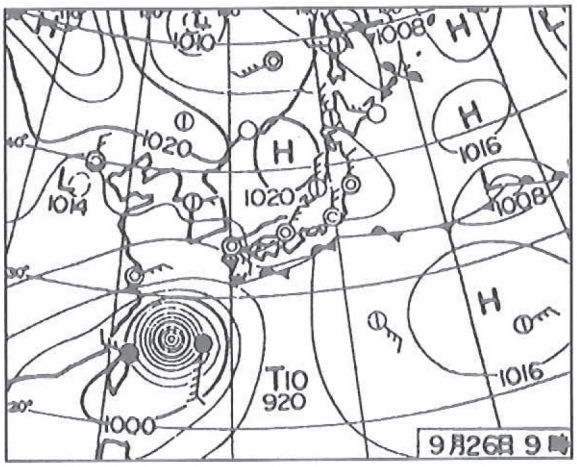
徳島（9 月 7 日）

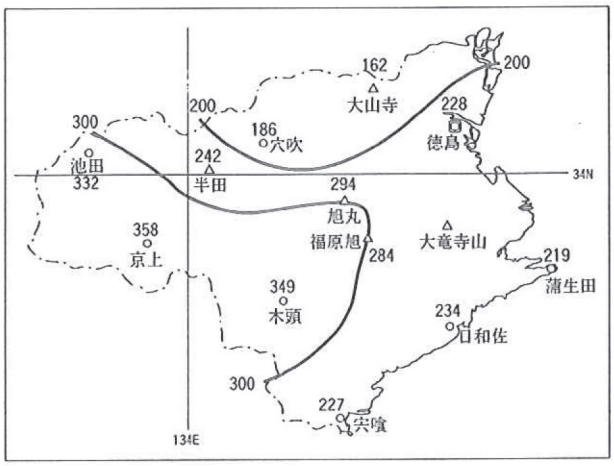


徳島市内では 16 時過ぎからの激しい雷雨で 50 棟が床下浸水した。総降水量は徳島市で 7 日 16 時 00 分から 24 時 00 分までに 119.0㎜，1 時間降水量の最大値は徳島市で 16 時 50 分から 17 時 50 分の間に 63.5㎜の雨が降った。

また，落雷による停電も相次ぎ，鳴門市内や板野郡で約 5,000 戸が停電し，徳島市内では約 1,600 戸が停電した。

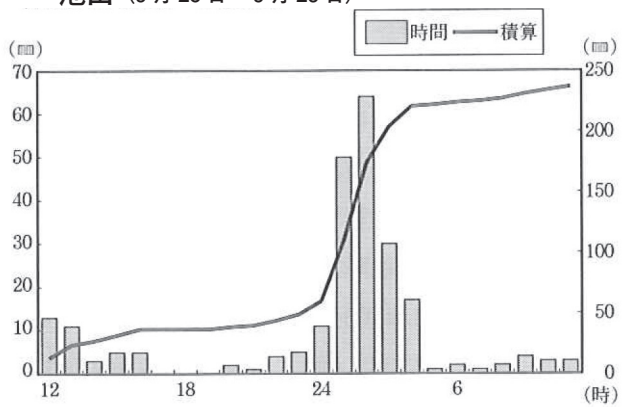
1983 年（昭和 58 年）9 月 25 日～ 28 日　台風第 10 号



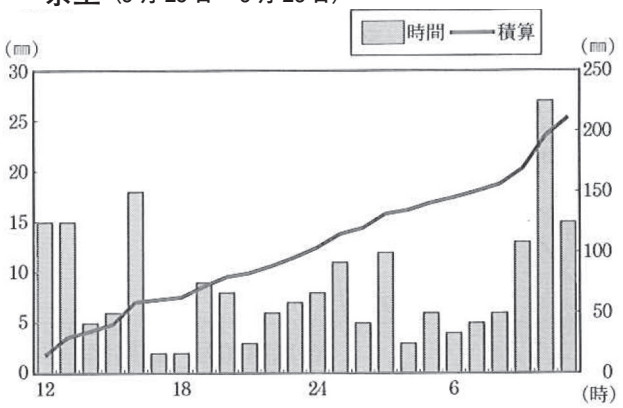


雨量分布図（mm）

池田（9 月 25 日～ 9 月 26 日）



京上（9 月 25 日～ 9 月 26 日）



山城町　鉄砲水に 30m 押し流された民家（徳島新聞社提供）

9 月 20 日に日本の遙か南方洋上で発生した台風第 10 号は，25 日から 27 日にかけて沖縄本島と宮古島の間を通って東シナ海を北上した。九州南西海上でコースを北東から東よりに変えて進み，28 日 10 時ごろに長崎市付近に上陸した。その後は豊後水道に出て，宿毛市付近に再上陸し，28 日 15 時に温帯低気圧になった。この台風と南海上に停滞していた秋雨前線の影響で，大雨が降った。

総降水量の最大値は京上で，25 日 15 時 00 分から 28 日 21 時 00 分までの間に 358.0mm，日降水量の最大値は池田で 28 日に 214mm，1 時間降水量の最大値は池田で 28 日 01 時から 02 時までの間に 64mmを観測した。最大風速は徳島市で 28 日 10 時 10 分に南の風 10.0m/s，最大瞬間風速は徳島

市で 28 日 10 時 00 分に南の風 18.3m/s を観測した。

徳島県消防防災課の調べによると，被害は県西部を中心に発生し中でも池田町と山城町に集中し

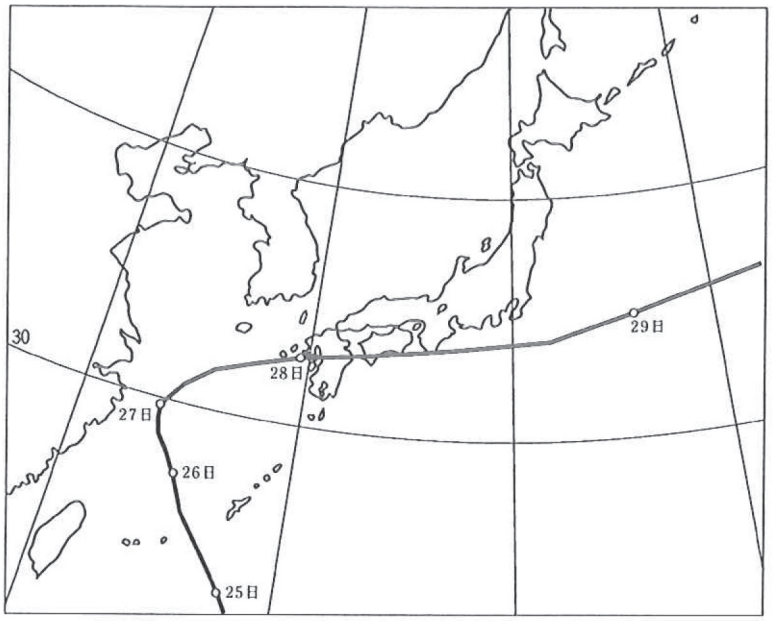
鉄砲水で全壊した花岡さん宅　山城町栗山（徳島新聞社提供）

た。那賀郡木沢村では 27 日夜に山腹が崩壊，21 世帯が孤立状態になった。

三好郡山城町では，27 日午後 11 時から 28 日午前 1 時過ぎの間に国鉄小歩危駅近くで土砂崩れが発生し不通になったほか，谷川が氾濫して 9 戸が流され 4 戸が土砂崩れによって全壊し，4 人が鉄砲水に押し流されて負傷した。また，道路の寸断で 250 戸が孤立状態になった。勝浦郡上勝町では地滑り危険のため 50 人が避難した。

池田町では 28 日未明に 1 時間 64㎜の激しい雨が降り，鉄砲水が山腹の土砂を押し流して民家を直撃し，寝たきりの老人 1 人が生き埋めになって死亡した。

阿南市福井町では 28 日午前 9 時 40 分ごろ，自宅の雨戸を修理中の老女が風で飛ばされて重傷を負った。

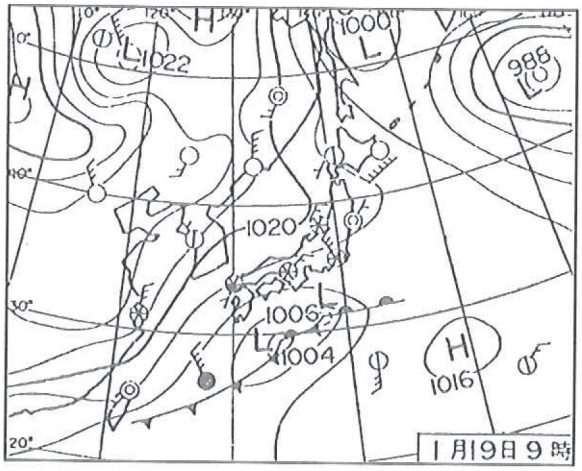


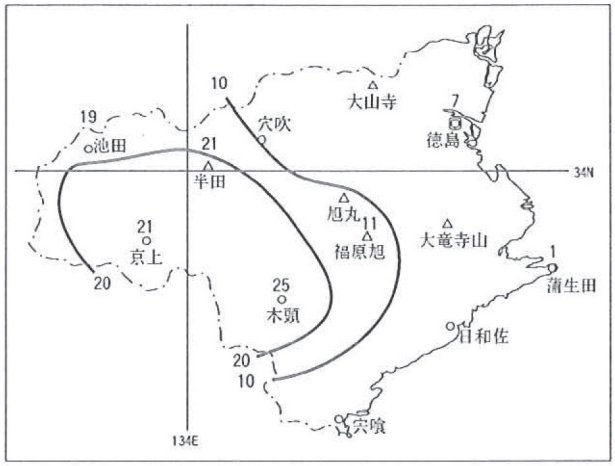
台風第 10 号　経路図

1984年

[昭和 59 年]

1984 年（昭和 59 年）1 月 18 日～ 19 日　大雪





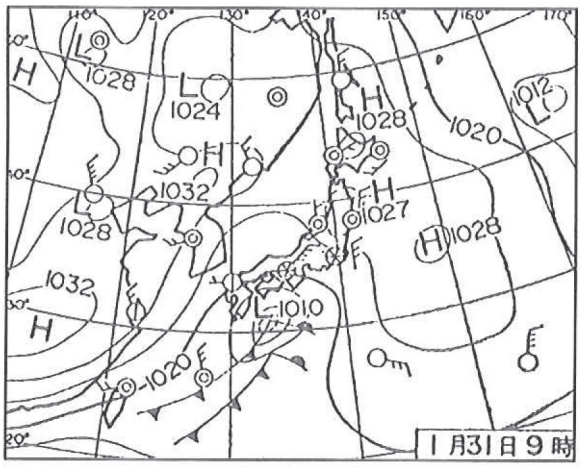
09 時の積雪の深さ（cm）

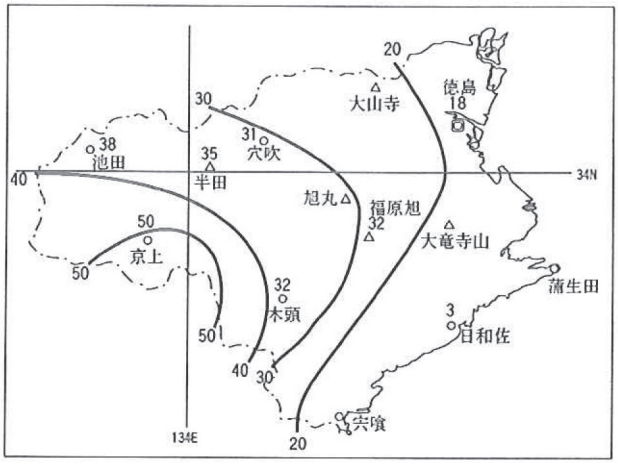
優勢な大陸高気圧の張り出しで強い冬型の気圧配置になり寒気が流入した。そこへ，四国沖を 1004mb の低気圧が通ったため，徳島県は里雪型の大雪となった。

19 日 09 時の積雪は，池田 19cm，半田 21cm，徳島 7cmなどであった。徳島県海部郡でも山沿いでは積雪があり，最深積雪は木頭村の 25cmであった。

この大雪により，県内の小学校・中学校・高校あわせて 44 校が臨時休業した。陸上の交通では朝のラッシュ時から渋滞し，一時は完全マヒ状態になった。主なものでは，鉄道が合計 32 本に遅れが生じ，バスは徳島バスが始発から午前 10 時頃まで 37 路線で運休，西部交通は午前中 3 路線が前便運休した。また，徳島空港は 5cmの雪におおわれ 4 便が欠航した。

1984 年（昭和 59 年）1 月 30 日～ 31 日　大雪





14 時の積雪の深さ（cm）

冬型の気圧配置で寒気が流入しているところへ，東シナ海で発生した 1010mb の低気圧が四国南海上を通った。このため，徳島県では今月 18 日～ 19 日と同じような気圧配置になり大雪が降った。

徳島市内での積雪が 10cmを超えたのは昭和 43 年 2 月 15 日の 19cm以来 16 年ぶりで，交通機関は大混乱した。

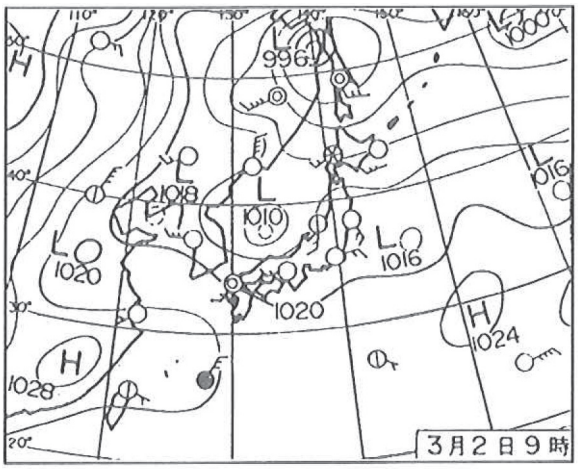
31 日 14 時の積雪は，池田 38cm，穴吹 31cm，徳島 18cmなどであった。31 日交通網が大混乱し，鉄道は朝 8 時過ぎから運休や遅延などが出たほか，乗客を乗せたまま途中の駅で立ち往生する列車が続出した。バスは徳島バス牟岐営業所管内でわずかに営業できただけで他は全面ストップし，飛行機は午前中全面運休した。

農業関係では阿南市で栽培している洋ニンジンのビニールハウスが，雪の重みでおしつぶされ壊滅的な被害を受けた。

学校は，小学校・中学校・高校が全面休校や途中で授業を中止するなど，臨時休校が相次いだ。

この時期，低気圧が四国の南岸を通るのは，太平洋側における代表的な大雪の気圧配置である。南岸低気圧による大雪で歴史的に有名なのは，赤穂浪士の討ち入りの日と桜田門外の変，さらに昭和の2・26事件当日などがある。

1984年（昭和59年）3月2日　山火事

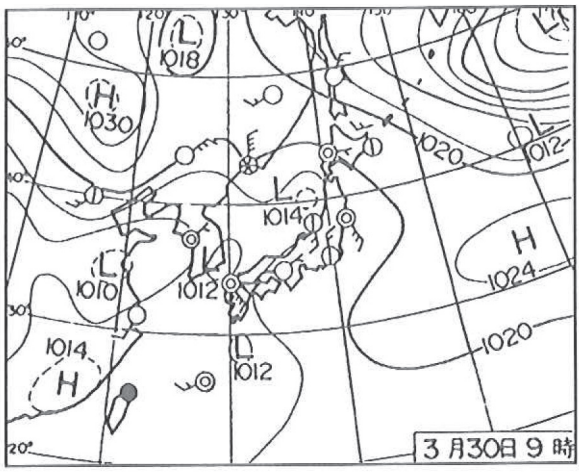


弱い低気圧が日本海を通過したあと冬型の気圧配置に変わり，空気は乾燥して実効湿度は55%，最小湿度26%と火災の起こりやすい気象状態になった。

15時ごろ，阿南市福井町下原の通称小丸山の山林から出火した火は，おりからの北風におおられて近くの雑木林に燃え広がった。

この山火事で近所の住民1名が焼死し，山林12haを消失して21時40分に鎮火した。

1984年（昭和59年）3月30日～31日　山火事

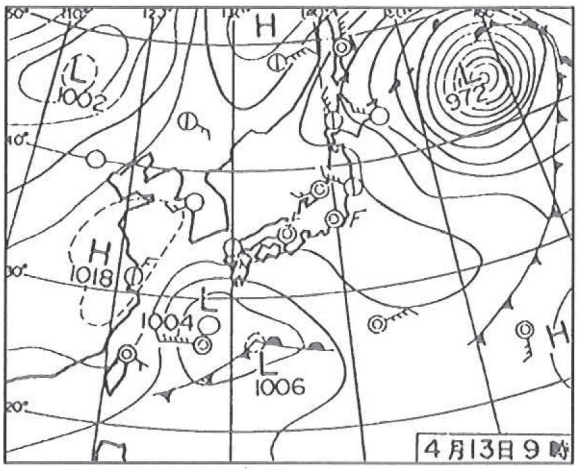


四国地方は日本の東海上に中心を持つ高気圧におおわれ，乾燥した晴天が続いた。

徳島市の実効湿度は57%，最小湿度は45%であった。また，最大風速は徳島市で30日14時00分に南東の風7.6m/sを観測，最大瞬間風速は徳島市で30日15時00分に12.6m/sを観測した。

30日10時15分ごろ，板野郡土成町宮川内の通称落鞍山から出火した山火事は，風にあおられて燃え広がり5時間30分にわたって燃え続けた。この火事で，檜林など53haを焼いて31日午後3時45分に鎮圧した。この日は県下各地で10件の火災が発生した。

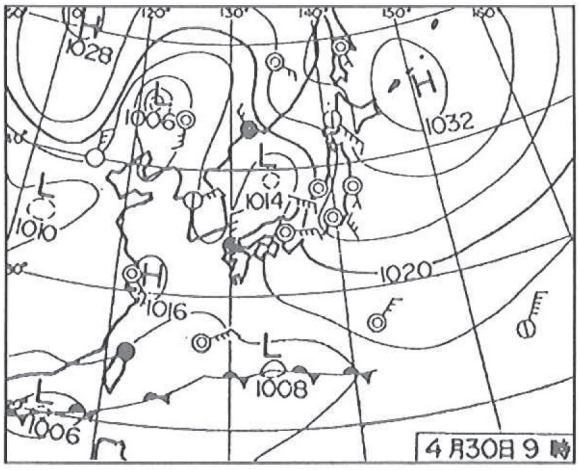
1984年（昭和59年）4月13日～14日　山火事



移動性高気圧におおわれて晴天になり，空気の乾燥した状態が続いた。徳島市での通効湿度は51%，最小湿度は14%であった。

13日午後9時ごろ，日和佐町山河内の山林で枯れ草焼きから燃え移った火が強風にあおられて燃え広がり，夕方までに杉・檜などの初齢木材およそ35haを焼いて鎮火した。また，半田町では，12日午後に燃え始めた山火事が13日正午ごろ一旦鎮火したが14日未明に再び燃え出した，雑木林など7haを焼いて14日夕方に鎮火した。この他にも板野町や山川町でも山火事が発生した。

1984 年（昭和 59 年）4 月 29 日～5 月 1 日　大雨



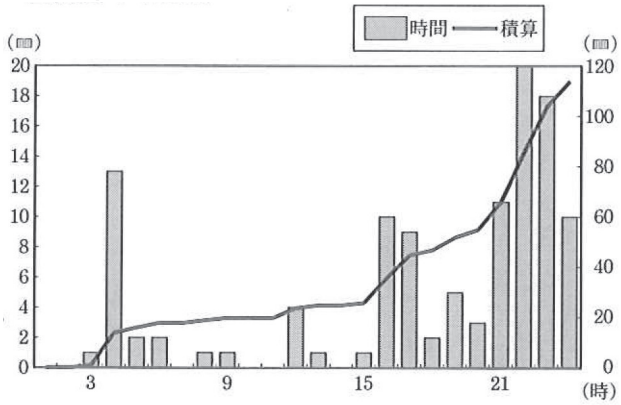
低気圧が発達しながら日本海を東に進んだため，徳島県では南よりの風が強く暖湿気の流入で強い雨が断続して降った。総雨量は上勝町で 240㎜，宍喰町で 213㎜，日和佐町で 191㎜を観測した。また，日降水量の最大値は福原旭で 30 日に 159㎜を観測した。

上勝町正木の県道徳島―上那賀線で山肌が長さ 100m にわたって崩壊し，県道が約 3,000 立方メートルの土砂で埋まり全面通行止めとなった。

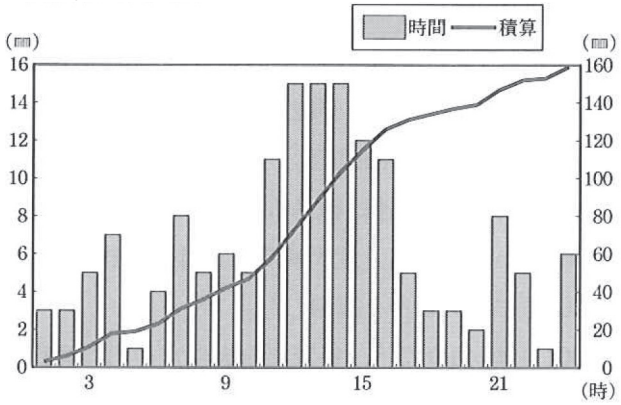
鉄道では牟岐線と高徳線に遅れが生じ，航空便は 4 便が欠航した。

1984 年（昭和 59 年）7 月 20 日　雷雨

日和佐（4 月 30 日）

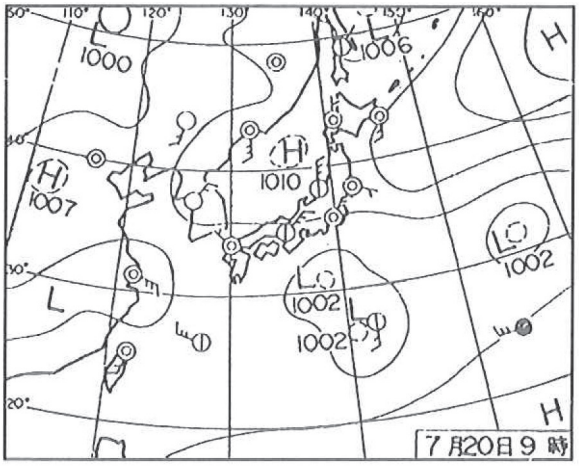


福原旭（4 月 30 日）

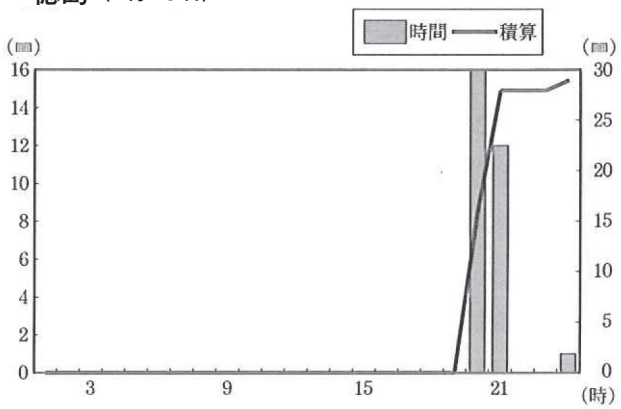


東北地方も梅雨明けとなり，日本列島は全域で盛夏を迎えた。しかし，上空に冷たい空気が流入したため，大気の不安定な状態が続いた。徳島では午後に強い日射の影響もあって積乱雲が発達し，県西部と徳島市で局地的に激しい雷雲になり落雷が相次いだ。

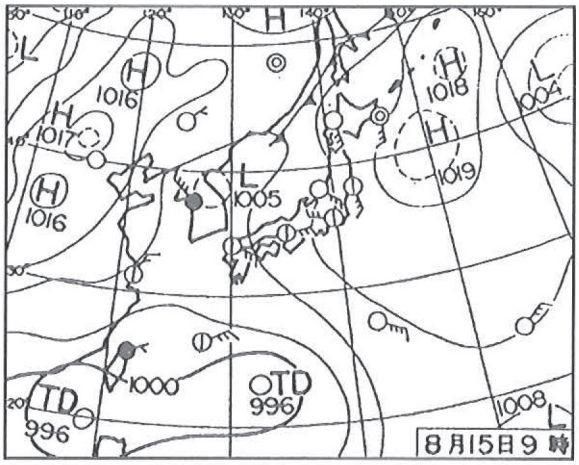
激しい落雷のため鉄道では徳島線で遅れが出た。送電線への落雷のため，徳島市や板野郡北島町などでは午後 8 時から 9 時の間に合計 13,700 戸が停電し，美馬郡と麻植郡では合計 13,000 戸が停電した。午後 8 時 45 分ごろには落雷により徳島市内の倉庫が全焼した。その他，電柱やトランスにも落雷の被害が発生した。また，激しい雨のため秋田町 1 丁目・吉野本町 3 丁目から 4 丁目・昭和町 1 丁目では道路が 10cmから 25cm冠水し，幸町 1 丁目の立体交差中央部では約 30cm冠水した。

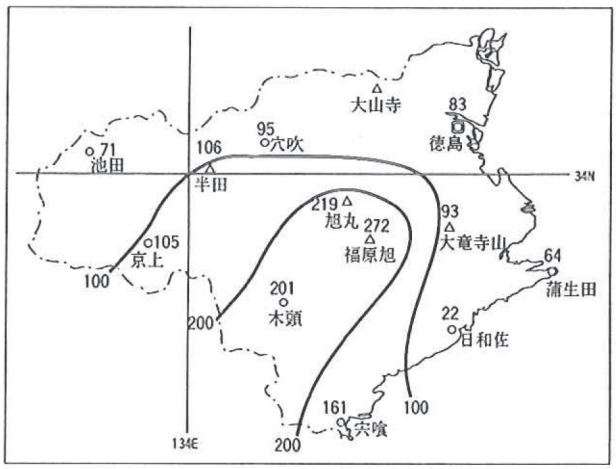


徳島（7 月 20 日）



1984 年（昭和 59 年）8 月 14 日～ 15 日　大雨

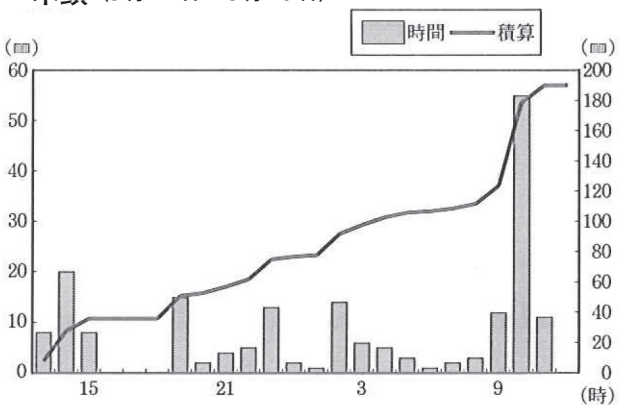




総雨量（㎜）

激しい雨にさらされる阿波踊り演舞場　徳島市役所前
（徳島新聞社提供）

木頭（8 月 14 日～ 8 月 15 日）



天気図ではほとんどの所が晴れているが，太平洋高気圧の縁辺に位置するため，南海上から湿った空気が流入して大気が不安定となった。このため，徳島県では積乱雲が発生して雷を伴った強い雨が降り，崖崩れなどの被害が発生した。総降水量の最大値は福原旭で 14 日 05 時から 15 日 22 時までの間に 272㎜，日降水量の最大値は宍喰で，15 日に 09 日時から 10 時の間に 79㎜を観測した。

この雨により，海部町大井の国道 193 号線で高さ 50m，幅 50m 山腹が崩壊し，約 5,000 立方メートルの土砂で埋まって全面通行止めとなった。また，那賀郡上那賀町の霧越峠と海部郡海南町皆之瀬の間で数カ所が山腹崩壊して通行止めになった。16 日午前 7 時頃には前日の大雨で地盤がゆるんだため，上那賀町海川の国道 193 号で山腹が崩壊し全面通行止めとなった。その他，木沢村・相生町・木頭村・三好郡・名西郡などでも土砂崩れが発生し通行止めとなった。鉄道は高徳線が一時ストップし，バスは四国交通が土砂崩れの危険のため一時折り返し運転になった。徳島市では論田町・昭和町・大原町などで道路が冠水した。

このような太平洋高気圧縁辺で発生する積乱雲の列は，南海上から流入して集中豪雨になりやすいので特に注意を要する。

1984 年（昭和 59 年）8 月 20 日～ 22 日　台風第 10 号

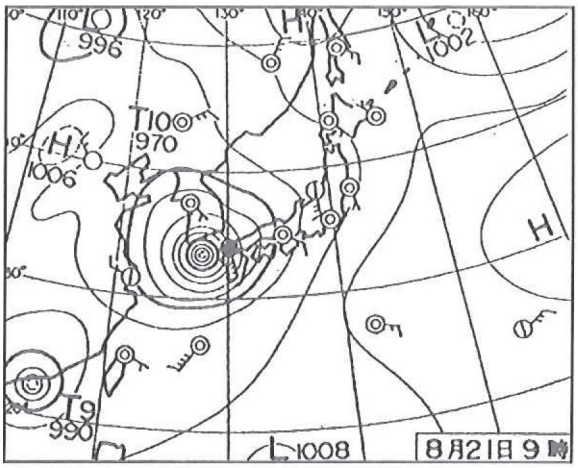
8 月 16 日 09 時に日本のはるか南方洋上で発生した台風 10 号は，20 日に九州西方海上を通り 21 日に朝鮮半島の南で向きを北北東に変えた。その後，対馬海峡を経て日本海を北東に進み，22 日 21 時に衰えて温帯低気圧になった。

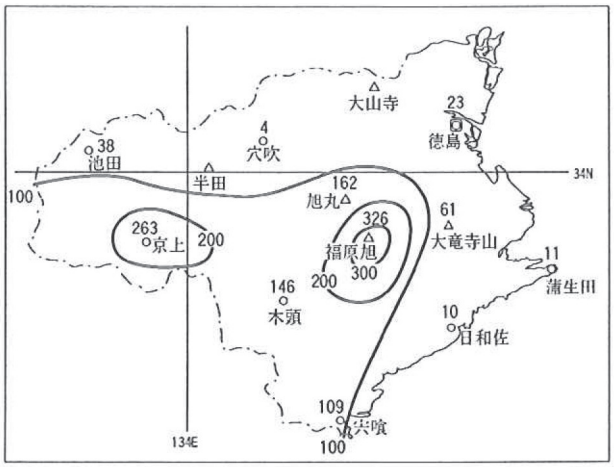
総降水量の最大値は福原旭で，20 日 00 時 00 分から 22 日 07 時 00 分までに 326 ミリ降った。日降水量の最大値は福原旭で，21 日に 292㎜を記録した。また，1 時間降水量の最大は福原旭で，21

日 12 時 00 分から 13 時 00 分の間に 47㎜降った。

最大風速は徳島で，21 日 23 時 20 分に南の風 12.5m/s を観測した。最大瞬間風速は徳島で，21 日 19 時 50 分に南の風 23.7m/s を観測した。

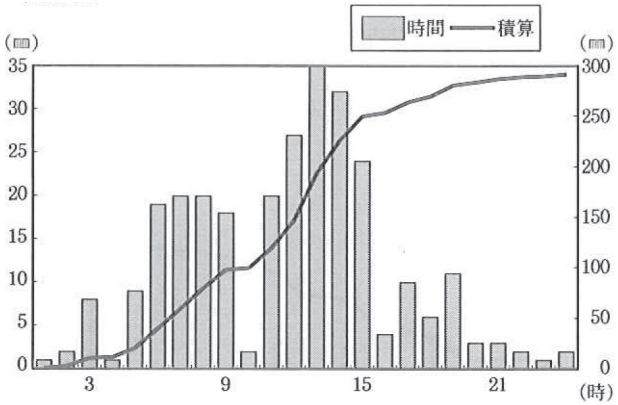
21 日午後 22 時 30 分ごろ，三好郡山城町殿野の県道栗町―殿野線で土砂崩れがあり，15m にわたって崩壊した。また，22 日午前 0 時頃には，すぐ近くの山腹が高さ 50m，幅 10m にわたって崩壊し，県道は約 50 立方メートルの土砂で埋まった。このため，22 日午前 00 時から，全面通行止めとなった。また，早場米の産地である阿南市では，刈り取り前の稲 271ha が強い風と雨により倒伏した。海上交通では船舶の欠航が相次いだ。



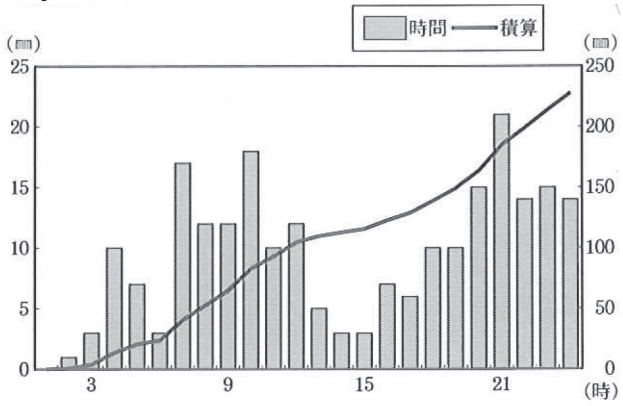


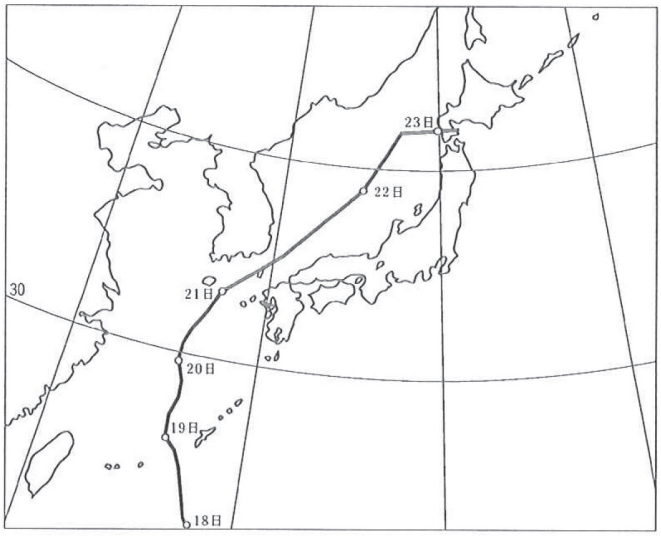
総雨量（㎜）

福原旭（8 月 21 日）



京上（8 月 21 日）



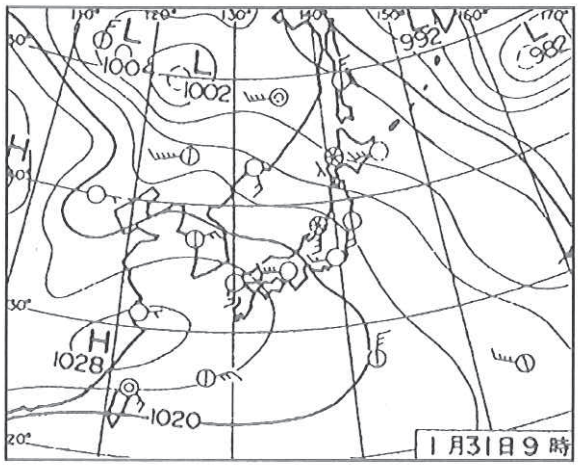


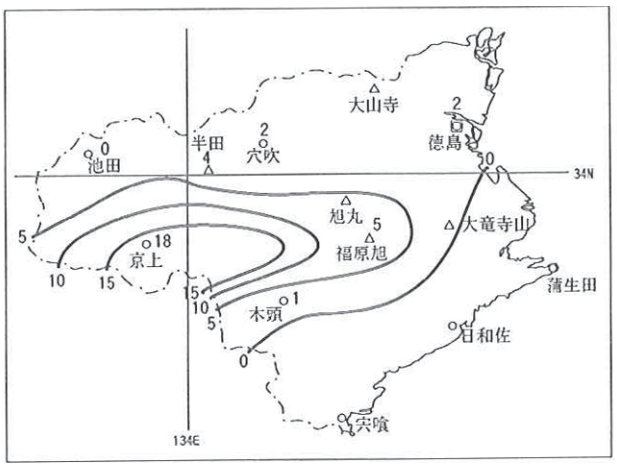
台風第 10 号　経路図

1985年

［昭和 60 年］

1985 年（昭和 60 年）1 月 30 日～31 日　大雪





09 時の積雪の深さ（cm）

雪化粧　眉山中腹から市内を臨む（徳島新聞社提供）

大陸高気圧の張り出しで強い冬型の気圧配置となった。強い寒気の流入で 29 日夜半から雪が降り始め，県西部の山間部を中心に積雪があった。

最深積雪は京上で 30 日 09 時に 18cmを観測，降雪の深さ日量の最大値は京上で 31 日に 8cm を観測した。

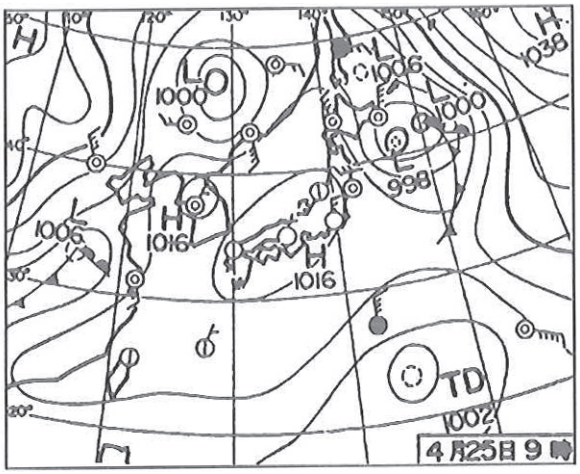
30 日朝の徳島の最低気温は平年より 2.9℃低い氷点下 1.4℃で，積雪と路面凍結による交通事故が多発した。

徳島バスは県南部の一部を除き 30 日に始発から 09 時頃まで，徳島市バスは 30 日に始発から 10 時頃まで全面運休した。空の便は空港が積雪のため 2～3 時間の遅れを生じた。鉄道は高徳線で 20 分の遅れ。また，30 日朝方を中心にスリップ事故が多発し，重軽傷者が多数出た。

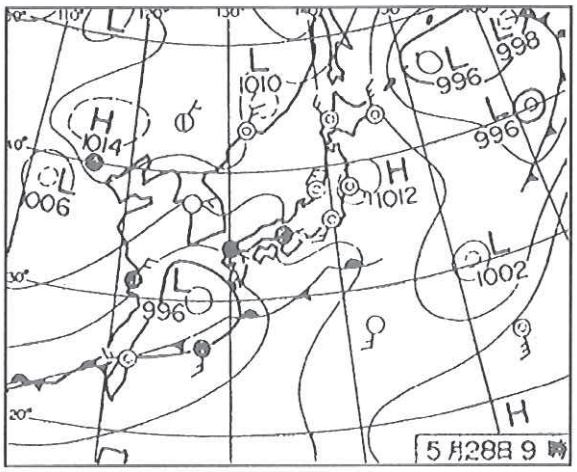
1985 年（昭和 60 年）4 月 25 日　山火事

移動性高気圧におおわれて穏やかな晴天になったため，屋外での作業が多くなり，空気の乾燥と相まって山火事が発生した。徳島の実効湿度は 60％，最小湿度は 16%，最大風速は 25 日 13 時 20 分に東北東の風 3.9m/s，最大瞬間風速は 25 日 13 時 30 分に東北東の風 6.5m/s であった。

25 日正午前，鳴門市大麻町大谷の山林から出火した火は，県道の大谷－櫛木線の南側斜面を燃え上がって尾根伝いに広がった。飛び火により消火は難航したが 19 時前に鎮圧し，26 日 00 時半に鎮火した。原因はタバコの火の不始末とみられ，雑木材など 20.5ha を焼失した。



1985 年（昭和 60 年）5 月 28 日　崖崩れ

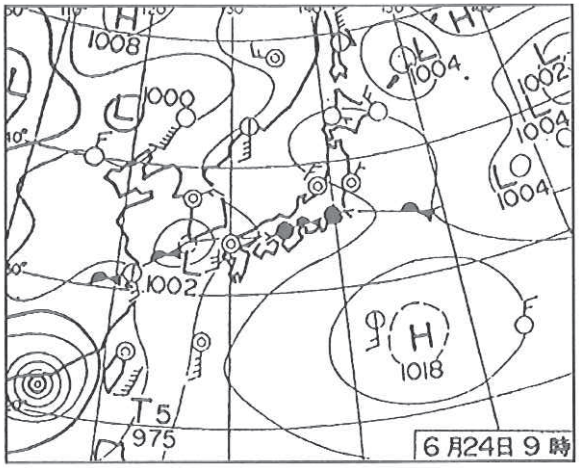


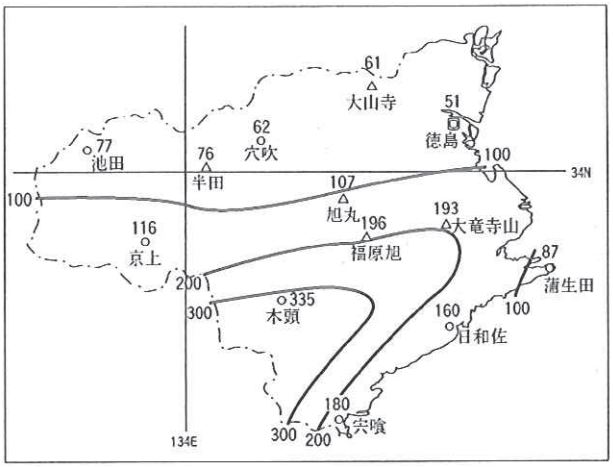
四国の南海上には前線が東西に停滞し，この前線上を低気圧が東シナ海から東に移動して四国沖を通過した。このため，徳島県では不安定な天気となり，23 日から 25 日にかけて雨が降り続いた。

総降水量は，太竜寺山で 23 日 22 時 00 分から 25 日 07 時 00 分までの間に 54㎜。日降水量の最大値は 24 日太竜寺山で 41㎜であった。

この雨で地盤がゆるみ，28 日 20 時過ぎ那賀郡鷲敷町仁宇で崖崩れが発生，1 人が生き埋めになって死亡した。現場は岩質の地層で崖状の山になっており，住宅との距離はわずか 1m 程度しかなかった。

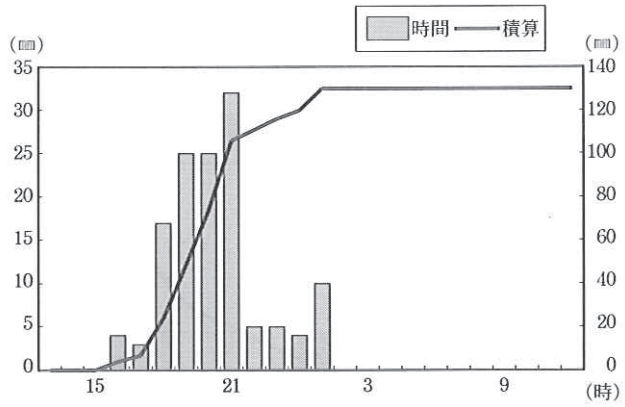
1985 年（昭和 60 年）6 月 21 日～ 25 日　大雨



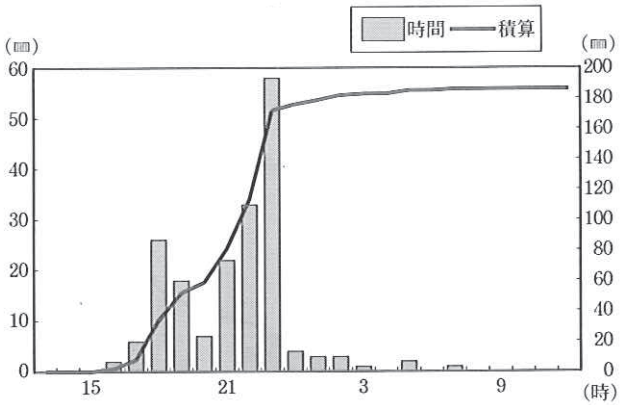


総雨量（㎜）

福原旭（6 月 23 日～ 6 月 24 日）



木頭（6 月 23 日～ 6 月 24 日）



梅雨前線が四国の南岸まで北上して停滞し，前線上を次々と低気圧が通過して連日雨が降り続く中，23 日午後から夜にかけては那賀川流域を中心に強い雨が降った。特に強かった 23 日の雨量は，上勝町福原旭で 120㎜，太竜寺で 104㎜などであった。また，那賀郡木頭村では 23 日 22 時から 23 時の間に 58㎜の強雨を観測した。

21 日から 25 日までの総降水量は，那賀郡木頭村で 335㎜，上勝町の福原旭で 196㎜などであった。また，1 時間降水量の最大値は 23 日 22 時から 23 時の間に，那賀郡木頭村で 58㎜を観測した。

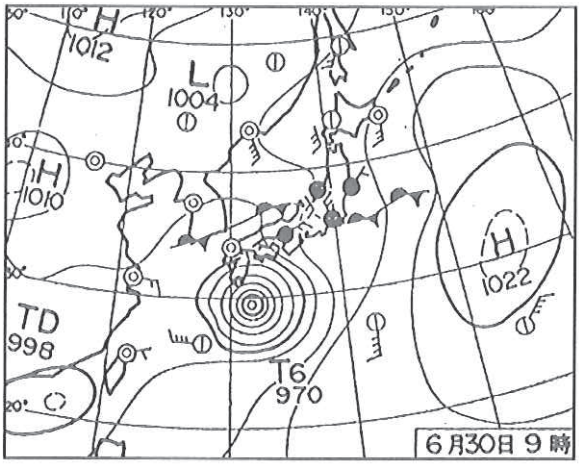
この大雨により，県道の徳島－上那賀線の勝浦郡上勝町で山の斜面が 40m にわたって崩壊した。

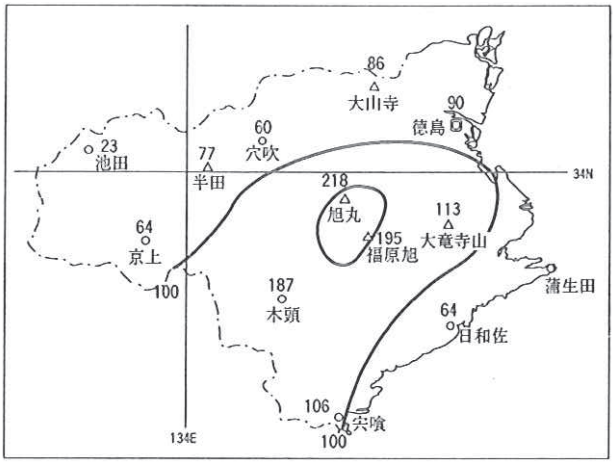
崩壊して全面通行止めとなった県道貞光→剣山線　貞光町端山
（徳島新聞社提供）

美馬郡貞光町では25日午前10時ごろに県道貞光－剣山線が長さ13mにわたって崩れ全面通行止めとなった。その他，市町村道の24カ所で損壊などの被害が発生した。

河川では阿南市の二級河川である打桶川の見能林－中村間で冠水による護岸損壊が出るなど，県下で49カ所に被害が発生した。

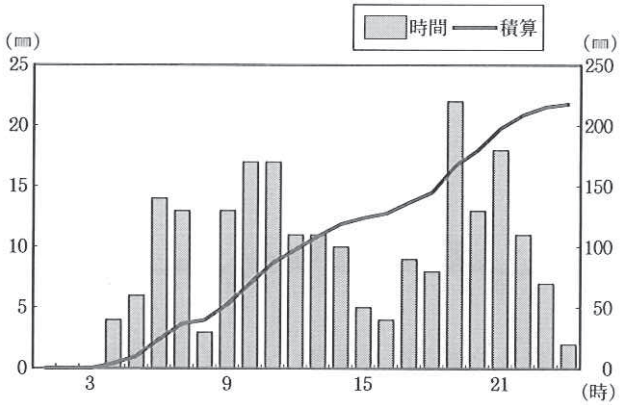
1985年（昭和60年）6月30日　台風第6号



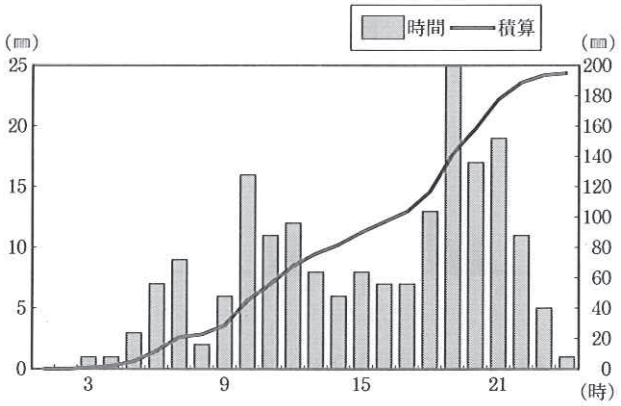


総雨量（mm）

旭丸（6月30日）



福原旭（6月30日）



台風第6号は6月25日12時にフィリピンの東方海上で発生し，北上して接近した。30日10時には大型で並の強さの台風となり，種子島の南東約150kmの海上を通って，30日午後には四国の南海上を北東に進んだ。30日24時には紀伊半島の東海上にあって次第に遠ざかった。

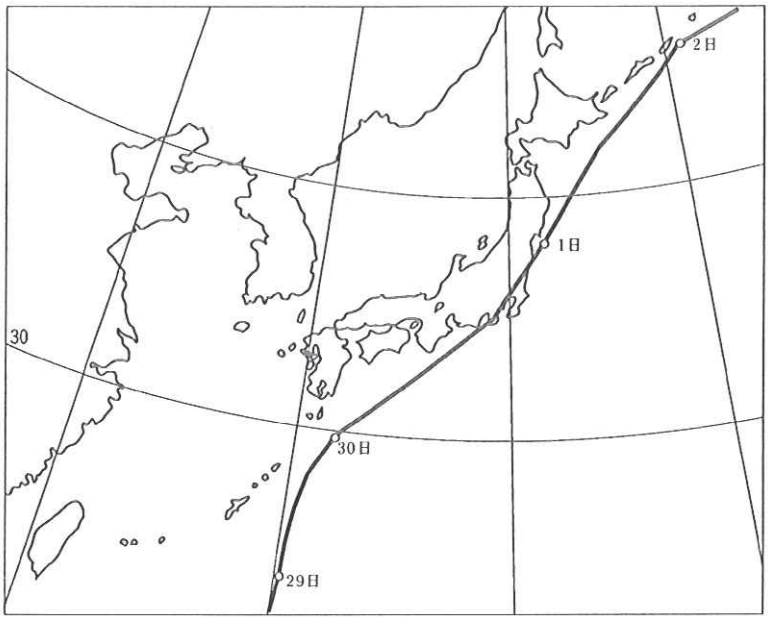
徳島の最大風速は30日20時30分に北北東の風8.9m/s，最大瞬間風速は30日21時50分に北の風17.4m/sを観測した。

総降水量は神山町の旭丸で30日03時から30日24時までの間に218mmを観測。日降水量の最大値は神山町の旭丸で30日に218mm。1時間降水量の最大値は上板町の大山寺で30日20時から21

山腹が崩れ通行止めとなった国道 193 号線　美郷村宗田(徳島新聞社提供)

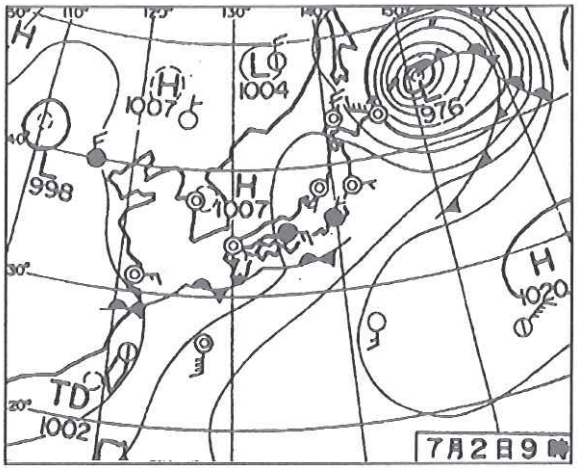
時の間に 27㎜を観測した。

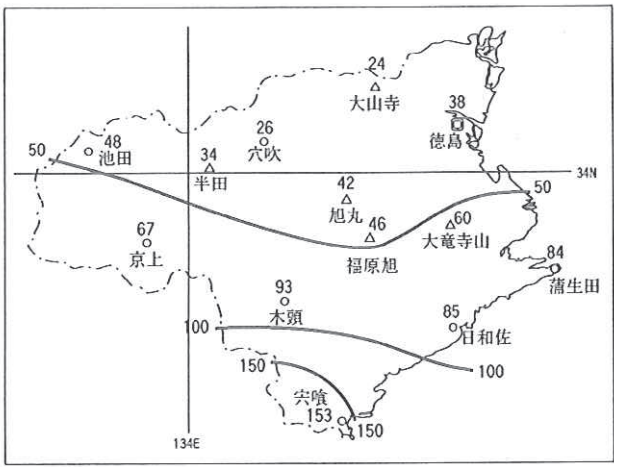
この台風の雨により，名西郡神山町の県道石井－神山線の童学寺トンネル南側で 17 時 20 分頃に山腹が高さ 20m，幅 10 mにわたって崩壊し，県道が約 9 トンの土砂で埋まった。また，美馬郡－宇村中野の県道貞光－剣山線で 13 時頃に幅 3m，長さ 13m にわたって路肩が崩壊した。



台風第 6 号　経路図

1985 年（昭和 60 年）7 月 2 日～ 3 日　大雨

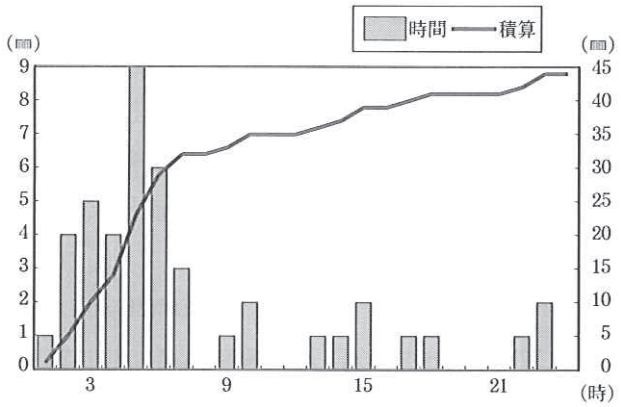




総雨量（㎜）

台風第 6 号が遠ざかったあと，南下していた梅雨前線が再び北上して活発になり大雨が降った。総降水量の最大値は宍喰で 2 日 00 時から 3 日 17 時の間に 153㎜，日降水量の最大値は宍喰で 3

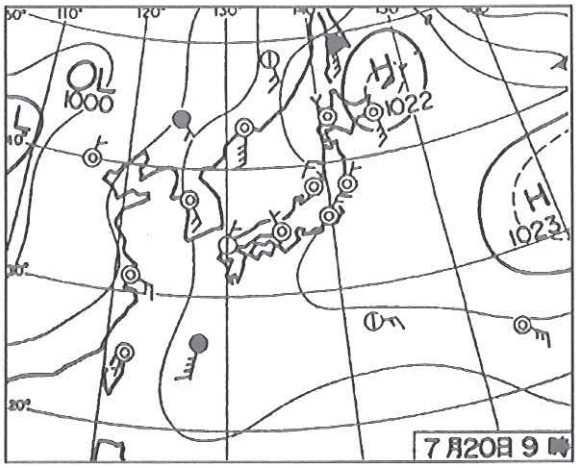
太竜寺山（7月2日）



日に79mm，1時間降水量の最大値は宍喰で3日11時から12時までの間に28mmを観測した。

台風第6号の雨による地盤の緩みと今回の大雨により，2日10時15分頃，阿南市水井町の県道大井－南島線で山腹が高さ5m，幅7mにわたって崩壊し，約200立方メートルの土砂が林道を埋めて全面通行止めとなった。

1985年（昭和60年）7月19日～20日　雷

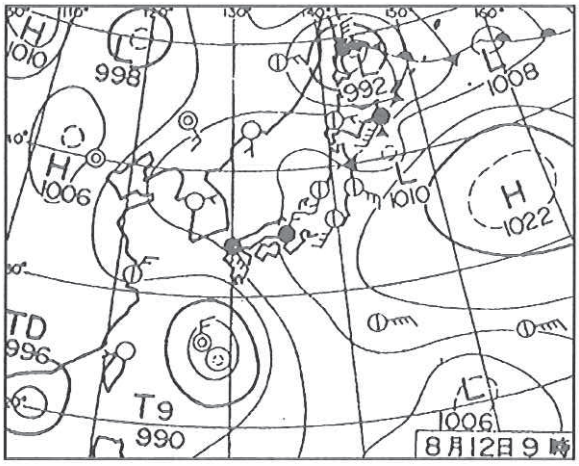


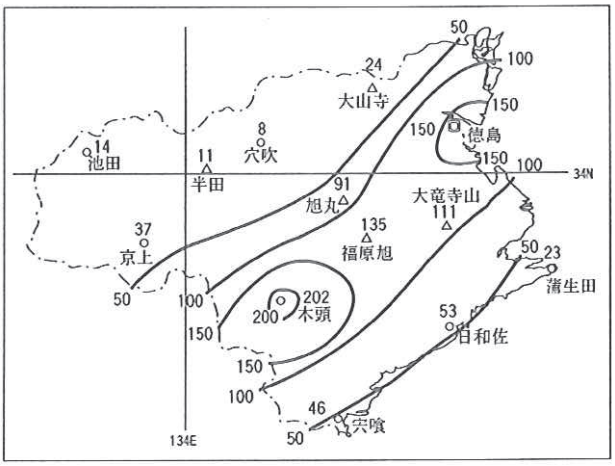
四国地方は太平洋高気圧の縁辺で暖湿気が流入したうえ，日中の強い日射によって昇温し，最高気温は木頭で35.2℃，穴吹では33.6℃まで上昇した。また，上空には寒気が流入し，大気は極めて不安定な状態となった。このため，各地で強い積乱雲が発生し，19日から20日にかけて局地的に激しい雷雨となった。

19日16時25分頃，阿波郡市場町の吉野川北岸付近に落雷し，1,400世帯が1時間半にわたって停電した。20日13時頃には，名西郡神山町鬼籠野で倉庫に落雷し，倉庫を全焼して棟続きの住宅と納屋も全焼した。

1985年（昭和60年）8月12日　大雨

太平洋高気圧の中心は日本の東海上にあり，四国地方には太平洋高気圧の縁辺を巡る暖湿気が流





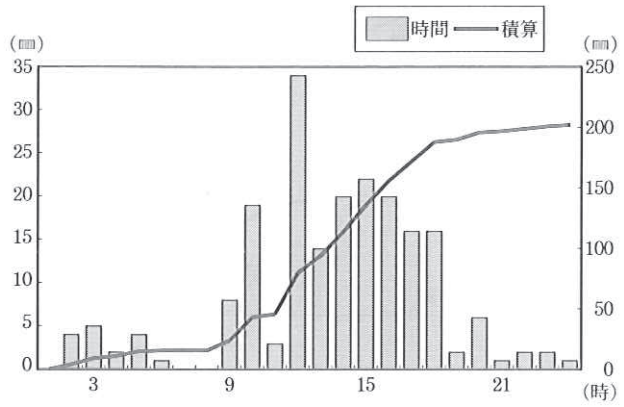
雨量分布図（mm）

入した。また，沖縄付近で発生した台風第9号がゆっくり北上し，暖湿気の流入が強く，大気は非常に不安定になった。このため，所々で積乱雲が発達し，徳島市から海部郡・那賀郡にかけて雷を伴った大雨が降った。

総降水量は徳島で150mm，上勝町の福原旭で135mm，木頭で202mmを観測した。

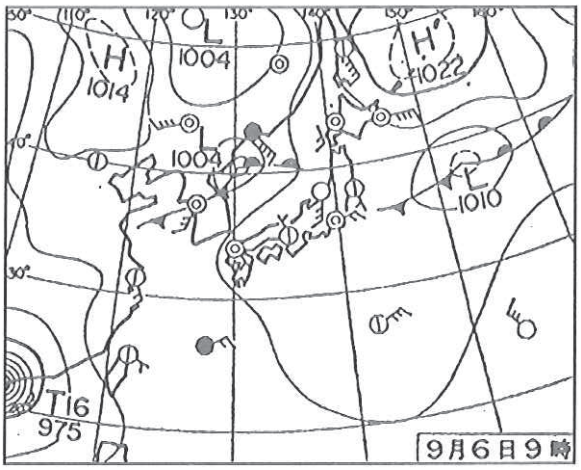
特に海部郡の山間部では雷を伴って短時間に激しい雨が降り，土砂崩れが発生した。海部郡海南町字保勢の県道では，17メートルにわたって損壊し全面通行止めとなった。海南町相川の県道

木頭（8 月 12 日）



上皆津－奥浦線では高さ 5m，幅 8m にわたって山腹崩壊し通行止めとなった。また，海南町平井の県道轟の滝近くで山肌が崩壊し，道路が約 600 トンの土砂で埋まって通行止めとなった。那賀郡上那賀町海川の国道 193 号線では，山腹が高さ 50m，幅 15m にわたって崩壊し，土砂が道路を塞いで全面通行止めとなった。

1985 年（昭和 60 年）9 月 6 日　雷



四国地方は太平洋高気圧の縁辺部に位置して暖湿気が流入し，日中の強い日射も加わって県下各観測点の最高気温は 30℃を超え，穴吹では 35.3℃，池田では 33.8℃を観測した。また，上空には寒気が流入して大気は不安定な状態となった。このため，強い積乱雲が発生し，所々で落雷による被害が発生した。

15 時から 16 時 30 分にかけて，三好郡三加茂町・美馬郡脇町・麻植郡川島町・板野郡吉野町・板野郡板野町・徳島市入田町などで落雷があり，合計 11,600 戸が 30 分から 2 時間 30 分停電した。

また，15 時過ぎには，鉄道徳島線の江口駅東およそ 3kmから江口駅西 1kmの間に 30 余本の倒木があった。原因は発達した積乱雲による局地的な突風と見られる。この倒木により，列車上下併せて 2 本が最高 2 時間 10 分の遅れとなった。

1985 年（昭和 60 年）10 月 5 日～6 日　台風第 20 号

流木で埋った牟岐港（徳島新聞社提供）

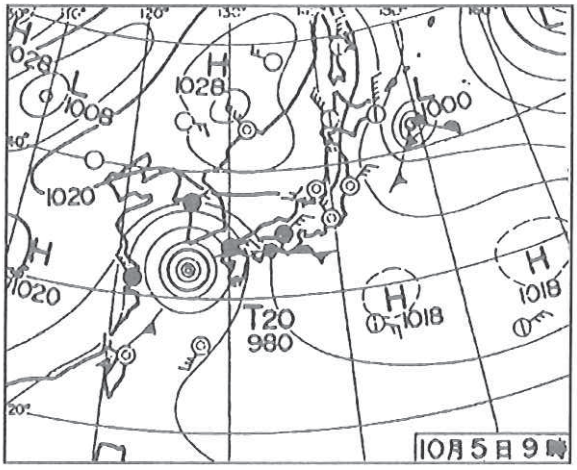
台風第 20 号は 9 月 30 日にフィリピンの東海上で発生し，北西に進んで台湾の北部に接近した後，向きを東よりに変えて 5 日に九州西海上を北上した。その後，朝鮮半島に上陸して弱まって温帯低気圧になり，日本海を北北東～北東に進んだ。

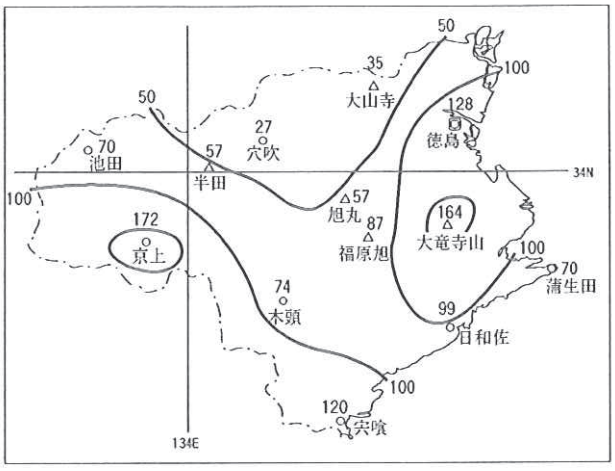
徳島県では 5 日夕方から風雨が強まり，夜半前をピークに大雨が降った。

最大風速は日和佐で 5 日 19 時に東の風 15m/s，最大瞬間風速は徳島で 5 日 20 時 40 分に南南西の風 16.2m/s を観測した。

5 日から 6 日にかけての総降水量は，東祖谷山村京上で 172㎜，阿南市の太竜寺山で 164㎜を観測した。1 時間降水量の最大値は，阿南市の太竜寺山で 5 日 21 時から 22 時の間に 46㎜を観測した。

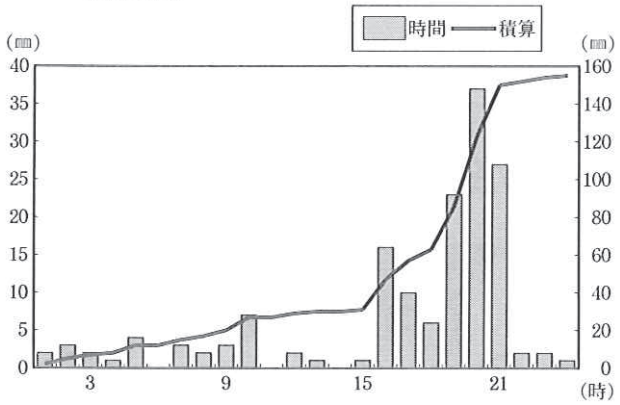
この雨により，5 日 20 時 20 分頃，三好郡山城町立下名小学校の下およそ 200㎜で山腹が崩壊し，国道 32 号が土砂で埋まった。同日 21 時 30 分頃には，山城町でも山肌が幅 20m にわたって崩れ，



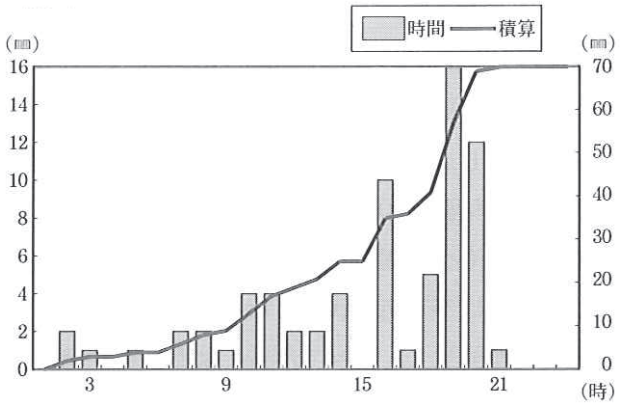


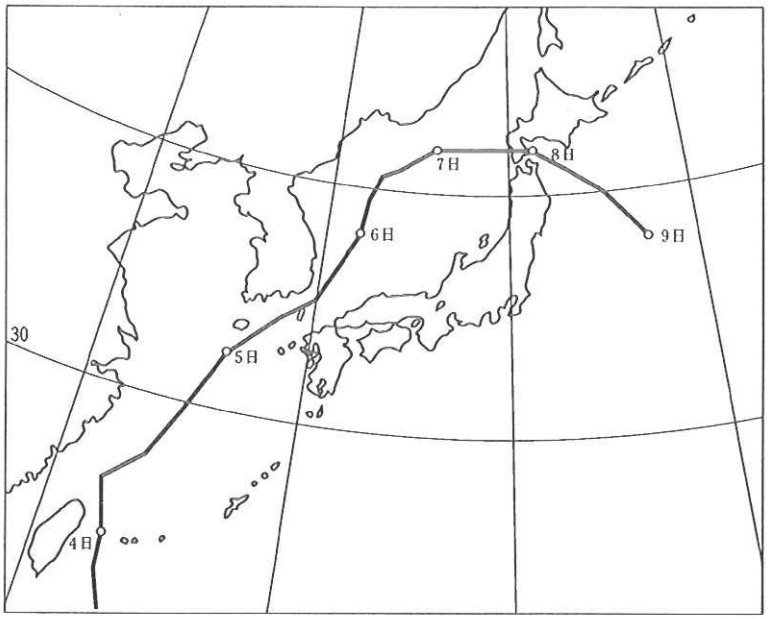
雨量分布図（mm）

京上（10 月 5 日）



池田（10 月 5 日）





台風第 20 号　経路図

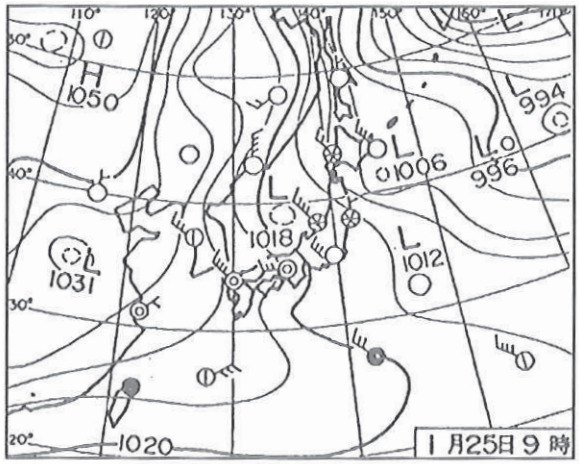
国道 32 号が約 50 立方メートルの土砂で埋まった。両所とも 6 日 15 時までに復旧した。

また，三好郡西祖谷山村後山で崩壊があり，県道一宇－山城線が 12 日まで通行止めとなった。

1986年

［昭和 61 年］

1986 年（昭和 61 年）1 月 25 日～ 28 日　山火事

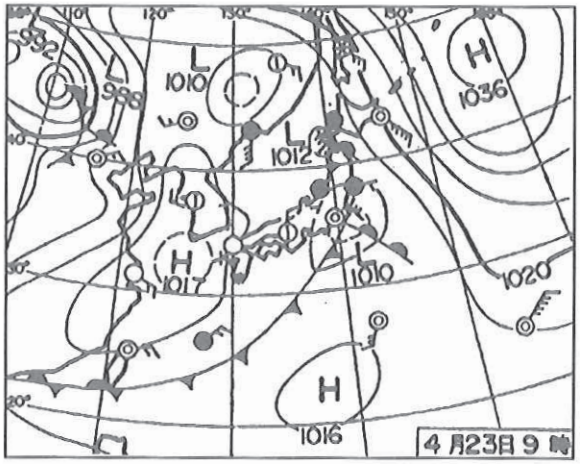


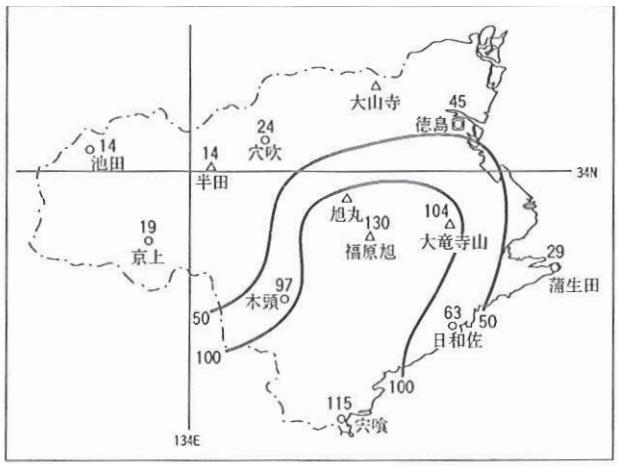
オホーツク海方面に低気圧があり，大陸からは高気圧が張り出して，日本付近は冬型の気圧配置となった。このため，徳島県は乾燥した空気に覆われたうえ，季節風が強く火災の起こりやすい気象状態になった。

最大風速は徳島で 27 日 12 時 20 分に西北西の風 7.7m/s，最大瞬間風速は徳島で 26 日 17 時 20 分に西北西の風 13.9m/s を観測した。最小湿度は 27 日 14 時 10 分の 30%，実効湿度は 27 日 48%であった。

25 日 23 時 17 分頃に板野郡上板町泉谷の通称組山から出火した。その 1 時間後には，組山から北へ 300m はなれた山林からも出火した。更に 26 日正午頃には泉谷川を隔てた西縁口山でも山火事が発生した。空気が乾燥していたことと，時折吹く強い季節風にあおられたことから，大規摸な火災となった。この山火事は，28 日未明になって火の勢が衰え始め，出火から 60 時間余りを経て，28 日 15 時に鎮火した。焼失面積は 120ha であった。

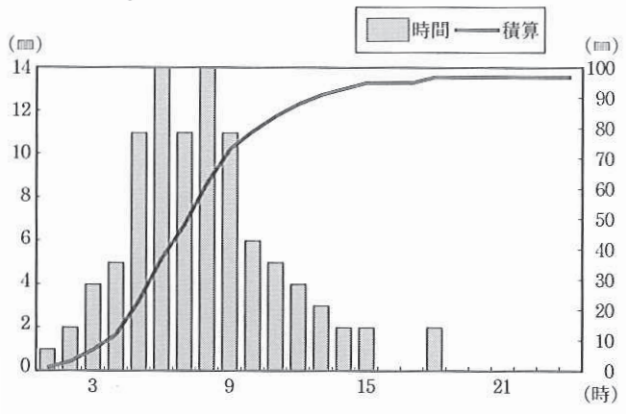
1986 年（昭和 61 年）4 月 22 日～ 23 日　大雨



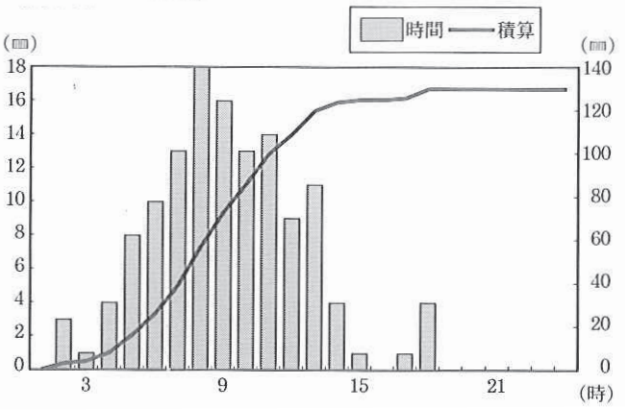


雨量（mm）

木頭（4 月 22 日）



福原旭（4 月 22 日）

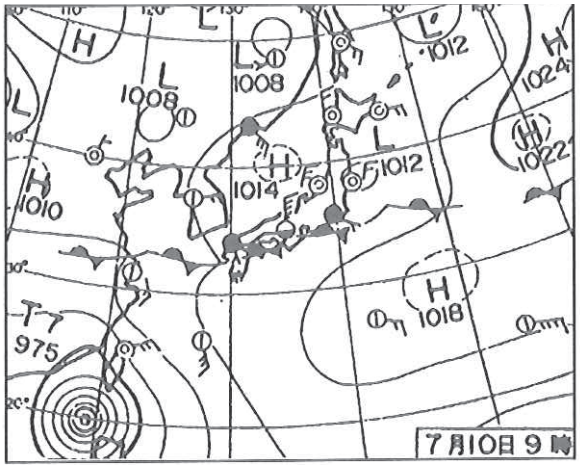


22 日 09 時には，前線を伴った低気圧が東シナ海にあって東北東に移動した。この低気圧はほとんど発達しなかったが，四国の南岸を東北東に進んだため，徳島県には南～南東の暖湿気が流入した。このため，勝浦郡と阿南市から海部郡にかけては，暖かく湿った南東気流が山の南東斜面にぶつかって上昇し，大雨が降った。

22 日の降水量は，上勝町の福原旭で 130㎜，阿南市の太竜寺山で 104㎜，宍喰で 115㎜を観測した。1 時間降水量の最大値は宍喰で，22 日 12 時から 13 時の間に 19㎜を観測した。

この雨で地盤がゆるみ，23 日 02 時ごろ，那賀郡木沢村の県道木沢―上那賀線で落石があった。この岩石は山の斜面から道路に落ちたもので，重さは約 4 トンあり 5 ～ 6 個落下した。その上，道路の損壊なども発生して全面通行止めとなった。

1986 年（昭和 61 年）7 月 10 日　山崖崩れ

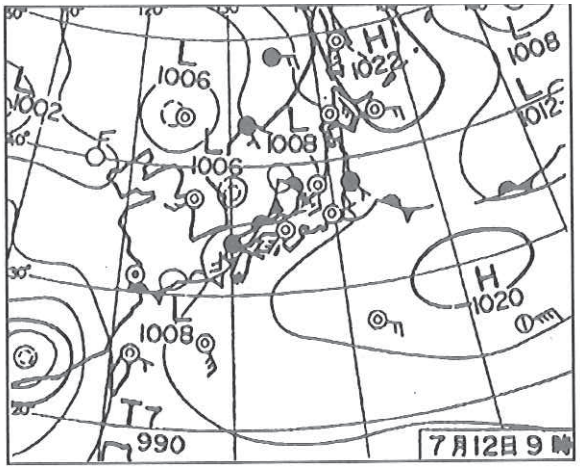


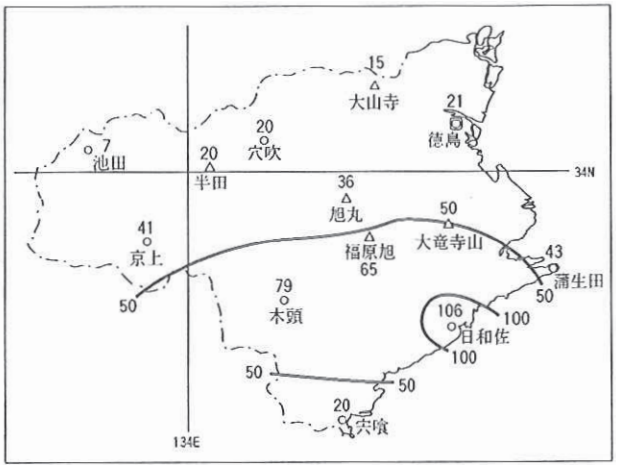
梅雨前線が西日本の南岸沿いを東西に延びて停滞し，南からの暖湿気の流入で，四国地方の大気は不安定な状態が続いた。このため，5 日から雨が降り続き，所々で雷を伴って強く降った。

5 日から 10 日までの総降水量は，宍喰で 106㎜，日和佐で 64㎜，木頭で 60㎜を観測した。また，日降水量の最大値は宍喰で 8 日に 35㎜を観測，1 時間降水量の最大値は阿南市の太竜寺山で 9 日 13 時から 14 時の間に 18㎜を観測した。このように，降水量はそれ程多くはないが，地盤の緩みで山崖崩れが発生した。

10 日 12 時 30 分頃，三好郡西祖谷山村の県道山城－西祖谷山線で，県道上部からの岩石と土砂崩れによって全面通行止めとなった。

1986 年（昭和 61 年）7 月 12 日　山崖崩れ



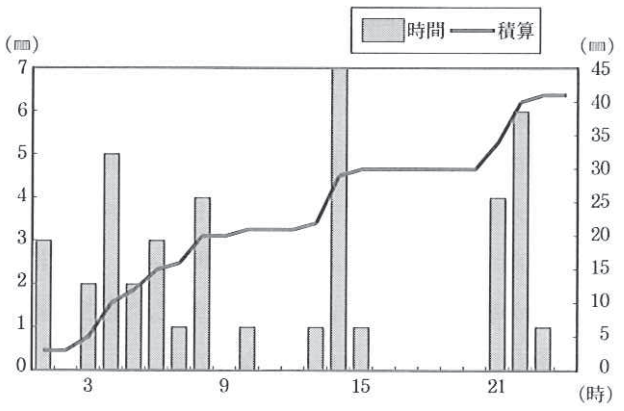


雨量分布図（㎜）

梅雨前線が九州北部から中国・山陰地方に停滞し，徳島県では太平洋高気圧の後面で暖湿気が流入した。このため，大気は不安定な状態になり，所々で積乱雲が発達して雷を伴った強い雨が降った。

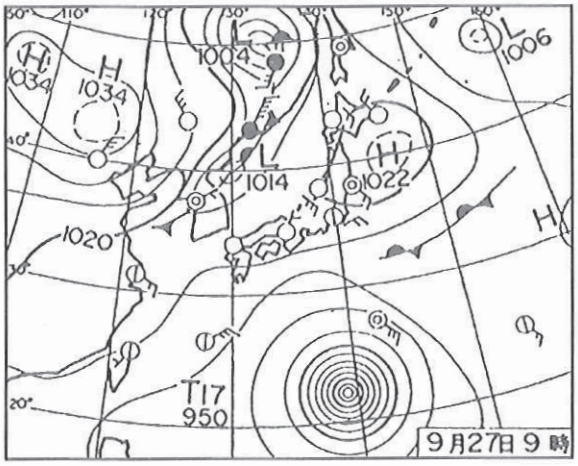
12 日の総降水量は日和佐で 106㎜，木頭で 79㎜，上勝町の福原旭で 65㎜を観測した。日降水量の最大値は日和佐で 106㎜を観測した。1 時間降水量の最大値は日和佐で，00 時から 01 時の間に 69㎜を観測した。県西部ではおよそ 20 ～ 40㎜の降水量だが，降り続く雨で地盤がゆるみ，崖崩れが発生した。

京上（7 月 21 日）



12 日 05 時ごろ，三好郡西祖谷山村の県道山城－西祖谷山線で崖崩れが発生し，全面通行止めとなった。12 日 10 時ごろには，美馬郡貞光町の県道貞光－剣山線で，山腹が高さ 40m 幅 20m にわたって崩壊し，約 400㎡の土砂が県道を埋めて全面通行止めとなった。

1986 年（昭和 61 年）9 月 26 日～ 27 日　土用波

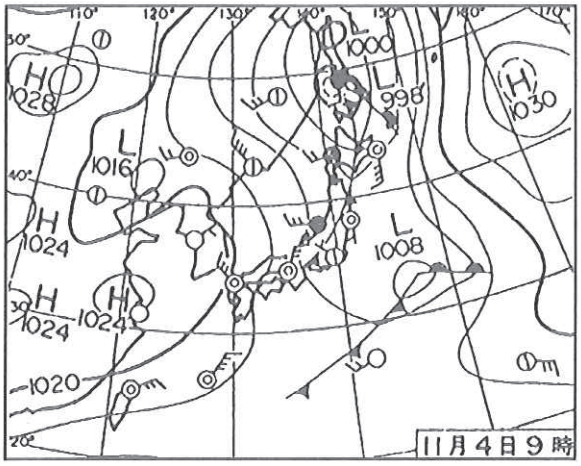


四国地方は日本海に中心を持つ移動性高気圧に覆われ，爽やかな晴天となった。だが，日本の遥か南方洋上にある台風第 17 号の影響で，沿岸海上では波が高く釣り船の転覆事故などが発生した。土用波と呼ばれる高波は，周期の異なる波と波が重なって出来るもので，1,000 波に一回くらいの割合で異常に高くなることがある。南方洋上に台風がある場合などは，特に高波が発生しやすい。

26 日 12 時 30 分頃，鳴門市里浦町の沖合い約 300m の海上で，木造船に乗って一人で釣りをしていたところ，高波を受けて転覆し行方不明となって 29 日遺体で発見された。

また，27 日 17 時 35 分ごろには，那賀郡那賀川町の堤防の上で釣りをしていた人が，単車・釣り具と共に高波にさらわれて死亡した。

1986 年（昭和 61 年）11 月 4 日～ 9 日　山火事

四国地方は華中からの移動性高気圧に覆われ，晴天が続いて空気が乾燥し，火災の起こりやすい気象状況になっていた。

4 日 15 時 30 分ごろ，鳴門市瀬戸町の山林から出火した山火事は，北西の風に煽られて燃え広がり瞬く間に山頂まで達した。火の勢は夜になって更に強まり，火は尾根伝いに燃え広がって近くの住宅地にまで迫った。しかし，延焼はくい止められ，5 日 20 時 07 分に鎮火宣言が出された。その後も，北西の風に煽られて数カ所でくすぶり続けたが，9 日になって四国の南海上を通った低気圧による雨で鎮火した。焼失面積は 32.7ha であった。